

若江遺跡発掘調査報告書Ⅰ

本文編

1982. 3

東大阪市遺跡保護調査会

は し が き

東大阪市若江本町、若江北町、若江南町一帯にかけてひろがる若江遺跡は、弥生時代から歴史時代に至る複合遺跡であり寺跡、郡衙跡、集落跡、城跡などが密集して存在すると考えられます。本遺跡は、昭和47年若江小学校校舎増築工事に伴う調査をはじめとして、公共下水道管渠築造工事、住宅建設工事など都市化に伴う各種の開発事業が行なわれ発掘調査も各地点で行なわれてきました。

今回の調査は、府道四条一長堂線の大阪外環状線と大阪中央環状線間の道路拡幅工事に伴うものであり、若江遺跡の中央を東西に横切る形で実施しました。この調査の結果、古墳時代から江戸時代に至る溝、井戸、建物跡、土壙、落ち込み等の各種の遺構と、それに伴って多量の遺物が発見されました。中でも中世集落に伴う井戸が多数発見され、中世集落の規模、推移、集落のあり方、当時の生活文化を考える上で貴重な資料となり、また溝の中には文献の中にたびたび現われる若江城の濠と思われるものもあり、若江城の位置、構造、当時の社会の様子を考える上での大きな成果が得られました。しかしながら、若江遺跡自体は広大な面積をしめており、まだまだ不明なところが数多く残っています。今後とも遺構、遺物の追求を通じて若江遺跡の全貌を明らかにしていかなければなりません。

本書が、東大阪市をはじめとする周辺地域の歴史研究の一助となり、また先人達が長い長い苦勞を通じて築き上げた文化財を現代に生きる私達の生活の中に生かされることを望むとともに、文化財保護への理解と認識を深めていただけることに役立てば幸いかと存じます。

最後に、調査の実施にあたって御協力いただいた関係機関、学生諸氏、本書作成にあたって指導、助言を賜りました方々に対し感謝いたします。

昭和57年3月

東大阪市遺跡保護調査会

理事長 秀平 勇造

例 言

- 1 本書は、東大阪市遺跡保護調査会が、昭和52年から昭和54年までおこなった府道四条～長堂線拡幅工事に伴って発掘調査を実施した若江遺跡の調査報告書である。ただし、調査において検出した遺構についての報告書であり、遺物については、昭和57年度に報告書刊行予定である。
- 2 調査は、東大阪市教育委員会の依頼を受けて、大阪府八尾土木事務所から東大阪市遺跡保護調査会への委託事業として計画し、昭和52年、昭和53年度の調査を、勝田邦夫、昭和54年度の調査を、阿部嗣治が担当して実施した。
- 3 本書の執筆は、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ－1・3・6、Ⅳ－2、Ⅴ－2、Ⅵを阿部嗣治、Ⅲ－2・4・5、Ⅳ－1・3を勝田邦夫、Ⅲ－7を中西克宏、Ⅴ－1を森田恭二、文献編を岡村多美子、浪江由美、阿部がおこなった。
- 4 本書に掲載した遺構の実測図は、調査担当者及び、調査参加者全員が作製し、製図は、川吉謙二、浦元英俊がおこなった。遺物の実測図は、松田順一郎、中西克宏、西川卓志、宮原普一、勝田、阿部が作製し、製図を、大野佳子、梅本敦子、中西がおこなった。遺物の復元は本田圭子、橋本記世子、大野、梅本がおこなった。その他、本書の作製にあたっては、吉本敬、北川好治、中西裕美、富田和代の助力があった。
- 5 本書に掲載した地区割図の地図の作製は、藤本隆、安井誠、古元秀雄、中澄幸彦が作製したものである。
- 6 本書に掲載した地図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の1/25000地形図を複製したものである。承認番号、昭57近複、第71号。
- 7 図版編に収めた写真図版のうち、遺構については各担当者が、遺物については落合信生が撮影した。
- 8 写真図版に収めた航空写真は、大阪府総合計画課より提供を受け掲載した。
- 9 本書の編集は、阿部が担当して実施した。
- 10 Ⅴ－1に収めた報文は、特に宇治市歴史史料室森田恭二氏より玉稿をいただいた。記して謝意を表すものである。
- 11 調査及び報告書作成にあたっては、下記の方々より協力、助言をいただいた。記して謝意を表すものである。

東大阪市立縄手中学校荻田昭次氏、東大阪市役所吉岡則之氏、土谷修氏、奈良国立文化財研究所中村友博氏、京都府教育委員会平良泰久氏、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター伊野近富氏、福井県朝倉氏遺跡調査研究所南洋一郎氏、広島県草戸千軒町遺跡調査研究所松下正司氏、山口市教育委員会山田義男氏、富山県教育委員会安念幹倫氏、和歌山県教育委員会上田秀夫氏、湯村平三氏。

目 次

I. 調査に至る経過	1
II. 位置と環境	2
III. 調査の概要	5
1. 調査方法	5
2. 23A22-25~24A1-8地区	5
3. 24A8-10地区	10
4. 25A12~2A10地区	13
5. 2A18-25~3A1-15地区	37
6. 1A3-25~3A1-6地区	44
7. 遺構内出土遺物	75
IV. 遺構について	95
1. 井戸について	95
2. 溝について	99
3. 堰について	101
V. 若江城について	105
1. 文献から見た若江城	105
2. 考古学から見た若江城	121
VI. 土師器皿編年試案	129
1. 編年上の基準	129
2. 編年試案	129
3. 今後の課題	131

插图目次

第1图	周边遗迹分布图	3
第2图	调查地点位置图	4
第3图	地区设定图	6
第4图	24A 4—8地区東壁断面实测图	7
第5图	井戸2实测图	8
第6图	溝2断面实测图	9
第7图	溝3・土塙1断面实测图	10
第8图	24A 8—10地区南壁断面实测图	11
第9图	溝1断面实测图	12
第10图	溝1断面实测图	12
第11图	1A 20—21地区北壁断面实测图	14
第12图	井戸3平面实测图	14
第13图	井戸5实测图	15
第14图	井戸6实测图	16
第15图	井戸7实测图	16
第16图	井戸8实测图	17
第17图	井戸9实测图	18
第18图	井戸12实测图	19
第19图	井戸15实测图	20
第20图	井戸16实测图	21
第21图	井戸17实测图	21
第22图	井戸18实测图	22
第23图	井戸19断面实测图	23
第24图	井戸21实测图	23
第25图	井戸22实测图	23
第26图	井戸23实测图	25
第27图	井戸25实测图	26
第28图	井戸26平面实测图	26
第29图	溝9断面实测图	27
第30图	溝9堰・暗渠水路实测图	29
第31图	溝14断面实测图	30
第32图	溝18断面实测图	31

第33図	溝19断面実測図	32
第34図	溝22断面実測図	33
第35図	溝23断面実測図	33
第36図	溝27断面実測図	34
第37図	土壌9実測図	36
第38図	3 A 13-15地区南壁断面実測図	38
第39図	井戸28実測図	39
第40図	井戸30実測図	40
第41図	井戸31実測図	40
第42図	井戸32実測図	41
第43図	溝29断面実測図	41
第44図	溝30・溝31断面実測図	41
第45図	溝36断面実測図	42
第46図	土壌12断面実測図	43
第47図	1 A 11-12地区南壁断面実測図	45
第48図	3 A 12-15地区南壁断面実測図	45
第49図	井戸33実測図	46
第50図	井戸34・井戸35実測図	47
第51図	井戸37実測図	48
第52図	井戸38断面実測図	49
第53図	井戸39断面実測図	49
第54図	井戸40実測図	50
第55図	溝14断面実測図	51
第56図	溝41断面実測図	52
第57図	溝42平面実測図	53
第58図	溝42断面実測図	53
第59図	土壌15断面実測図	54
第60図	落ち込み8断面実測図	56
第61図	23 A 22-25・24 A 1-8地区遺構実測図	57
第62図	24 A 8-16地区遺構実測図	58
第63図	25 A・B 12-24地区遺構実測図	59
第64図	1 A・B 4-19地区遺構実測図	60
第65図	1 A・B 19~2 A 8地区遺構実測図	61
第66図	2 A 18~3 A 1地区遺構実測図	62
第67図	3 A 2-16地区遺構実測図	63

第68図	1 A 3 -17地区遺構実測図	64
第69図	1 A 18～2 A 9地区遺構実測図	65
第70図	2 A 9 -20地区遺構実測図	66
第71図	2 A 20～3 A 6地区遺構実測図	67
第72図	遺物実測図	91
第73図	遺物実測図	92
第74図	遺物実測図	93
第75図	遺物実測図	94
第76図	大阪府四天王寺扇面法華経冊子（井戸端の図）	95
第77図	曲物計測値分布図	96
第78図	河内名所図会 卷六之三九	102
第79図	礎石建物実測図	122
第80図	若江地区字切図	123
第81図	若江城域推定図	124
第82図	中世平城分布図	128
第83図	土師器皿編年図	130

表 目 次

表 1	井戸一覧表	68
表 2	溝一覧表	72
表 3	土壌一覧表	74
表 4	遺物観察表	75
表 5	溝分類表	100
表 6	若江城関連年表	119
表 7	中世平城集成表	127

付 図 目 次

付図 1	遺構全体図
付図 2	中世集落関係遺構全体図
付図 3	若江城関係遺構全体図

I. 調査に至る経過

東大阪市南部を東西に走る府道四条～長堂線は、東大阪市の東部と西部を結ぶ生活、産業道路として重要な役割を果たしている。しかし、大阪市の衛生都市として人口の増加、産業の発展などにより現在の道路状況では機能の限界に達している。このような事情から大阪府八尾土木事務所では、昭和49年より道路の拡幅工事を計画し実施している。昭和52年に拡幅工事が若江地区においても実施する計画がなされた。当若江地区は、弥生時代から安土・桃山時代にかけての複合遺跡として本市が周知している若江遺跡が存在している地域である。

遺跡の発見は、昭和9年旧楠根川（現在の第2寝屋川）の改修工事の際、多量の弥生土器、土師器、須恵器、瓦が出土したことによって知られるようになった。さらに昭和42年に若江公民館建設工事が行なわれた際にも、土師器、須恵器、瓦などの遺物とともに井戸1基が発見されている。

発掘調査は、昭和47年に若江小学校校舎増築工事に伴う調査を実施し、井戸、溝、柱穴など鎌倉時代から室町時代の遺構と多量の遺物を検出し、若江城あるいは中世集落に伴う遺構、遺物であると考えられた。その後、昭和49年に国庫補助事業による調査を実施し、建物跡、埴列瓦溜などの遺構を検出し、これが若江城を構成する施設の一部であろうとの見解が出された。さらに昭和49年以来公共下水道管渠築造工事に伴う調査を実施し、井戸、溝、土壌、ピットなどの遺構と、土師器、須恵器、陶磁器、瓦などの遺物を検出し、これらが中世集落の一部であろうと考えられた。この調査においては弥生時代後期の安定した包含層を検出し、多数の弥生土器が出土した。

上記のような調査結果により、若江遺跡は歴史上重要な位置を占める若江城、あるいは若江寺、さらにこれに伴う中世集落の存在が明らかになりつつある。このため本市教育委員会は八尾土木事務所との協議を行なった。この結果、府道四条～長堂線は、東大阪市民の生活、商工業の発展に必要な道路として重要であること、工事対象地区が遺跡のほぼ中心部を東西に縦断するため明確な遺構、遺物が検出されることが確実であるため、工事に先立ち発掘調査を実施し、記録保存を計ることに決定した。

調査は、若江北町3丁目、南町2丁目～3丁目を対象に計2344㎡について、東大阪市教育委員会の依頼を受けて、東大阪市遺跡保護調査会が、大阪府八尾土木事務所と委託契約を交わし実施することになった。調査期間は、23A22～24A8地区2A18～3A15地区（昭和52年度分）を昭和52年11月21日から昭和53年4月8日まで、25A12地区～2A8地区（昭和53年度分）を昭和53年8月1日から12月25日まで、1A3地区～3A6地区（昭和54年度分）を昭和54年11月30日から昭和55年3月25日までそれぞれ実施した。

なお、各地区の調査面積は、23A22～24A8地区134㎡、2A18～3A15地区540㎡、25A・B12～2A8地区980㎡、24A8-16地区127㎡、1A3～3A6地区563㎡、総面積2344㎡である。

Ⅱ. 位置と環境

若江遺跡は、現在の行政区画で言えば、東大阪市若江本町、北町、南町一帯に所在する。東を生駒山地、西を上町台地、南を羽曳野丘陵に囲まれた河内平野のほぼ中央に位置している。河内平野は、縄文時代以前は生駒山麓まで海岸線がひろがっており湾をなしていたが、河川の堆積作用あるいは海岸線の後退により湾口がせき止められ、河内湖と呼ばれる淡水湖になった。その後、旧大和川、淀川の堆積作用によって沖積平野が形成され、中世から近世には深野池、新開池と呼ばれる2つの池に変貌した。旧大和川は、現在の恩智川、玉串川、楠根川、長瀬川、平野川の大小5本の河川よりなっているが、当遺跡は、これらの河川が形成した沖積平野上に位置し、標高約5mである。

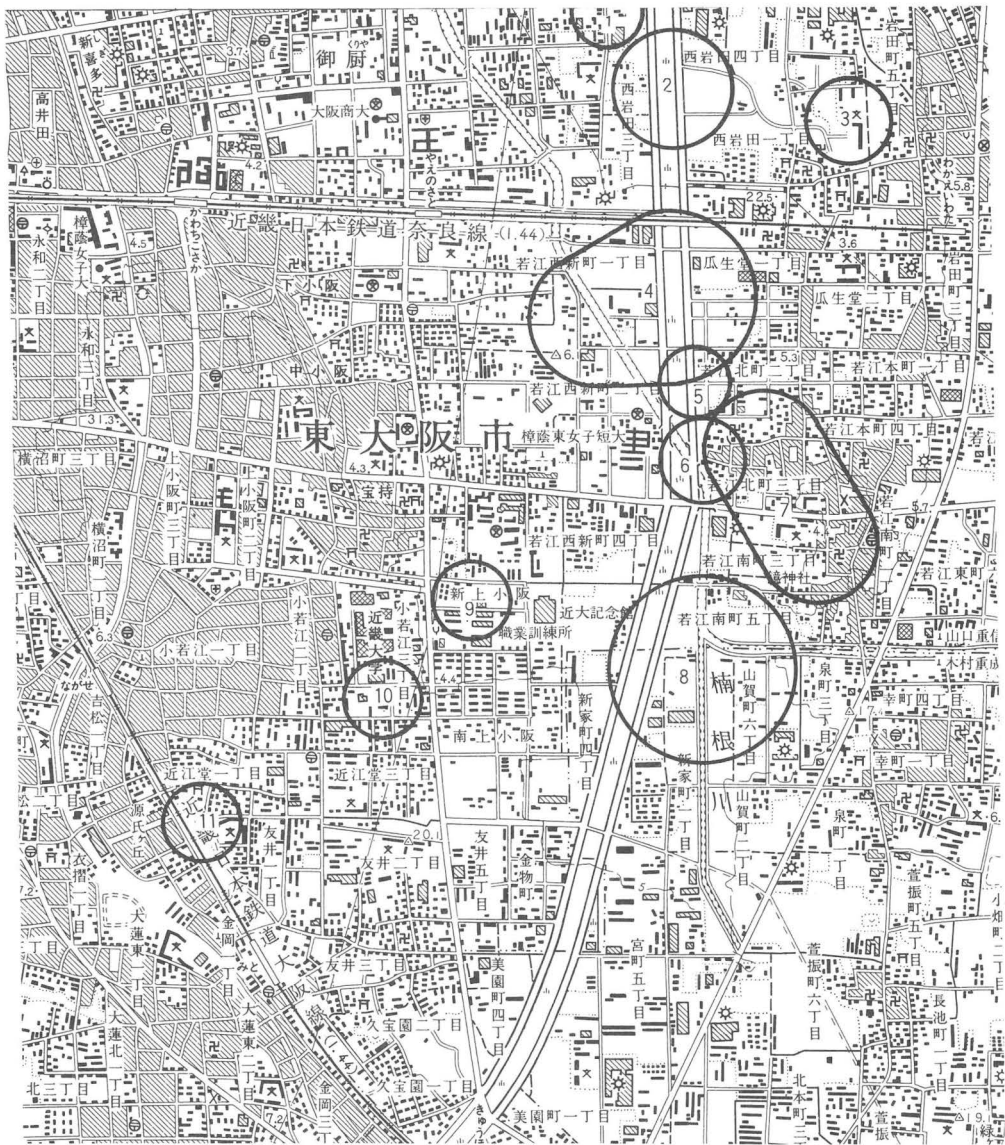
このように形成された河内平野に人々が生活を開始するのは弥生時代からである。縄文時代は生駒山麓の扇状地上に生活の場を求めていたが、弥生時代は稲作を生活の糧とするため、より低地に進出する必要があった。平野部で最も早く生活が開始された遺跡は、当遺跡のすぐ南側に隣接する山賀遺跡である。山賀遺跡のような前期の集落は、旧大和川が沖積を進めていた自然堤防上や三角州の微高地に集落を営んでいたと思われる。前期に属する遺跡で同様な立地をするのは他に、瓜生堂遺跡、高井田遺跡などがある。

中期に入ると、多くの方形周溝墓、建物群を検出し、大集落であることが解明されている瓜生堂遺跡、この時期に遺跡が大きく発展した亀井遺跡、新たに人々が生活を開始した若江北遺跡などが存在する。中期は、自然環境が比較的安定していたため、平野部、山麓部の遺跡が大規模に発展した時期でもあった。

後期は、中期に発展した大規模集落は姿を消し、遺跡自体小規模化し数を増す。その理由としては、気候や河内湖自体の自然環境の変化で集落の維持が困難な状況に追い込まれたと思われる。当遺跡にも後期の安定した包含層が部分的に存在し、この時期から若江の地にも人々が定住し始めたことがうかがえる。その他当遺跡周辺には上小阪遺跡、瓜生堂遺跡、若江北遺跡、山賀遺跡などの小規模集落が点在しており、中期末以後に瓜生堂遺跡を中核としていた大集落が分散した1つの在り方を示していると考えられる。この集落の小規模化は古墳時代に入っても変わらず、当遺跡を始めとして西岩田遺跡、瓜生堂遺跡、山賀遺跡、小若江遺跡などの集落が存在する。この時期以後、自然環境が安定化の傾向にあるにもかかわらず再び大集落が出現することはなかった。

歴史時代に入ると、瓜生堂遺跡内で「若」の墨書土器が出土していること、平安時代の建物跡が同一方向性を持って建築されていることなどから、当遺跡周辺に河内国若江郡の郡衙が存在していたと考えられる。しかしながら、郡衙に伴う古代集落の位置、古墳時代まで形成されていた小規模集落が、奈良、平安時代にどのように変化していったかは不明である。

若江の地が河内国の中心地として若江郡衙が設置された後、平安時代の元慶年間(877～885



- | | | |
|----------|-----------|-----------|
| 1. 意岐部遺跡 | 5. 巨摩廃寺遺跡 | 9. 上小阪遺跡 |
| 2. 西岩田遺跡 | 6. 若江北遺跡 | 10. 小若江遺跡 |
| 3. 岩田遺跡 | 7. 若江遺跡 | 11. 弥刀遺跡 |
| 4. 瓜生堂遺跡 | 8. 山賀遺跡 | |

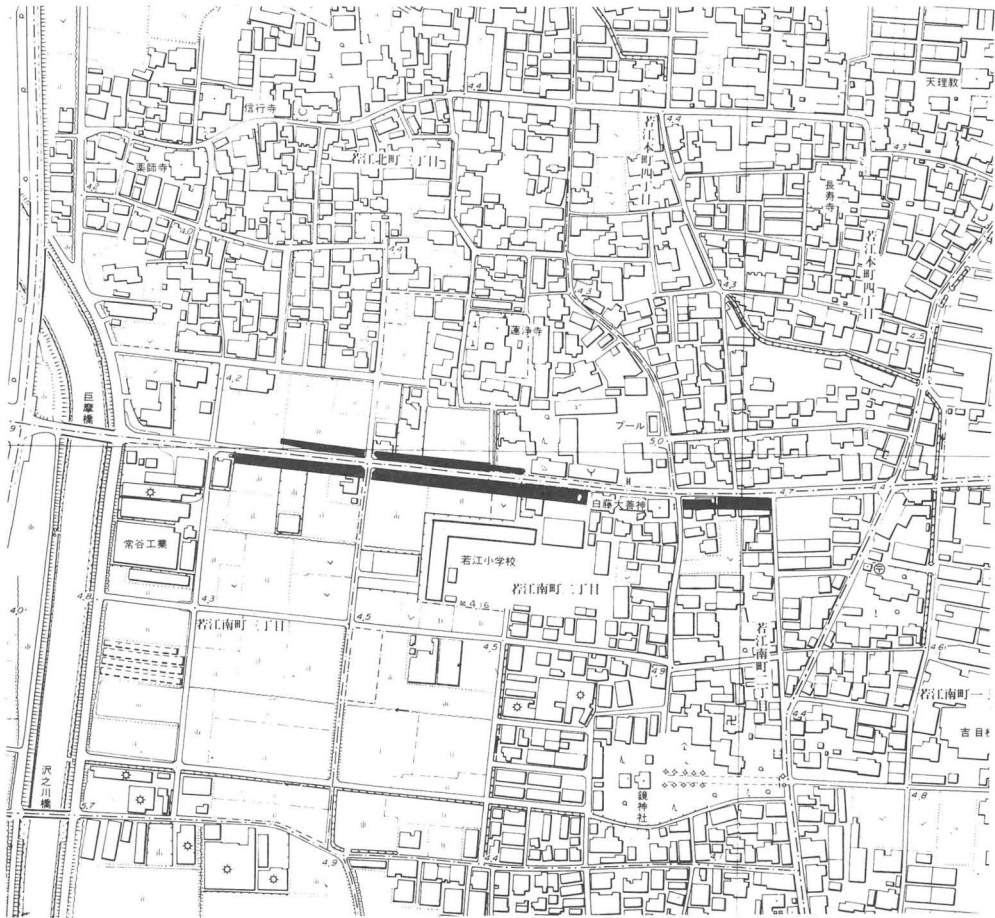
第1図 周辺遺跡分布図(1:25,000)

年)に若江寺と呼ばれる寺院が存在していたと考えられる。これは、比叡山延暦寺の座主に任じられた尊意大僧正の伝記である『尊意贈僧正伝』に記載があること、当遺跡に奈良時代から平安時代の瓦が多数出土することなどにより推定できる。この他寺院跡は、北西に隣接する平安～鎌倉時代の巨摩廃寺跡などがある。

日本史の舞台に若江の地が登場するのは南北朝時代から室町時代にかけてである。河内国支

配の拠点として、南北朝の内乱がようやくおさまった1390年代に畠山基国が河内国守護に任ぜられたころ、守護代遊佐氏の本拠として若江城が築かれている。この地が選定されたのは、歴史的に河内国の中心であり、交通あるいは行政府の中心としての条件を備えており、旧大和川と湿地に囲まれているという自然的要害がその重要な理由であろう。

上記のように、若江遺跡周辺は、弥生時代から今日に至るまで人々が永々と生活を営んできたところであり、日本史上にも登場する地である。このことは単に河内地方のみならず日本の歴史を究明する上で重要な地域であることを示している。



第2図 調査地点位置図(1/5000)

Ⅲ. 調査の概要

1. 調査の方法

調査は、道路拡幅工事に伴うものであるため、必然的に調査範囲が限定されている。さらに現在機能している道路のすぐ北側、南側での調査で、付近には民家が密集しているため、遺構の追求が非常に困難な状況下での調査であった。

調査を実施するにあたり遺跡内に恒久的な地区設定をおこなった。この地区設定は、3点の国土座標基準杭を基本ラインとして、大、小地区に分割した。大地区は、Y軸をA～Y、X軸を1～25とし、小地区は3m方眼で、Y軸a～y、X軸1～25とした。大地区、小地区の地区名は、東南隅の杭をもってその地区名とした。大地区は東西75m、南北75mであり、この中に小地区が1375地区入ることになる。以上の様な地区設定に従って遺構検出、遺物の取り上げ作業をおこなった。

なお、遺構番号は、昭和52年度の調査より始まり、昭和53年度、昭和54年度の順で記入し、各遺構の中の順序は、井戸、溝、土壇、落ち込み、ピットと続いている。例えば、井戸1、井戸2、溝1、溝2……である。Y軸(数字)は、座標北を示す。

2. 23A22-25・24A1-8地区

調査は東西17.2m、南北4.2m、東西11.1m、南北5.6mの二つのトレンチ計134.4m²について実施した。表土、近世以降の盛土、耕土を機械により掘削し、それより以下の堆積層を一層一層分層し発掘した。この地区では、井戸2、溝5、土壇2、ピットを検出した。

層序 (第4図)

現在の地表は標高6.1mで、西から東へ、南から北へやや傾斜している。基本的な層序は以下の通りである。

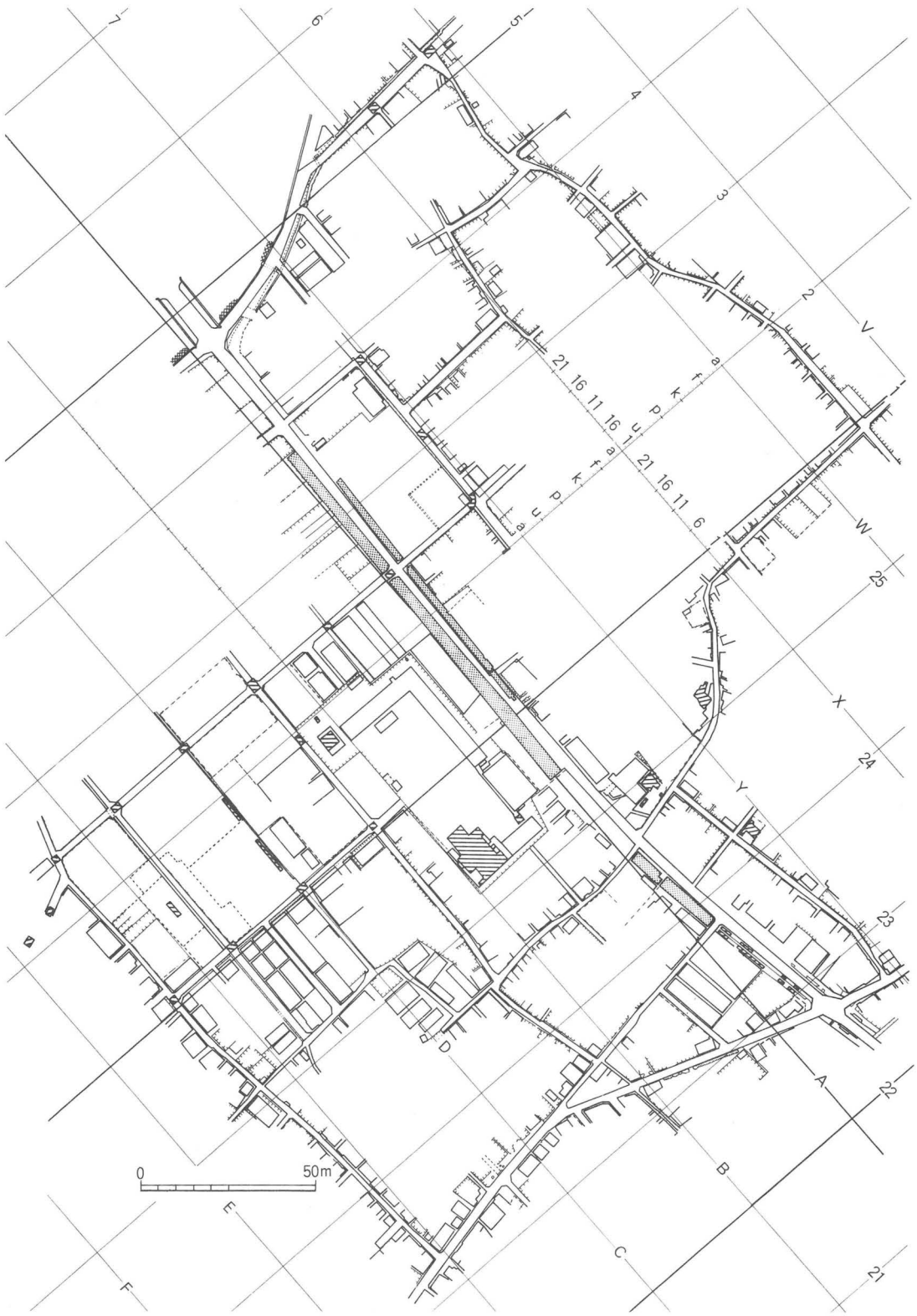
第1層 盛土 調査地全域に40cm～110cmの厚さで認められる。

第2層 暗茶褐色砂質シルト 16世紀中頃から後半にかけて大規模な整地業に伴って盛土されたもので平安時代末から室町時代後半にかけての遺物を多量に包含している。溝1、4などの遺構のベース面となっている。

第3層 暗茶褐色粘土質シルト 第2層とほぼ同時期に整地され盛土されたものであり多量の遺物を包含している。

第4層 暗茶褐色粘土質シルト混り黄褐色粘土質シルト 整地された土であるが13世紀中頃を下限とするものである。厚さ12cm～18cmでこの土を切り込んで井戸2が構築されていた。しかし井戸2の当時の生活面はこれより上にあったものと思われる。

第5層 淡黄褐色中粒砂 弥生時代後期から古墳時代にかけての遺物包含層であるが、河



第3図 地区設定図

川の流路であったところで遺物はローリングを受け摩滅している。

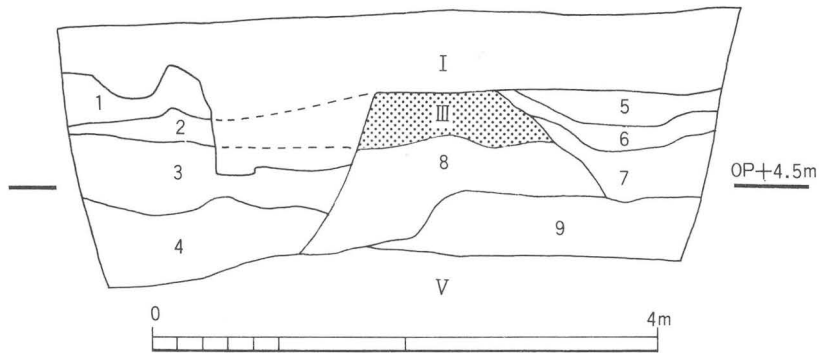
この地区の層位は人為的な手がかなり加わっているため地点により土層に大きな違いがみられる。第4図は24A 4-8地区東壁層位図である。Iは溝1、4のベース面の土層とほぼ同一であるが後世に人為的な手が加わり面としては扱えられない。しかし24A 2地区より以西については明確に扱えることができた。1-4は溝1の埋土である。特に3、4からは瓦をはじめとして弥生土器、須恵器、土師器、瓦器、青磁、白磁、須恵質陶器等の多量の遺物が出土した。5-7は溝4の埋土で瓦を中心とした中世の遺物が出土した。IIIは基本層序の第3層にあたるものである。8は溝5の埋土で奈良時代の瓦、フイゴ羽口、土師器甕を包含していた。Vは河川の流路になった時の堆積物と思われ基本層序の第5層に相当する。

24A 3地区の西端においては基本層序とほぼ同様の堆積を示しているが、東側においては様相を異にする。第2層に相当するものは小礫混り茶灰色砂質シルト、灰褐色砂質シルトであり、溝1、2、3、土壌1、2、ピットのベース面となっている。東端近くではこの上に黄褐色シルト混り灰色シルト（灰層）が堆積していた。基本層序の第3、4層は23A 22-24地区では検出されず、すぐ第5層となっている。

遺構（第61図）

井戸1

井戸1は溝1、溝2を切る長径1.74m、短径1.59mの楕円形の掘形である。井側はすでに抜き取られており構造は不明である。遺物は土師器、瓦器の細片で時期は決定しがたいが、井戸が整地層（暗茶褐色砂質シルト）の上面から切り込まれていることから室町時代の後半頃のものと思われる。井戸の埋土は上層が茶褐色砂質シルト、下層が黄灰色粘土である。この井戸の中心部には黄褐色中粒砂が径1.1mの範囲で入っており、周辺部においてもコンクリート製の井側の内側に同様の砂が入っていたことから現代に築かれた井戸の井側を抜き取った跡に砂を入れて埋めたものと思われる。現代に築かれた井戸は深く深さは確認できなかったが、室町



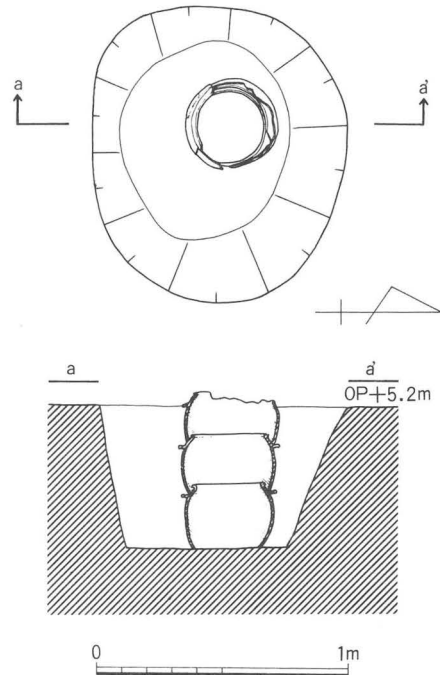
- I. 黄褐色中粒砂混り茶褐色砂質シルト 1. 黄褐色砂層
- 2. 茶灰色シルト混り極細砂 3. 茶灰色砂質シルト
- 4. 茶灰色粘土質シルト混り茶褐色砂質シルト 5. 茶褐色砂質シルト
- 6. 茶灰色極細砂混り茶褐色砂質シルト 7. 暗茶灰色粘土質シルト
- III. 暗茶褐色粘土質シルト 8. 黒茶灰色粘土質シルト 9. 褐色中粒砂
- V. 淡黄褐色中粒砂

第4図 24A-8地区東壁断面実測図

時代後半と思われるものは検出面から約1.4mで底に達する。底は長径1.1m、短径0.9mで淡黄褐色中粒砂である。現在においては湧水はみられない。

井戸2 (第5図)

掘形は上面で長径1.17m、短径1.01m、下面で長径0.75m、短径0.67mの楕円形である。井側は、土師器羽釜を3段積み上げたものである。深さは口縁部から底まで62cmである。井側に使用されている羽釜は、口径28cm、深さ26cmで煮炊用としてごく普通に用いられているものであり、それを物語るように外面に煤がたくさん付着している。羽釜の底が何らかで壊れてしまった時に底を適当な大きさに打ち欠いて、それを積み重ねることにより井側としての機能をもたせたものである。羽釜と羽釜のちょうど接する所には瓦や土器の破片を



第5図 井戸2実測図

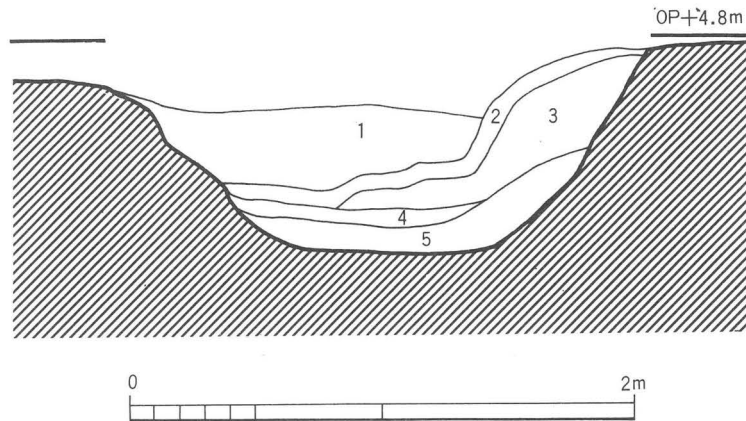
詰め込んでいる。これは羽釜を安定よく積み上げるためのものと思われるが、浄化あるいは湧水が井側内に多く入り込むことをも意図していたのかもしれない。底は淡黄褐色中粒砂であるが湧水は現在においては全く見られない。井戸の掘形からは瓦、土師器高杯、同小皿、同羽釜、須恵器片が、井戸内からは瓦器椀、土師器羽釜、同小皿が出土した。特に羽釜片が多量に出土していることから上にもう1段か2段積まれていた可能性が強い。出土遺物、井側としての羽釜から13世紀中葉から後半にかけて構築されたものと思われる。

溝1

23A22地区から24A8地区にかけて検出されたもので検出幅は2.7m、深さ1.5mである。断面はU字形で東から西に向うにつれて傾斜がゆるやかになってゆく。埋土及び堆積土は23A24w地区では上層が暗茶色砂質シルト、下層が茶褐色粗粒砂混り灰褐色細粒砂、24A7w地区では上から茶褐色粗粒砂、暗茶灰色砂質シルト、青茶灰色シルトである。このうち茶褐色粗粒砂はどの地点にもみられまた溝内の大部分を占めている。ここからは弥生土器甕、壺、土師器高杯、同小皿、同杯、同甌、同椀、同甕、瓦、瓦器椀、同羽釜、同火舎、同羽釜脚、同播鉢、同甕、須恵質陶器、須恵器、青磁椀、白磁椀などが出土しかつ一様に包含していることから短期間に埋められたものと思われる。

溝2 (第6図)

溝1、井戸1に切られている。幅2.1m、深さ0.73mで北から南にゆくにしたいが低くなっている。溝の堆積土は上から暗灰褐色砂質シルト、茶褐色砂質シルト（マンガンの沈着がみられる）小礫混り茶灰色砂質シルト、青灰色粘土、暗青灰色粘土であり各層から瓦、瓦器椀、同



1. 暗灰褐色砂質シルト 2. 茶褐色砂質シルト 3. 小礫混り茶灰色砂質シルト
4. 青灰色粘土 5. 暗青灰色粘土

第6図 溝2 断面実測図

羽釜、同火舎、同播鉢、土師器小皿、同中皿、同羽釜、須恵器、須恵質陶器、青磁碗、白磁片等が出土した。下層については徐々に堆積して埋まったものであるが上3層は人為的に埋めたものである。出土遺物は上層のものも時期差はみられず割合短期間に埋没したものと思われる。埋没した時期は16世紀中頃である。

溝3 (第7図)

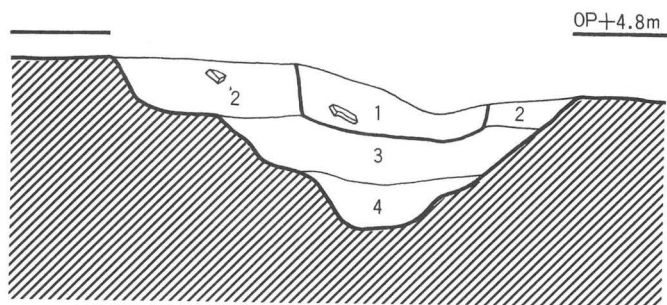
上面の幅1.8m、下面の幅0.2m、深さ0.65mでほぼ南から北に向かう。ベース面は灰褐色砂質シルトで底面は淡黄褐色中粒砂に達している。溝3の掘形はV字状で西壁は2段、東壁は3段に落ちるがいずれもゆるやかな斜面をなす。堆積土は上から灰茶色砂質シルト、褐色細砂混り灰色粘土質シルト、暗青灰色粘土であり、すべて埋まった段階で土壌1が作られている。出土遺物は瓦、瓦器碗、土師器小皿などで特に馬歯、馬骨が多く見られる。

溝4

24A4x地区から24A6x地区にかけてほぼ東西方向に走る溝で深さは東側で0.82m、西側で0.76m、東端が一番低いが一旦底が上昇したのち西側に徐々に傾斜してゆく。溝の南壁は調査地域外に延びるため幅は不明であるが、北壁は急な斜面をなす。溝内の埋土は上から茶褐色砂質シルト、茶褐色極細砂混り茶褐色砂質シルト、暗茶灰色粘土質シルトである。埋土からは瓦、瓦器片、土師器小皿片、須恵器片等が出土した。この溝は24A6地区で攪乱を受けており、この攪乱部分でおわるのかまたは南側へ曲がっていったのかは不明である。

溝5

24A4-8地区の調査地の東端を南北に走る溝で西肩のみを検出した。溝のベースは茶黄色極細砂で西壁はなだらかに傾斜して落ちる。埋土は黒茶灰色粘土質シルトであるが、この上には黄褐色極細砂、炭化物を多く含んでいる。出土遺物は多量の瓦とフイゴ羽口、土師器杯である。



1. 暗灰色粘土質シルト 2. 灰茶色砂質シルト
3. 褐色細砂混り灰色粘土質シルト 4. 暗青灰色粘土

第7図 溝3 土壌1 断面実測図

瓦は丸瓦、平瓦で焼き歪んだものや、平瓦が3～4枚重なって溶着したものなどがみられ、付近で奈良時代の瓦を焼いていたと思われる状態である。

土壌1（第7図）

検出長1.32m×0.9m、深さ0.14mの長方形を呈する浅い土壌である。溝3が埋ったのちに掘られたものである。土壌の西側肩両隅には人頭大の石がフラットな面を上にして置かれている。埋土は暗灰色粘土質シルトで、平瓦、丸瓦、土師器小皿、同中皿、瓦器椀、同火舎、須恵質陶器、馬骨が出土した。時期は遺物より16世紀中頃と思われるが12世紀前半代のものも多くみられる。

土壌2

短径0.58m、長径推定1.7m、深さ0.17mの長楕円形を呈する。肩面は平らであり埋土は茶灰色砂質シルトである。瓦、馬骨が出土した。遺構としては溝2、土壌1と同一面にありほぼ同時期に存在したと思われるが、この土壌2のみ方位が異なっている。

3. 24A 8-16地区

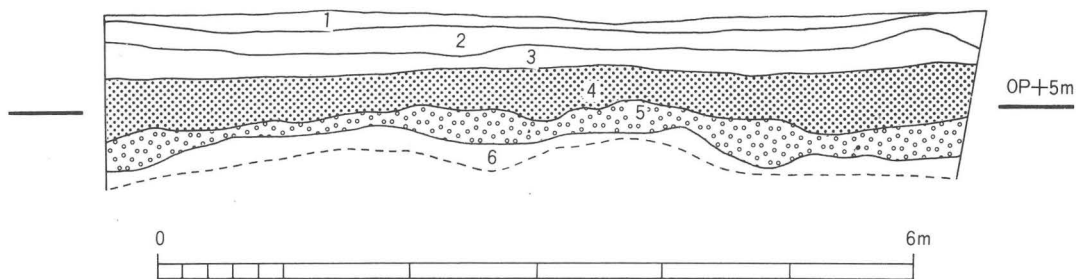
当該地区は、昭和54年度に調査を実施した。調査面積は、東西18.5m、南北7mの127㎡である。盛土約1mを機械掘削し、以下約3mまで人力掘削による調査をおこなった。

層序（第8図）

第1層 盛土

第2層 旧耕土

第3層 茶褐色砂質シルト 細粒砂から粗粒砂まで混じっているが、層自体はよくしまっている。中世から近世の遺物を若干含むが、これは、近世以後に削平された後に堆積した2次堆積の遺物包含層である。



1. 盛土 2. 旧耕土 3. 茶褐色砂質シルト 4. 暗茶褐色粘土質シルト
5. 黄灰褐色砂質シルト 6. 黄褐色粗砂

第8図 24A 8—10地区南壁断面実測図

第4層 暗茶褐色粘土質シルト 部分的に土質の相違が認められる。細粒砂を全体的に多く含んでいる。古墳時代から室町時代の遺物を多量に含む遺物包含層である。それと同時に室町時代の遺構面を形成している。

第5層 黄灰褐色砂質シルト 細粒砂が主体をなしているが、層自体は堅くよくしまっている。古墳時代から室町時代の遺物を含む遺物包含層であると同時に室町時代の遺構面を形成している。

第6層 黄褐色粗砂 若江遺跡のほぼ全体に認められる層である。弥生時代後期から古墳時代前期の遺物を流れ込みの状態を含んでいる。

当該地区は、第4層、第5層より非常に多くの遺物が出土している。どちらも自然堆積の遺物包含層ではなく、人為的に土を盛った整地層である。どちらも版築は認められないが、部分的に層質の差が顕著に認められる。第4層（整地層Ⅰ）より出土する遺物は、古墳時代、奈良時代、平安時代、鎌倉時代、室町時代の須恵器、土師器、瓦器、羽釜、陶磁器、瓦などで、最も新しい時期の遺物としては室町時代後半の土師器皿がある。従って整地した時期も、室町時代後半であると考えられる。第5層（整地層Ⅱ）より出土する遺物も、整地層Ⅰと同様であるが、時期的には室町時代前半の土師器皿が最も新しい遺物である為、整地した時期もこの時期であると考えられる。これらの整地層は、整地した時期を上限として、溝、土壇などの遺構を検出している。

遺構（第61図）

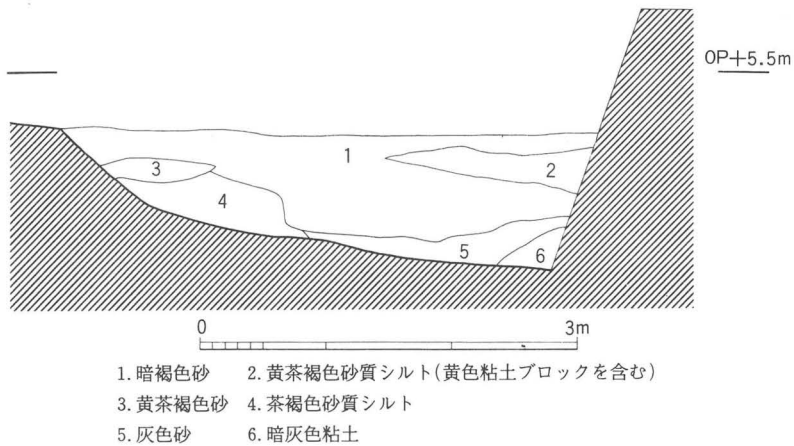
当該地区で検出した遺構は、整地層Ⅰ上面で溝1条、土壇2基、整地層Ⅱ上面で溝1条である。各遺構は、削平を受けており、残存状況は必ずしも良好であるとは言えない。

溝1（第9、10図）

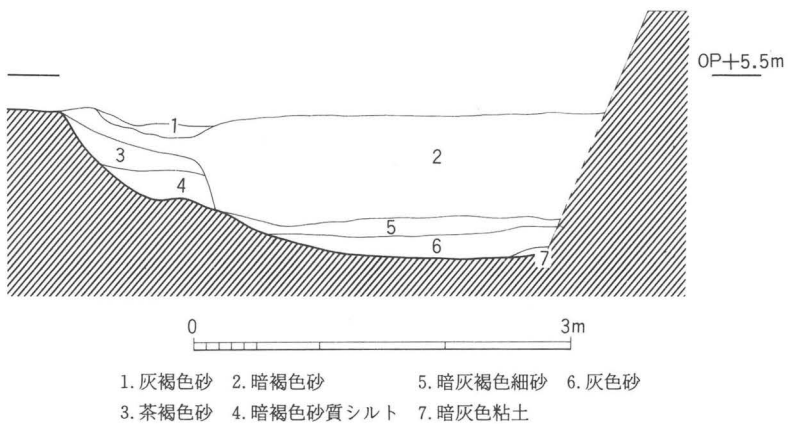
整地層Ⅰ（第4層）上面より掘り込まれている。検出幅3.96m、検出長20.4m、深さ1.2mを測り、断面深い皿状を呈し、東西方向に走る大溝である。検出したのは南肩と、底の部分約半分である。従って溝の幅を復元すれば約8m以上になると思われる。南肩は2段掘りを行っており傾斜はゆるやかである。埋土は、底の中央部をのぞいては全体的に砂層である。部分的

に相違は認められるが、これは溝を埋める時の土質の違いであろう。このことは、溝を短時間の内に埋めて廃絶したことを示していると思われる。堆積土はごくわずかで、溝の中央部のみである。暗灰色粘土が堆積しており、常時水が溜っていたことを示している。

遺物は、埋土内より非常に多く出土している。土師器、須恵器、瓦器、瓦器羽釜、陶器、中国製磁器、瓦などである。堆積土である暗灰色粘土からは、土師器、須恵器、瓦器、中国製磁器、金属製品、箸、下駄などの木製品が出土している。これらの遺物で最も新しい時期は16世紀中葉から後半の土師器皿である。埋土内、堆積内土出土の土師器皿とも时期的な差は認められない。このように遺物から見れば、溝の廃絶時期は16世紀中葉から後半である。一方、溝の掘り込み面が整地層Ⅰであることは、溝の開削年代の上限を示している。従って、溝1の機能期間は、遺物の上からでは約50年以内に納まると考えられる。



第9図 溝1断面実測図



第10図 溝1断面実測図

土壌 3

溝 1 に北半分切られている。最大幅 1.84m、最小幅 68cm、深さ 18cm を測り、断面は浅い皿状を呈している。遺物はあまり多く出土しておらず、土師器、須恵器、瓦器、陶器、瓦があり、細片が多く時期の判別できるものは少ない。しかしながら、整地層Ⅰ上面から掘り込んでいること、溝 1 に切られていることにより、15世紀末から16世紀前半代の時期を推定できる。

土壌 4

調査地西端で検出した不定形に西へ延びる土壌である。一見、溝状を呈するが、埋土の状態からみて土壌である。最大幅4.2m、最小幅1.52m、深さ30cmを測る。断面形態は、北西が2段に掘り込まれているが、逆台形を呈する。遺物は、土師器、須恵器、瓦器、羽釜、陶器、磁器、瓦器、瓦が数多く出土しているが、細片が多く時期の判別できるものは少ない。従って土壌の時期は層位関係から土壌 3 同様15世紀末から16世紀前半代であると考えられる。

溝 6

整地層Ⅱ（第5層）上面より掘り込まれている。幅1.08m、深さ30cm、検出長7.2mを測り、断面は逆台形を呈している。方向は溝 1 同様ほぼ東西方向に走っている。埋土は、暗灰色砂質シルトのみである。遺物は、土師器、須恵器、瓦器、瓦が出土しているが、細片が多く時期の判別できるものは少ない。この溝の時期は、整地層Ⅱの時期が14世紀代であるため、上限がこの時期に当るが、下限は整地層Ⅱの時期以前になる。従って、14世紀代から16世紀中葉までの間に納まると思われる。

4. 25A・B12～2A8地区

昭和53年度に実施したもので、同年8月1日から調査を開始し同年12月25日に現場作業を終了した。調査地は、若江南町2丁目の若江小学校北側で東西約150m、南北約6.5m、約980m²である。

この地区では遺構面は一面であり、同一面で平安時代後半から江戸時代中頃までの遺構を検出した。検出した遺構は、井戸24、溝21、土壌7、落込み2、ピット群である。ここでは、各遺構を種類ごとに順次記述するにとどめ、時期別の組合せやその変遷、遺構の考察については後の章にゆずる。

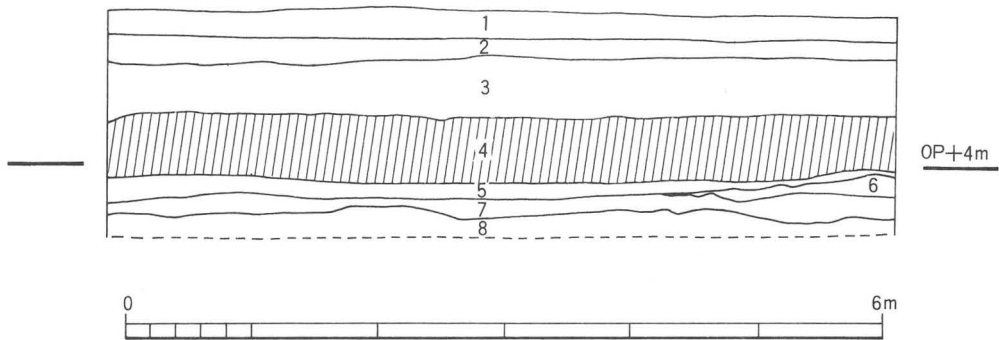
層序（第11図）

調査当初の地表は、東端、西端とも標高5.6m、中央部で標高5.2mと中央部がやや低い傾向にある。基本的な層序は以下の通りである。

第1層 盛土 現代層で調査地の約半分の地域に20cm～60cmの厚さで認められる。

第2層 耕土 1A4地区以西に存在するが、以東は一時住宅が建っていたためか存在しない。

第3層 茶灰色砂質シルト 平安時代後期から江戸時代にかけての遺物を多量に含む遺物



1. 盛土 2. 耕土 3. 茶灰色砂質シルト 4. 淡茶褐色砂質シルト 5. 淡灰色粘土
6. 茶褐色中粒砂 7. 青灰色粘土 8. 淡青色細粒砂

第11図 1 A20-21地区北壁断面実測図

包含層で、調査地全域に12cm～70cm、平均40cmの厚さで認められるが、東部で厚く、西にゆくにしたがい薄くなる傾向がある。

第4層 淡茶灰色砂質シルト 平安時代中期以前に旧大和川の一つ楠根川の氾濫原、後背湿地で徐々に堆積したものと考えられる。詳細にみると茶灰色細粒砂、淡灰色シルトなどほぼ水平に堆積しており分層が可能である。この層の上面が遺構面であり、平安時代後期から室町時代後期にかけての各種遺構を検出した。無遺物。

第5層 淡灰色粘土

第6層 茶褐色中粒砂

第7層 青灰色粘土

第8層 淡青灰色細粒砂 湧水層であり、ほとんどの井戸がこの層にまで達しているが水質はいわゆる鉄気の水であり、あまりよいとはいえない。

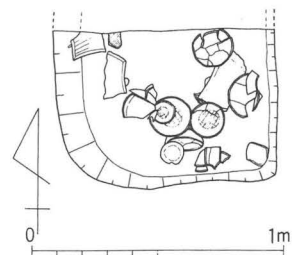
遺構 (第63・64・65図)

井戸3 (第12図)

底面が一辺0.73m、底面の標高3.1mで、方形素掘りの井戸である。上部を落ち込み1により削られているため深さは不明であるが付近の遺構面の標高からすれば1.8～1.9mあったと思われる。井戸内は暗灰色粘土質シルトが底面から0.57mまで堆積しており、完形あるいは完形に近い瓦器椀6個体、完形の土師器大皿2個体、同小皿1個体、完形の瓦器小皿2個体と破片の土師器小皿、同羽釜、瓦器椀、平瓦、須恵器が出土した。出土遺物の主体が12世紀中頃に限定されることからごく短期間だけ機能していたものと思われる。底は淡青灰色細粒砂層であるが現在の湧水はごくわずかである。

井戸4

落ち込み1により上部の大半を切られており残存はわずかである。底面の長径0.75m、短径0.57mの楕円形の掘形である。現存



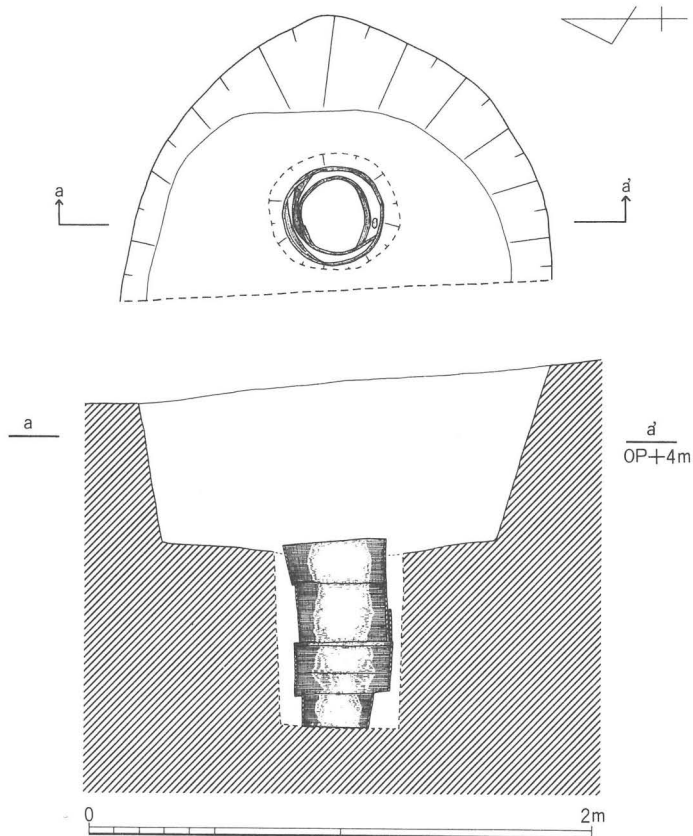
第12図 井戸3平面実測図

の深さ0.34mで底面の標高は3.06mである。井戸内の堆積土は暗灰色粘土で、完形の瓦器椀2個体と須恵器片、平瓦片、自然石が若干出土した。出土遺物は井戸3とほぼ同時期であり12世紀中頃に同時に存在し、ほぼ時期を同じくして廃絶したものと思われる。井戸の底は井戸3と同じく淡青灰色細粒砂層で底に4～5cm水が溜まる程度の湧水である。

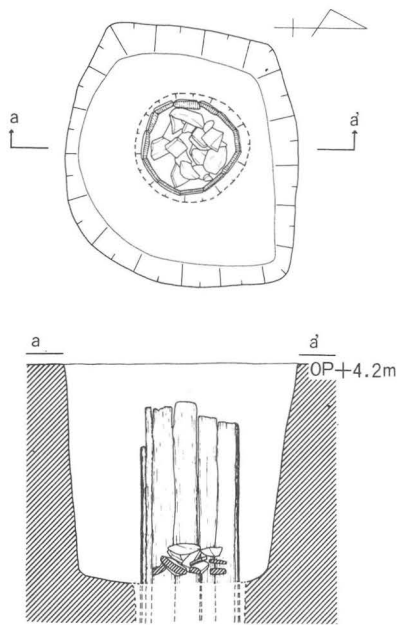
井戸5（第13図）

掘形は溝7によって切られているが、復元すると直径が上面で約1.7m、下面で約1.45m、深さが約1.64mをはかる。掘形の中央に曲物を4段組み井側とする。曲物の直径と深さは上からそれぞれ41cm、18cm、36cm、24cm、39cm、21cm、28cm、13cmである。遺構検出面から曲物井側の上面まで0.62mあり、あと3～4段の曲物が上に積まれていたものと思われる。湧水層は標高3.86m以下の淡青灰色細粒砂層であったと思われるが現在は枯渇しており湧水はない。曲物内からは完形の土師器小皿2点をはじめとして土師器羽釜、同大皿、瓦器椀、同羽釜脚、須恵質陶器練鉢の破片が少し出土した。井戸の埋没時期は出土遺物から12世紀前半頃と思われる。

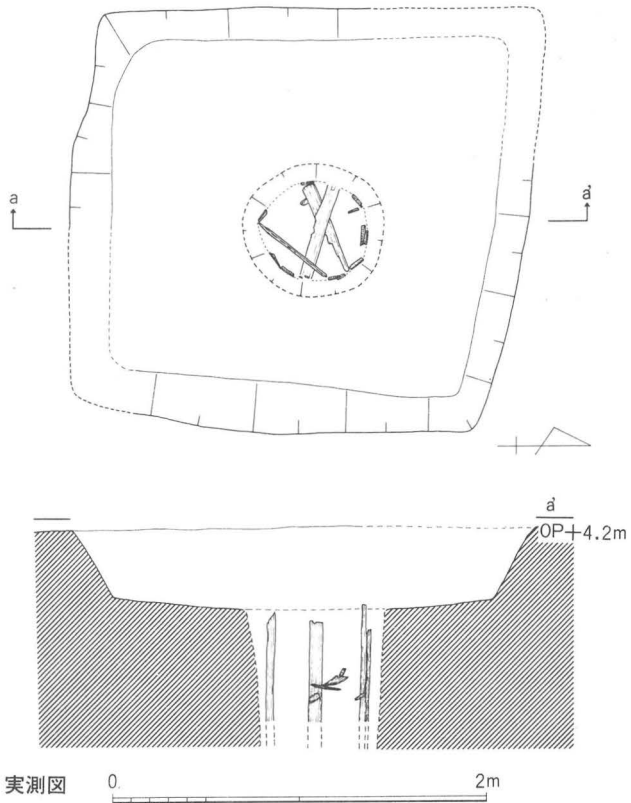
井戸6（第14図）



第13図 井戸5実測図



第14図 井戸6実測図

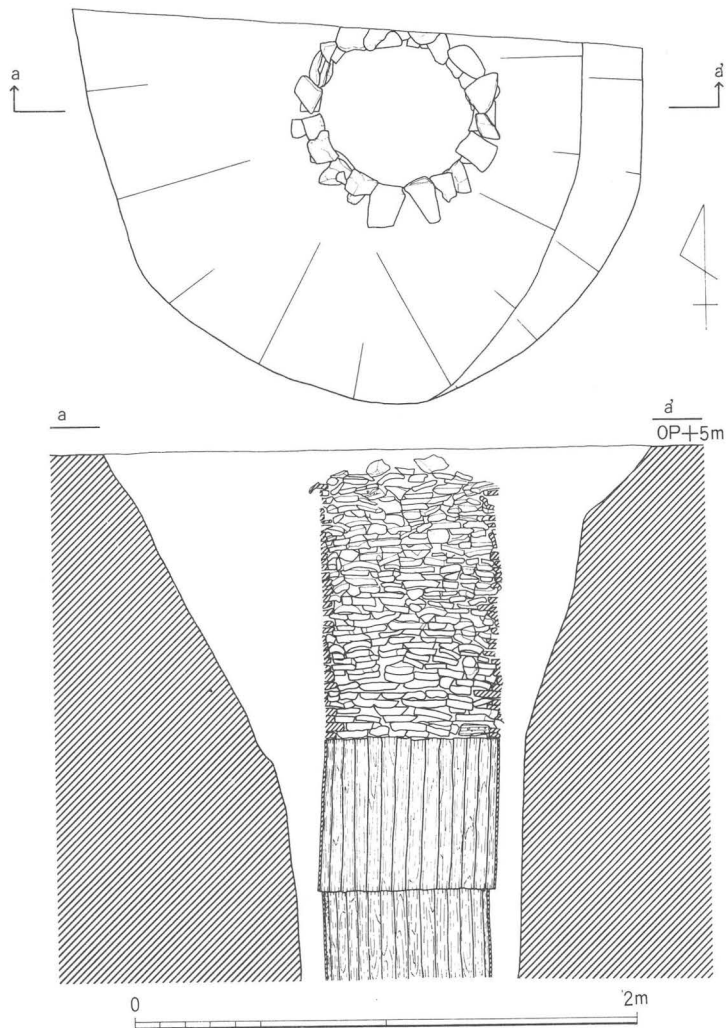


第15図 井戸7実測図

当初は掘形が不明確でどのような遺構になるのか明らかではなかったが調査を進めるうちに井戸7を切る井戸であることがわかった。掘形は上面が $1.37\text{m} \times 1.24\text{m}$ 、下面が $1.08\text{m} \times 1.03\text{m}$ の隅丸方形で中央に桶製の井側を置く。桶側は幅 $10.5\text{cm} \sim 15\text{cm}$ (平均 13cm)、厚さ $3\text{cm} \sim 4.5\text{cm}$ (平均 3.9cm)、長さ $102\text{cm} \sim 126\text{cm}$ (平均 113cm)の板材を縦に並べ直径 53cm の桶としたものである。板材は底から上に $10.5\text{cm} \sim 13.5\text{cm}$ のところに縦 $5\text{cm} \sim 7.5\text{cm}$ 、横 $5\text{cm} \sim 7\text{cm}$ の方形の枘穴がある。このことから建築材を転用して井側としたものであることがわかるが、板材は正円になるように弧状に曲面加工しており仕上げは丁寧である。井戸の検出面より 0.96m 掘り進んだ所では $10\text{cm} \sim 19\text{cm}$ 大の焼けた花崗岩や閃緑岩、凝灰岩、平瓦、丸瓦、瓦器椀、同羽釜脚、土師器羽釜、同小皿がまとまって出土した。焼けた自然石がたくさん出土したが配列は整然としたものではなく、また土器片類が石の間に挟まった形で出土していることから井戸が廃棄された時に投げ込まれたものと思われる。井戸底の標高は 2.69m 、淡青灰色細粒砂である。

井戸7 (第15図)

上面が $2.27\text{m} \times 2.47\text{m}$ 、下面が $1.84\text{m} \times 2.03\text{m}$ 、深さ 1.05m の長方形の掘形の中央にさらに深さ 54cm の円形の掘形を掘り、曲物と桶製の井側を置く。桶側は幅 $5\text{cm} \sim 10\text{cm}$ 、厚さ $0.6\text{cm} \sim 0.8\text{cm}$ 、長さ $49\text{cm} \sim 63\text{cm}$ の板材を縦に並べ直径 54cm の円形になるように組んだものである。これは井戸6にみられるような枘穴はなく加工もされていない。曲物は2段あり直径と深さはそ



第16図 井戸8実測図

それぞれ上から36cm、28cm、33cm、24cmである。井戸の底の標高は2.63mで淡青灰色細粒砂層である。井戸内からは瓦器椀、同羽釜脚、同小皿、瓦、土師器小皿、同中皿、須恵器、須恵質陶器甕、板材が、掘形からは五輪塔のスタンプ文を押した平瓦をはじめとする瓦類、瓦器椀、同羽釜脚、同小皿、同練鉢、同甕、土師器小皿、同大皿、同羽釜、同高杯、須恵質陶器、須恵器、青磁椀、火を受けた凝灰岩、木片、曲物片が出土した。出土遺物から13世紀の中頃に廃絶したものと思われる。

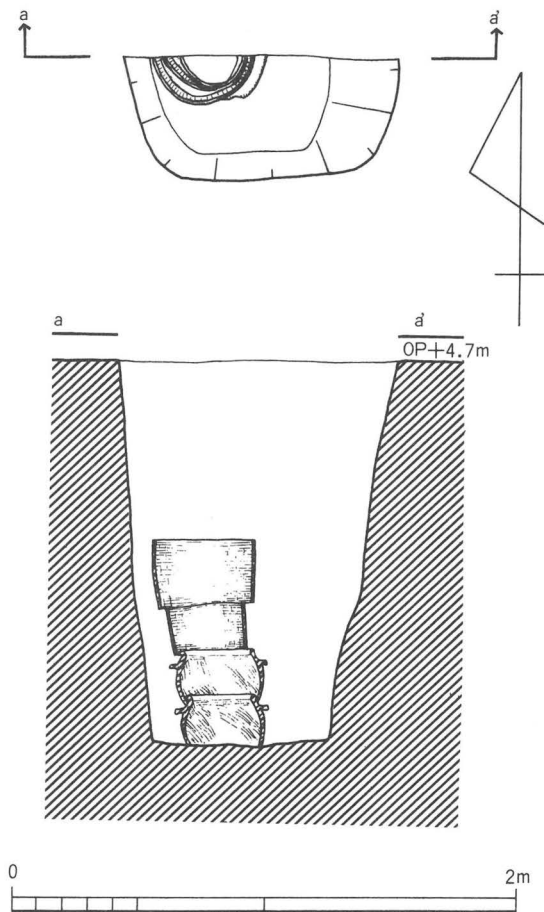
井戸8（第16図）

直径2.3mの円形の掘形の南側3/5を検出した。井側は掘形のはほぼ中央に据えられており、下が桶側2段、その上に瓦片や石、土器等を積み上げた瓦積井戸である。桶側は幅6cm～8cm、厚さ0.7cm～0.8cm、長さ60cmの板を28枚使用し直径約70cmの円形に組み上げたもので、外面は

上、下で竹製のタガによって締められている。上部の瓦積みは深さ1.1mにわたって平瓦、丸瓦、軒平瓦、瓦器火舎、同甕、須恵質陶器、石など付近で簡単に手に入る材料を用い、上部にゆくにしたいが徐々に径をせばめながら積み上げている。この瓦の中には正平十二年の紀年銘入りの丸瓦、中井と思われるスタンプ文、花文のスタンプ文が入った平瓦、奈良時代の扁行唐草文軒平瓦、鎌倉時代の巴文軒丸瓦、鬼瓦などが含まれている。井戸の底には径50cmの瓦器の甕あるいは火消し壺形の土器の破片を敷きつめており、湧水の浄化を意図していたのではないと思われる。井戸の深さは検出面から2.35mあり底の標高は2.55mである。井戸内の埋土は上層が黄褐色砂質シルト、下層が灰色砂質シルトで、下層から瓦、瓦器椀、同小皿、同火舎、土師器小皿、同大皿、同羽釜、須恵器、青磁椀が出土した。出土遺物から16世紀に廃絶したものと思われる。

井戸9（第17図）

上面が一辺1.2m、下面が0.86mの隅丸方形の南側をを検出した。井側は中央よりやや西寄りに羽釜と曲物を置く。下が羽釜2段積みで羽釜の大きさは、口径、深さが上からそれぞれ21cm、18cm、23cm、19cmである。羽釜の上には曲物が現存で2段ある。いずれも腐食が激しく残存は非常に悪い。曲物の大きさは上が直径40cm、深さ26cm、下が直径28cm、深さ19cmである。遺構検出面から曲物の上面まで0.7mあり、あと3～4段上に積まれていたものと思われる。井戸の深さは検出面から1.52m、標高は3.09mである。底は淡青灰色細粒砂層で現在でもわずかであるが湧水はある。井戸内からは瓦、瓦器椀、同羽釜脚、同練鉢、土師器羽釜、同小皿、須恵器杯身、青磁椀、桃の種、鳥の骨、木片が、掘形からは瓦、瓦器椀、同羽釜脚、須恵器、土師器羽釜、同小皿、木片が出土した。井戸内出土の瓦の中には五輪塔のスタンプ文を押印した平瓦があった。出土遺物、井側に使用されている羽釜より13世紀後半頃に存在したものと思われる。



第17図 井戸9実測図

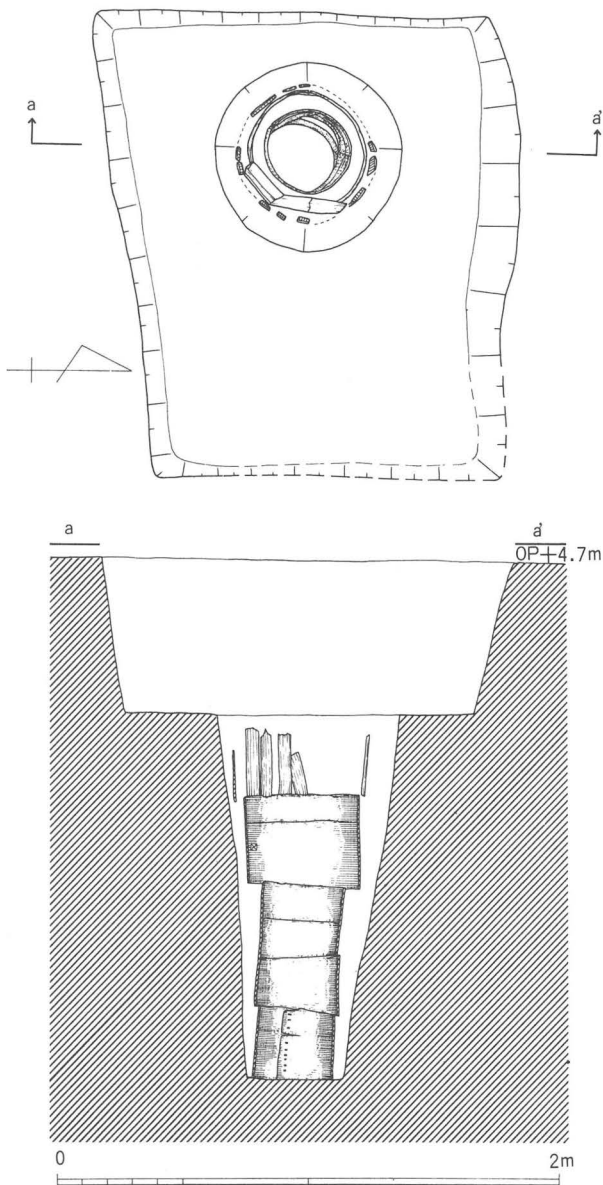
る。

井戸10

上面が0.9m、下面が0.48mの方形の掘形をもつ。東側 $\frac{1}{4}$ が溝9に切られている。深さは0.69mである。井側は全く検出されず素掘りの井戸と考えられなくもないが、土質からすれば井側がなければ井戸壁が崩れるため曲物などの井側があったものと思われる。掘形内からは瓦器椀、土師器小皿、同羽釜、須恵器の細片が少量出土した。土師器が細片であるため正確な年代は決定できないが他の遺物で見限り廃絶は12世紀後半頃と思われる。

井戸11

上面の直径約1.9m、下面の直径約1.63m、深さ1.6mの円形の掘形をもつ。掘形はほぼ垂直に近く掘り下げている。井戸の底の高さは標高3.34mで淡青灰色細粒砂である。埋土は検出面から38cm下までが灰色砂質シルト混り黄褐色砂質シルト、それより以下は黒灰色シルト混り灰色粘土質シルトである。前者からは土師器小皿、同大皿、同羽釜、瓦器椀、同火舎、同練鉢、同羽釜、同甕、同播鉢、同羽釜脚、同小皿、瓦、須恵器、須恵質陶器、備前焼播鉢、白磁椀、青磁椀が、後者からは瓦、瓦器火舎、同羽釜、土師器小皿が出土した。特に前者では土師器が出土点数の6割強を占める。下層の瓦の中には鎌倉時代の左廻り三巴文軒丸瓦が2点含まれていた。この井戸も井戸10と同じように井側は検出されなかったが何らかの井側が存在したと思われる。埋土内に井側を使用したと思われる部材等が出土しなかったため何をしていたのかはわからない。井戸の埋没した時期は出土遺物から16世紀後



第18図 井戸13実測図

半頃である。

井戸 1 2

上面が一辺1.73m、下面が一辺1.49mの方形の掘形の南側約半を檢出した。深さは確認できなかったが1.02m以上ある。検出面から約0.5m下で淡青灰色細粒砂層に変わるため使用していた当時は湧水は豊富であったと思われる。井側は調査区域外にあるため確認はできなかった。掘形内の埋土は淡茶灰色粘土質シルト混り暗灰色砂質シルトで平瓦、瓦器椀、同羽釜脚、土師器小皿、同羽釜、青磁片が出土した。構築された年代は14世紀前半頃と思われる。

井戸13 (第18図)

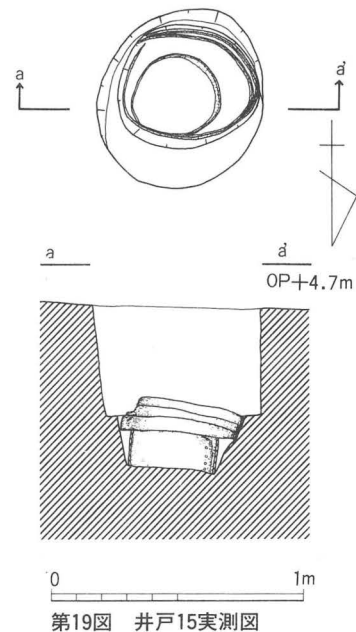
2段掘りの掘形をもつ。上段は検出面より0.61m掘り下げている。上面は1.83m×1.64m下面は1.75m×1.39mの逆台形の掘形で北東部を井戸11により切られている。下段は曲物井側より少し大きめの掘形であり上面は直径0.73m、底面は直径0.38mである。曲物井側は5段あり直径、深さは上からそれぞれ45cm、38cm、33cm、15cm、32cm、16cm、33cm、24cm、32cm、29cmである。曲物の最上段のさらに上には縦板を並べた桶側があったようであるが部分的にしか残っていない。残存している縦板は幅4cm~13cm、厚さ0.6cm~0.8cm、長さ21cm~40cmの板材を直径54cmの円形に並べたものである。井戸の深さは検出面から2.05mあり標高は2.58mである。埋土は検出面から1.35mまで淡茶灰色砂質シルト混り茶褐色砂質シルト、それより以下が細礫混り灰色中粒砂である。前者からは瓦器椀、同甕、同羽釜、瓦、土師器小皿、同羽釜、須恵質陶器、須恵器片、白磁片、後者からは瓦、瓦器椀、土師器小皿が出土した。両者には型式の差がみられず14世紀前半頃に埋没したものと思われる。

井戸14

1 A 7 Y 地区で檢出した。井側の上部はすでに破壊されており下部だけ檢出した。曲物2段がかるうじて痕跡をとどめていた。上段は直径0.4m、深さ0.25m、下段は直径0.4m、深さは残存しているもので0.14mであった。掘形は曲物より少し大きくしただけである。井戸内の埋土は暗灰色砂質シルトで土師器羽釜が大半をしめ、その他に瓦器椀、黒色土器椀、瓦、土師器小皿、同中皿、須恵器、自然石が少量出土した。羽釜は口縁部の形態から12世紀後半から13世紀前半に、瓦器は13世紀後半から14世紀前半に比定されるものである。

井戸15 (第19図)

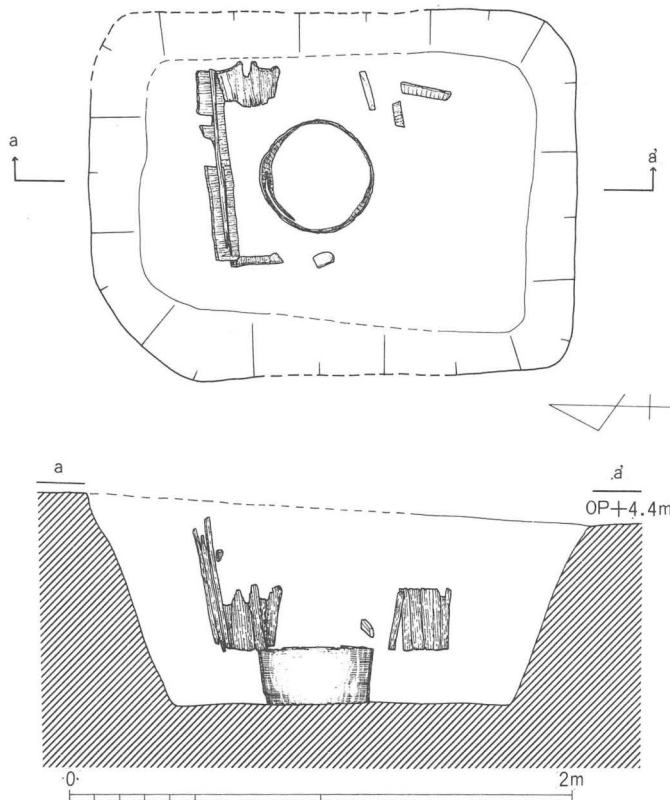
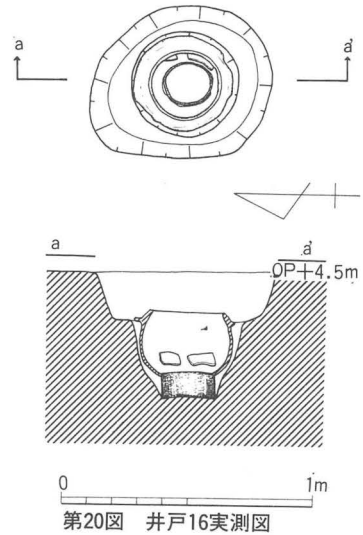
検出面での長径0.76m、短径0.66m、底面での直径0.36m、深さ0.65mの掘形をもつ。井側は曲物で2段分が残存していた。上段は直径0.45m、深さ0.14m、下段は直径0.35m、深さ0.19mである。検出面から曲物の上



面まで0.36mあることから曲物があと2〜3段あったものと思われる。井戸内の埋土は上から暗灰褐色砂質シルト、灰褐色砂質シルト混り黄灰色砂質シルトであり土師器片、内黒の黒色土器、瓦器椀、瓦、須恵器、須恵質陶器が少量出土した。底の標高は3.79m、淡黄褐色中粒砂であるが湧水は全くない。

井戸16 (第20図)

上面の直径0.75m、下面の直径0.22m、深さ0.5mの掘形の中央に井側を置く。最下段は直径21cm、深さ10cmの曲物でその上に口径23cm、深さ26cmの土師器羽釜を置く。井戸内の堆積土は上から灰色シルト、茶灰色細粒砂、細礫混り茶褐色中粒砂で曲物容器、瓦器椀、土師器羽釜、同小皿が出土した。底の標高は3.95mで淡黄褐色中粒砂であるが湧水はない。井戸16は切り合



第21図 井戸17実測図

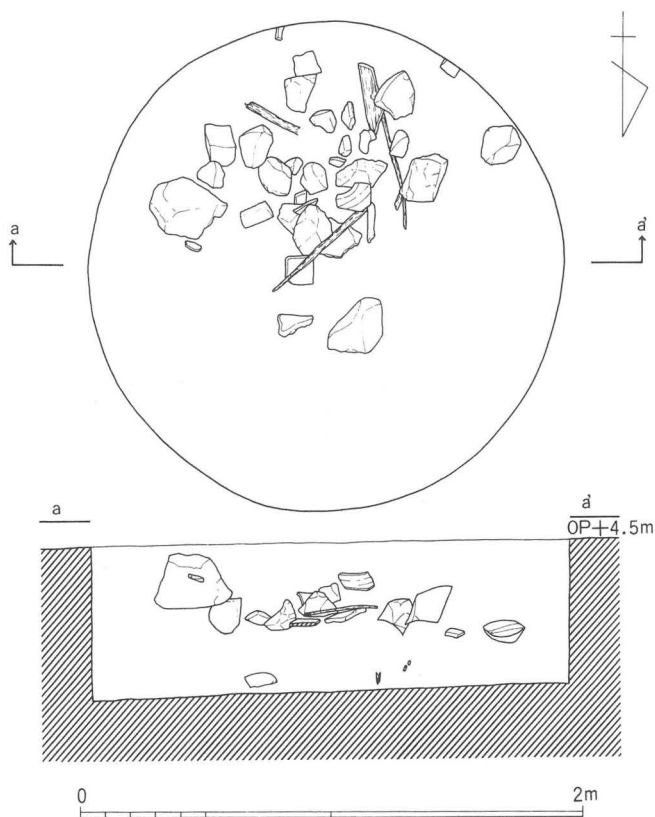
い関係から井戸17の後で溝16に先だって構築されたものであることがわかる。土師器羽釜などから13世紀後半のものであろうと思われる。

井戸17 (第21図)

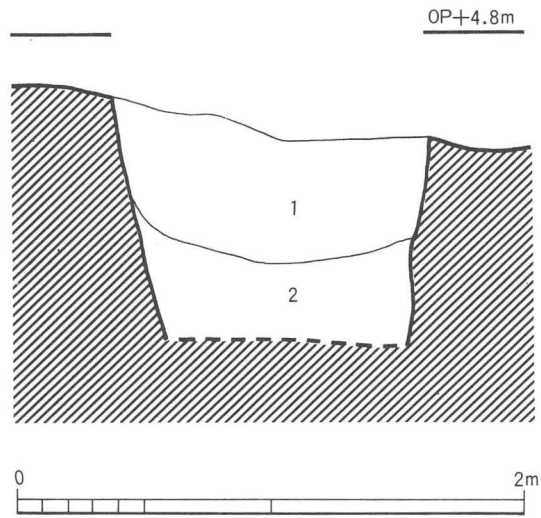
井戸16、溝16によって掘形、井側を切られている。底面が1.54m×1.08mの長方形の掘形に曲物と方形横棧の井側を置く。曲物は直径47cm、深さ22cmである。方形横棧の井側は大部分が溝16によって破壊されているが復元すると一辺0.8mの方形になり、残存しているものでは幅16cm～20cm、厚さ0.6cm、長さ55cmの板材を、幅5cm、厚さ3cmの横棧の外側に沿って縦に並べている。現存の井戸の深さは0.82mで井戸底の標高は3.55mである。井戸内からは瓦、土師器小皿、同羽釜、須恵器、黒色土器、瓦器椀が出土した。廃絶期は遺物より13世紀後半と思われる。

井戸18 (第22図)

溝16、17を切る井戸で直径1.92mのほぼ正円を呈する掘形である。掘方はほとんど垂直に切り込んでいる。井側は検出されなかったが、上面から0.1m～0.4mの間で拳大から人頭大の花崗閃緑岩や石英閃緑岩、黒雲母花崗岩などの大礫、瓦、瓦器椀、土師器小皿、同羽釜、備前焼

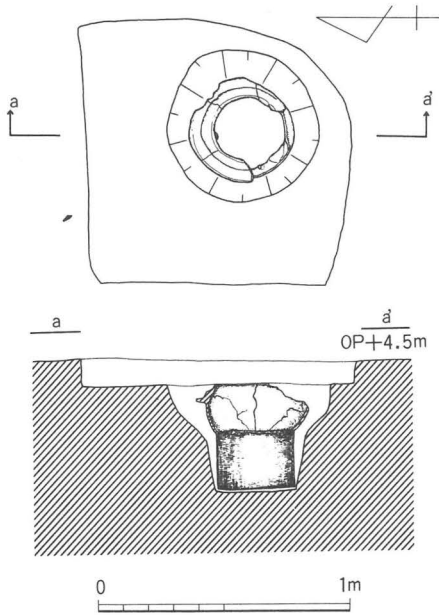


第22図 井戸18実測図

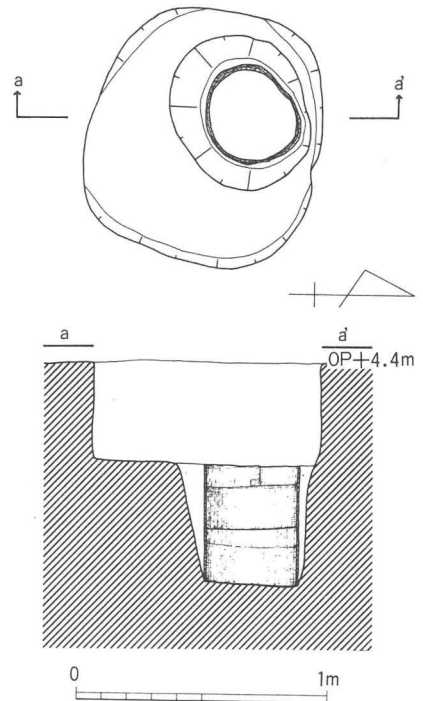


1. 灰色粘土質シルト 2. 淡茶褐色中粒砂混り灰色粘土質シルト

第23図 井戸19 断面実測図



第24図 井戸21実測図



第25図 井戸22実測図

播鉢、青磁椀、板材が、また0.75m下で竹製のタガが出土した。このような状態から考えると、井戸6、7、26と同様に桶側の井戸であったと思われる。しかし廃絶時に板材など抜き取ったため板材の一部とタガだけが残っていたものと思われる。掘形内の埋土は上から細礫混り灰褐色砂質シルト、灰褐色砂質シルト混り茶褐色中粒砂で、底は淡黄褐色中粒砂、標高は3.61m、湧水はみられない。廃絶した時期は16世紀後半である。

井戸19（第23図）

上面の直径1.25m、下面の直径0.95m、深さ約1mの掘形の南側半分を検出した。埋土は灰色粘土質シルト、淡茶褐色中粒砂混り灰色粘土質シルトで瓦、両雲母花崗岩が出土した。

井戸20

上面の直径2.35m、深さ0.86m、ほぼ垂直に近く切り込まれた掘形の南側を掘出した。掘形の埋土は灰褐色シルト、褐色砂質シルトで土師器小皿、同大皿、同羽釜、同高杯、瓦器椀、同火舎、同甕、同羽釜脚、須恵器、須恵質陶器練鉢、備前焼播鉢、瓦、花崗閃緑岩が出土したが大部分は土師器小皿が占めている。底は淡黄褐色中粒砂で標高は3.51mであるがほとんど湧水はみられない。この井戸は井側が全く検出されなかったが出土遺物のほとんどが日常生活雑器であること、現在では湧水はみられないが、当時としては湧水層となりえる淡黄褐色中粒砂まで掘り込んでいることから井戸として扱った。

井戸21（第24図）

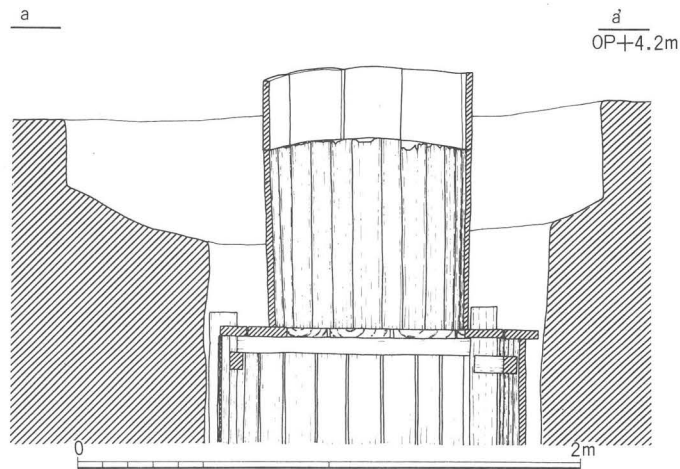
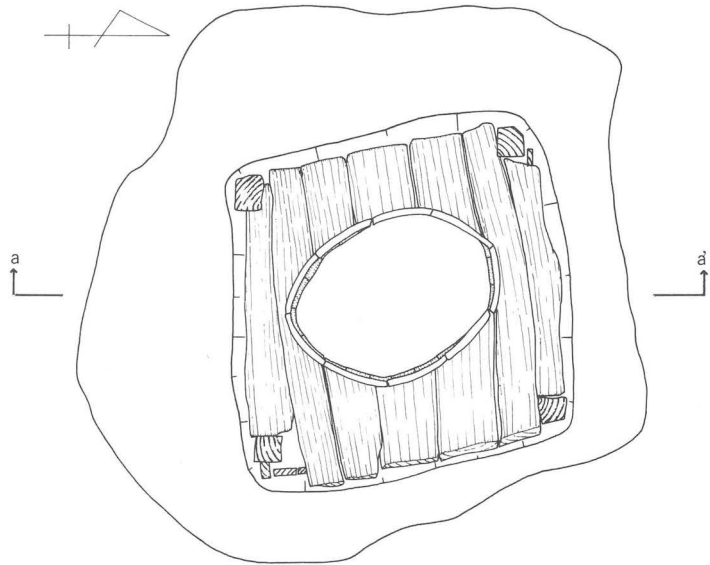
一辺約1mの方形の掘形の東寄りに曲物と土師器羽釜よりなる井側を置く。曲物は直径31cm、深さ26cm、羽釜は口径24cm、深さ20cmである。掘形は検出面から0.1m掘り下げたあと上面径65cm、底径33cmの円形の掘形を穿つ。検出面から底までは52cm、底の標高3.86m、底の土層は淡黄褐色中粒砂で1時間で底から2cmまで湧水がみられた。井戸内の堆積土は上が灰色粘土質シルト下が淡茶灰色中粒砂で、高台が消滅した瓦器椀、同羽釜脚、土師器小皿、同羽釜、平瓦、須恵器、須恵質陶器、木の葉が出土した。出土遺物から14世紀前半に存在したものである。

井戸22（第25図）

二段掘りの掘形をもつ。地面より長径104cm、短径90cm、深さ40cmに一旦掘りくぼめたあと、その掘形の北西寄りにさらに直径56cm、底径38cm、深さ47cmの掘形を掘り曲物の井側を置く。残存している曲物は2段であり、上が直径約38cm、深さ26cm、下が直径38cm、深さ21cmである。検出面から底面までは88cmで淡青灰色細粒砂層に達している。底面の標高は3.45m。井戸内の埋土は上から褐色細粒砂混り灰褐色砂質シルト、淡灰褐色細粒砂で前者からは瓦器椀、土師器小皿、同大皿、瓦、須恵質陶器、須恵器、瓦器羽釜脚が、後者からは土師器小皿、瓦器椀、須恵器が出土した。出土遺物から14世紀後半頃に廃絶したと思われる。

井戸23（第26図）

溝23が完全に埋まった段階で構築されたものである。上面が2.14m×2.04mの不整形な方形を呈する掘形をもつ。井側は3段階に分けられる。最下段は四隅に一辺10cm前後の角柱を1.1m間隔に置き、それに枘穴を穿って横棧をわたし、その横棧の外側に沿って幅9cm～34cm、厚さ



第26図 井戸23実測図

3 cmの板を縦に並べている。縦板の上部には、中央部に円形の穴があくように加工された厚さ3 cmの板材を置き並べている。中段はこの厚板の上に、幅7 cm～13 cm、厚さ2 cm、長さ90 cmの板を22枚並べ、外面の上下を竹製のタガで締めた、84 cm×66 cmの楕円形の桶側（もとは円形であったものと思われる）をのせている。上段はこの桶側と同じ大きさになるように縦30 cm、横25 cm、厚さ2 cm～3 cmの平瓦を9枚並べて井側としている。湧水のため完掘することができなかったが調査できた範囲では深さ1.2 mあり、最終的には2 mを越えるものと思われる。井戸掘形の埋土はシルト混り灰色粘土でここからは土師器小皿、同中皿、同羽釜、同椀高台、瓦、

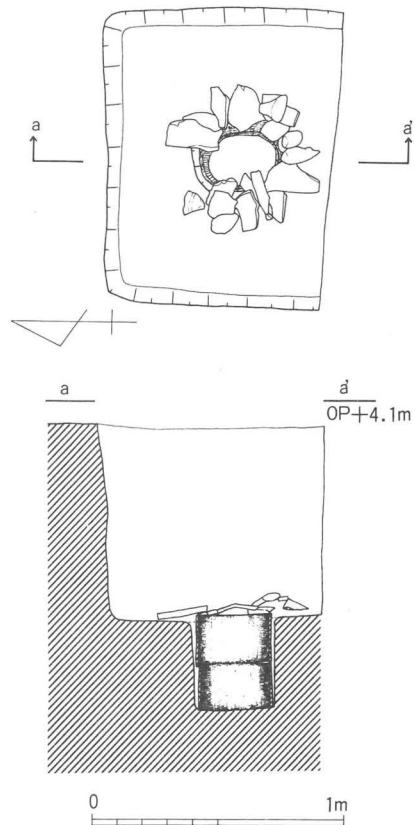
伊万里焼茶碗、美濃焼碗、青磁碗、白磁皿、瓦器羽釜脚、同碗、同甕、同火舎が、井戸内からは伊万里焼茶碗が出土した。井戸内からの遺物が規模の大きな割に非常に少ないこと、これと同じ構造の井戸が第2次大戦まで農業の灌漑用として使用されていた（近所の古老の話）こと、貯水量が構築された時期に差があるにしても極端に多いことから考えると、飲料水、生活用水としての井戸より灌漑用を目的として構築されたものと思われる。構築された時期は掘形内の遺物から江戸中期から後期頃と思われる。

井戸24

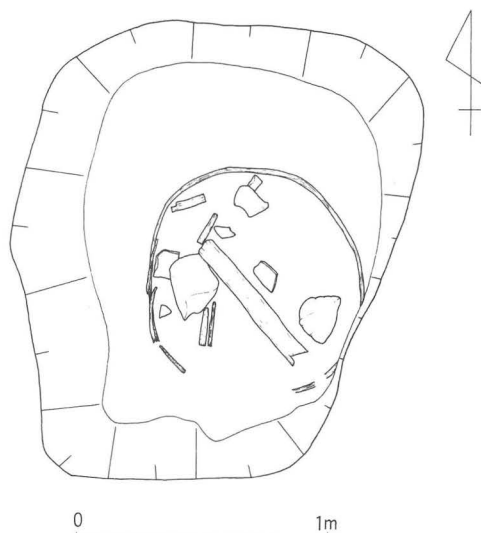
溝23によって上部を破壊されている。検出された面での掘形は直径0.7mの円形で、この掘形のやや東寄りに直径0.4m、深さ0.25mの曲物井側を置く。周辺の遺構面の標高から推定すればこの井戸は深さ0.65mあったと思われる。底の標高は3.3mで淡青灰色粗粒砂に達している。井戸内からは平瓦、瓦器碗、同小皿、木片などが出土し、13世紀後半頃に廃絶したものと思われる。

井戸25（第27図）

上面が1.18m、下面が1.07m、深さ0.78mの方形を呈する掘形の北側7/10を検出した。井側は掘形のほぼ中央に曲物を2段据え、その上に瓦、石、土器などを用い円形に積み上げた瓦積井戸である。曲物は上段が直径30cm、深さ21cm、下段が直径29cm、深さ19cmである。瓦積みの井側は上部が失われていて下部だけが破壊をまぬがれている。井戸の深さは遺構検出面から1.14m、底の標高は2.88m、湧水層である淡青灰色細粒砂に達しており現在においても相当な湧水量をもっている。井戸の埋土は灰色粘土、淡褐色シルト、淡褐色砂質シルトがブロック状に混ざりあったもので、ここから瓦器碗、須恵器、土師器、瓦など



第27図 井戸25実測図



第28図 井戸26平面実測図

が出土した。

井戸26 (第28図)

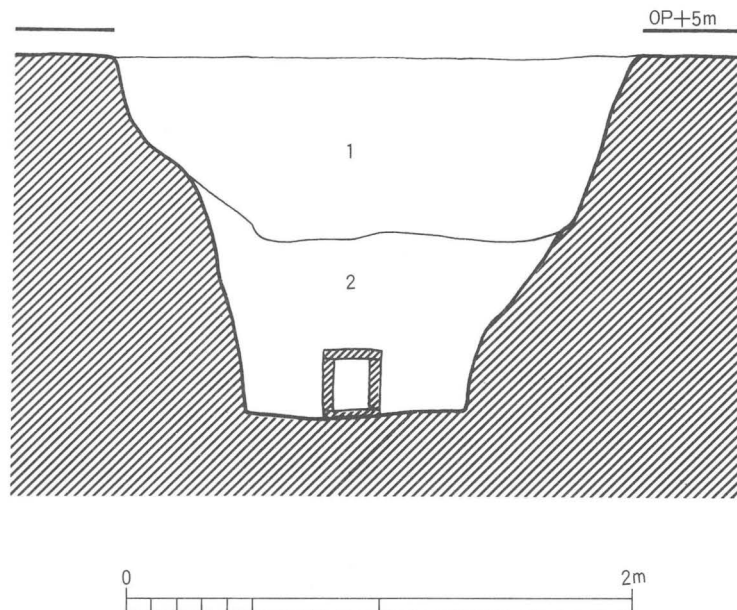
溝26、27を切る上面が1.46m×1.8m、底面が1.11m×1.45m、深さ0.64mの不整形を呈する掘形をもつ。井戸内の埋土は黄茶褐色シルトと淡褐色砂質シルトとが入り混じったものである。ここからは瓦、瓦器羽釜、花崗閃緑岩、木片、板材、直径約0.9mの円形に巡った竹製のタガが出土した。竹製のタガ、板材の出土により井戸18と同じように桶側の井側を廃絶時に取り去ったものと思われる。井戸の底の標高は3.52m、淡灰褐色細粒砂に達しているが湧水はみられない。

溝7

淡青灰色粘土層上面から掘り込まれた素掘りの溝である。幅0.79m～1.08m、深さ0.39m～0.58m、南南東から北北西に向ってはしる溝である。溝の底は北へゆるやかな傾斜をもち下がっている。埋土は暗灰色砂質シルトで短期間に埋められている。付近には井戸がたくさん検出されているため排水用の溝とも考えられるが、溝内の出土遺物がほとんどなく、また、水の流れた形跡もみられないので、何を目的として、いつ掘られたものかは不明である。

溝8

淡茶灰色砂質シルト上面から掘り込まれた南南西から北北東にはしる幅0.28m、深さ0.12m、長さ2.5mの小溝である。土壌5を切っているが北へも南へも続かない。周辺にはピットがたくさん検出されており何らかの建物に伴うものと思われる。溝内の埋土は土壌5と同じ淡灰褐



1. 茶褐色砂質シルト 2. 暗青灰色粘土質シルト

第29図 溝9 断面実測図

色砂質シルトである。埋土からは土師器小皿、同大皿、同椀、同カマド片、須恵器片、瓦器椀片、平瓦片が出土した。出土遺物は細片のため、時期は決定しがたいが、土師器は奈良時代に属するものも少量含むが大半は12世紀から13世紀代のものと思われる。

溝9（第29、30図）

淡茶灰色粘土質シルト混り暗灰色砂質シルト上面から掘り込まれた素掘りの溝で溝7とはしる方位は同じで南南東から北北西にむかう。上面の幅3.1m～2.07m、下面の幅1.15m～0.88m、深さ1.22m～1.4mである。溝の埋土は上層が茶褐色砂質シルト、下層は暗青灰色粘土質シルトである。下層からは多量の瓦片と土師器小皿、同中皿、同羽釜、同盤、瓦器椀、同小皿、同火舎、同羽釜、同播鉢、同甕、須恵質陶器、須恵器、青磁、伊万里焼茶椀、陶器、火を受けた砂岩、同凝灰岩質砂岩が出土した。この溝の底近くには堰と暗渠水路が構築されていた。

堰は鳥居型の開閉装置を備えたもので厚さが4cm、幅8cm、長さ82cmの角材を16cmの間隔をあけ南側に15度傾けて2本打ち込み、水圧で倒れることを防ぐため北側からそれぞれ副木を置いている。開閉用の直立木柱はすでになかったが、開閉用の支柱に幅2.5cm、深さ1cm、長さ42cmの溝を穿っており、この溝に沿って上下に開閉されていたことがわかる。水の堰き止めには幅12cmと18cm、厚さ1.2cm、長さ約80cmの板材を縦に打ち込み、その板材に沿って幅8cm～14cm、厚さ約1cm～2cm、長さ1m前後の板材を横に渡して積み上げている。さらに堰より南側の溝底近くには、溝内への土砂の流入を防ぐための施設を設けている。東側の肩下には直径7cmと4cm、長さ1.5mの杭を打ち込み、その外側に幅12cm～32cmの板を横たえている。西側も直径3cmと6cmの杭を打ち込み幅30cmの板を横たえている。それぞれ横たえられた板の外側には石が置かれていて、補強されたものと思われる。

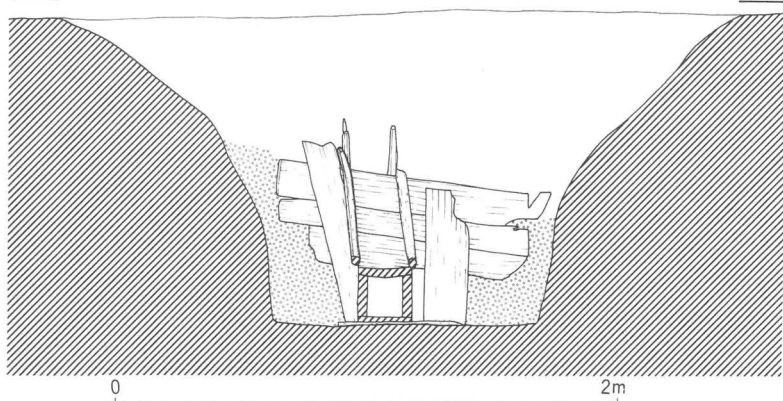
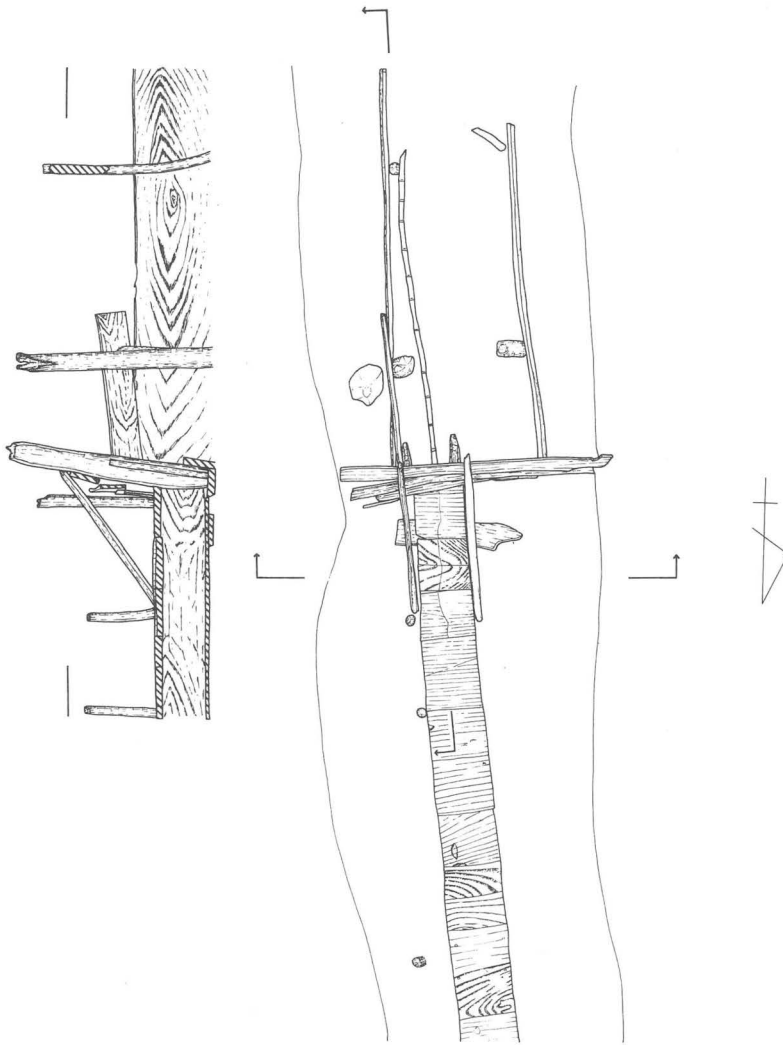
暗渠水路は、木板組み合せ釘づけ四角形底樋で底板が幅22cm、厚さ2cm、1枚の板の長さ4.5m、側板が幅16cm、厚さ4cm、1枚の板の長さ4.5m、上板は幅22cm、厚さ4cm、長さ12cm～35cmのものを4mmの鉄の角釘で固定させている。調査地の北端で底板、側板とも終わり、側板は斜めに切断して他の側板と接合され、さらに北側へ延びている。この暗渠水路の中には淡灰色中粒砂が充満しており、この砂の中には瓦器椀、土師器小皿、瓦片、伊万里焼茶椀がはいっていた。淡灰色中粒砂は暗渠水路内のみで堰より南側では検出されていない。この堰、暗渠水路とも使用されていたのは江戸時代の中頃から後半ぐらいまでで以後は使用されていなかったと思われる。構築された時期は遺物の上では確定することはできなかった。

溝10

幅0.15m～0.18m、深さ0.08m、西北西から東南東にむけてはしるが東側を溝9や上層からの攪乱により破壊されている。断面はU字状を呈する。瓦片が1点出土したのみで時期は不明である。

溝11

幅0.25m～0.76m、深さ0.06m、長さ3.08m、南西から北東にはしる溝である。埋土は暗灰色砂質シルト混り黄茶褐色シルトであり主として土師器片と同甕、同羽釜、瓦器椀、同羽釜、



第30图 溝9 堰、暗渠水路実測図

須恵質陶器、備前焼播鉢が出土した。北東端の底からは馬の脚部と思われる長さ38cm、幅7cmの骨が出土した。

溝12

幅0.15m～0.18m、深さ0.05m、長さ1.43mの溝である。遺物は出土せず時期は不明である。

溝13

幅0.24m～0.26m、深さ0.26m、西から東にはしる溝である。東端は土壇7に切られているが、検出長2.62mの短い溝である。遺物は出土しなかった。

溝14（第31図）

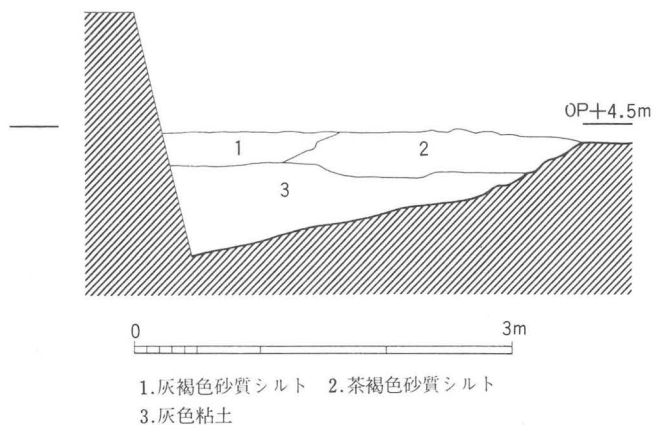
1 A 4-25地区の東端で検出した。茶褐色中粒砂混り青灰色砂質シルト上面から切り込まれた大溝である。西壁のみの検出であるため幅は不明であるが検出しただけで3.08mありまだ東側に続いている。埋土及び堆積土は上から灰色砂質シルト、茶褐色砂質シルト、灰色粘土である。茶褐色砂質シルト、灰色粘土からは多量の瓦と瓦器椀、同羽釜、土師器小皿、同羽釜、須恵器、青磁椀、備前焼播鉢、陶器片が出土した。溝は検出した範囲での深さは1mで底は灰色粗砂層であった。この溝は北側の府道を越えた1 A 4 w地区にも延びていることが54年度の調査で確認された。溝の廃絶時期は16世紀中頃から後半と思われる。

溝15

真南北に延びる幅0.6m、深さ7.1cm～13.9cm、調査地中央部が一番低く両端にゆくにつれ少し高くなっている。断面は逆台形を呈している。埋土は茶褐色砂質シルトで土師器小皿、瓦器椀を主体として土師器羽釜、同中皿、瓦、須恵器、瓦器羽釜脚、同練鉢、同甕、備前焼播鉢が出土した。この溝は15世紀後半から16世紀前半にかけてのものである。

溝16

検出長28.92m、深さ30cm～60cmで、溝の北壁のみを検出した。溝の底は西から東にゆくにしたが徐々に深くなっていく。溝の東端は1 A 9 a 地区で区切られている。埋土は細礫混り灰褐色砂質シルト、灰色粘土質シルトで底は褐色中粒砂に達している。水の流れていた痕跡は



第31図 溝14断面実測図

みあたらない。細礫混り灰褐色砂質シルトからは、平瓦、丸瓦を主体として巴文軒丸瓦、瓦器椀、土師器羽釜、須恵質陶器、土師器小皿、青磁、白磁、鉄滓、桃の種、文字のかかれた土師器ミニチュア鉢が、灰色粘土質シルトからは、平瓦、丸瓦、蓮華文軒丸瓦、瓦器椀、同羽釜、同播鉢、同脚付羽釜、青磁、土師器小皿、桃の種、弥生土器甕が出土した。埋ったのは14世紀前半と思われる。

溝17

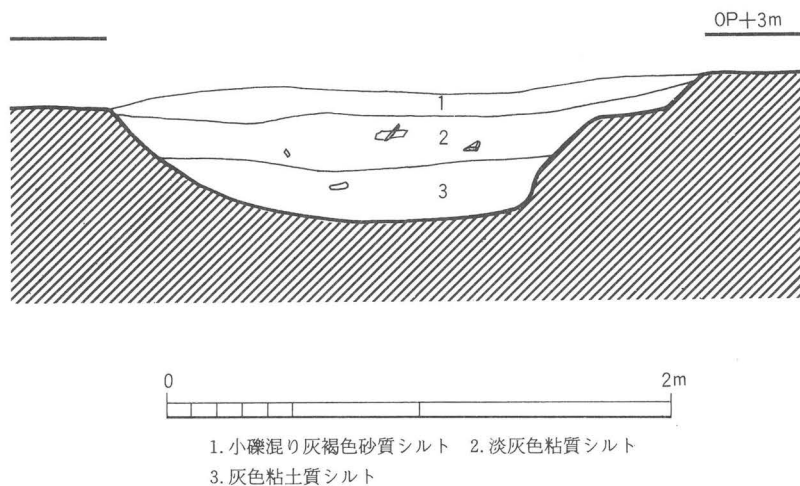
上面の幅0.6m、底面の幅0.4m、深さ6cm～19cm、土壇9、井戸18に切られる溝である。溝の底は、南端が一番低いが、1 A 12 a 地区井戸18より以南には続かない。検出長は3mで北側へ伸びるが調査地域外のため確認はできなかった。溝内の堆積土は灰色粘土質シルトで、土師器小皿、瓦器椀、瓦、須恵質陶器、土師器中皿、同羽釜、白磁、瓦器羽釜脚が出土した。出土遺物から、13世紀後半頃のものと思われる。

溝18 (第32図)

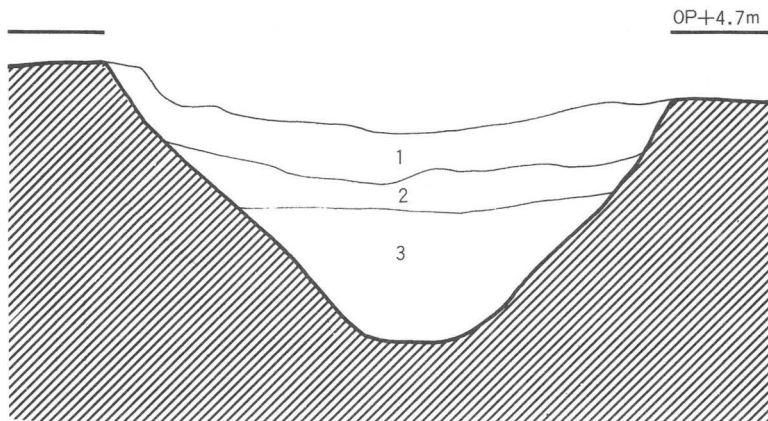
上面の幅が北側で2.07m、南側で2.38m下面の幅は1 A 13 a 地区で溝中央部にせり出す形で狭まる他は約1.5m前後である。深さは50cm～60cmで堆積土は上から細礫混り灰褐色砂質シルト、淡灰色粘土質シルト、灰色粘土質シルトで、細礫混り灰褐色砂質シルトからは土師器小皿を主体として瓦器椀、土師器羽釜、須恵質陶器、瓦器羽釜、同火舎、同播鉢、同甕、同羽釜脚、須恵器、青磁椀、土師器中皿、スサ入粘土(壁土)が、淡灰色粘土質シルトからは土師器小皿、瓦器椀を主体として須恵質陶器、土師器羽釜、須恵器、瓦器羽釜、同火舎、同甕、瓦、須恵器杯身、備前焼播鉢、白磁皿、同椀が出土した。この溝は16世紀前半から中頃にかけての時期に埋ったものと思われる。

溝19 (第33図)

1 A 14 a 地区を東端として西にむかう溝で1 A 17 a 地区、1 A 20 a 地区でそれぞれ合流して



第32図 溝18 断面実測図



1. 灰褐色砂質シルト 2. 青灰色粘土 3. 暗青灰色粘土

第33図 溝19 断面実測図

一本の幅広い深い溝となる。1 A20 a 地区で一番深く標高3.48mとなり再び少し浅くなって溝22に合流する。溝の支流を東側からⅠ、Ⅱ、Ⅲとすると溝19-Ⅰは上面幅39cm、底面の幅約30cm、深さ8cm、長さ10.73m、埋土は黄茶褐色シルト混り茶褐色砂質シルトで土師器小皿、同羽釜、瓦器練鉢、同羽釜、瓦、土師器把手、青磁椀が出土した。溝19-Ⅱは、上面幅68cm、底面幅52cm、深さ4cm～8cm、長さ4.31m、埋土は溝19-Ⅰと同じで、瓦、瓦器椀、同羽釜、同甕、同練鉢、土師器小皿、同把手、須恵質陶器練鉢、備前焼播鉢、青磁椀、製塩土器、北宋銭の崇寧重寶が出土した。溝19-Ⅲは、東側が幅50cm、西側の合流地点では幅が広くなり1.1mとなる。深さは東側で6cm、西側で10cmをはかる。1 A19-20 a 地区の溝19は最大幅2.15m、最深部0.82m断面がU字形を呈するもので、溝内の堆積土は上から灰褐色砂質シルト、青灰色粘土、暗青灰色粘土で底は淡青灰色細粒砂である。上層の灰褐色砂質シルトからは平瓦、丸瓦、巴文軒丸瓦、瓦器椀、同羽釜、同茶釜、土師器羽釜、同小皿、須恵器、青磁椀、白磁が、青灰色粘土からは瓦、土師器小皿、瓦器椀、同羽釜、同練鉢、弥生土器甕、須恵器、スサ入粘土（壁土）が、暗青灰色粘土からは瓦器羽釜、備前焼播鉢、須恵器、瓦、土師器小皿が出土した。埋った年代は16世紀中頃から後半にかけての時期である。

溝20

1 B21 Y 地区の北端で検出した。溝19によって切られるが、溝19より北へは延びないようである。南側は調査地以外に延びるために追求はできなかった。溝の幅1.35m、深さ62cm、検出長0.41mである。溝の底は西壁近くが一番深く、東壁の傾斜はゆるやかである。そのため溝の断面形はV字形に近い形となっている。底の標高は3.92mで、溝22より16cmほど高い。埋土は灰褐色砂質シルトで平瓦、須恵器、土師器羽釜、瓦器椀が出土したが細片のため埋った時期は

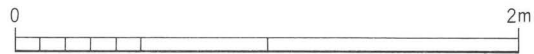
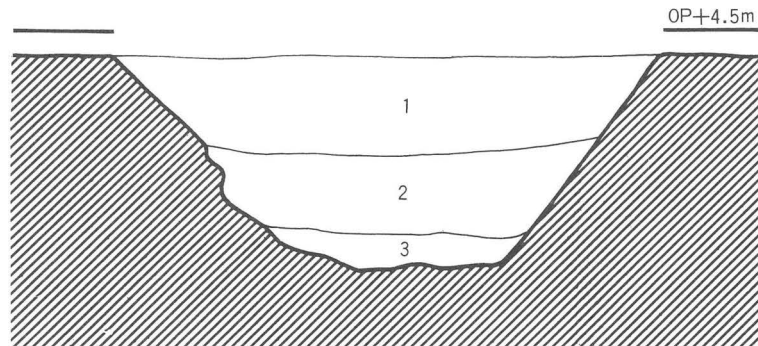
不明である。

溝21

幅78cm、深さ4cm、検出長3.6m、南南東から北北西に向う浅い溝である。断面は逆台形を呈する。埋土は黄茶褐色シルト、褐色細粒砂混り灰色粘土質シルトで、瓦器椀、土師器小皿、同羽釜、同中皿、須恵質陶器、須恵器杯身、白磁、瓦が出土した。14世紀前半に埋められたものであろう。

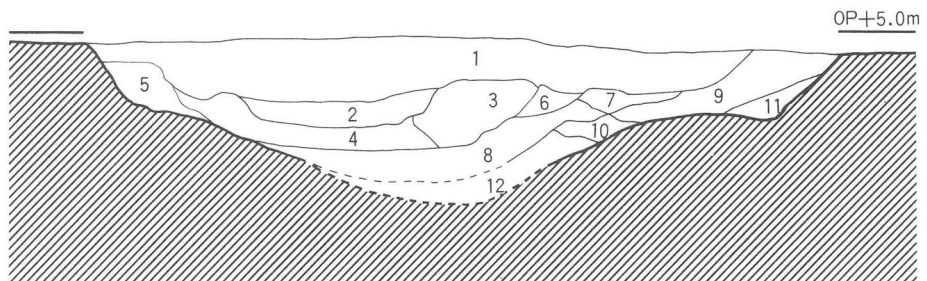
溝22 (第34図)

幅0.64m~2.2m、深さ45.5cm~85cm、長さ6.7m以上、南から北へはしる溝である。断面は逆台形を呈する。溝内の埋土は上から茶灰色シルト混り極細粒砂、灰褐色砂質シルト混り灰色



1. 茶褐色シルト混り極細砂 2. 灰褐色砂質シルト混り灰色粘土質シルト
3. 灰色粘土質シルト

第34図 溝22 断面実測図



1. 茶褐色砂質シルト 2. 青灰色粘土質シルト 3. 青灰色粘土混り茶灰色砂質シルト 4. 青灰色粘土
5. 茶灰色粘土質シルト 6. 茶灰色砂質シルト混り青灰色シルト 7. 細礫混り茶褐色砂質シルト
8. 灰色シルト質粘土 9. 茶褐色砂質シルト 10. 灰褐色粘土質シルト 11. 灰色粘土混り淡茶褐色砂質シルト
12. 茶褐色粘土

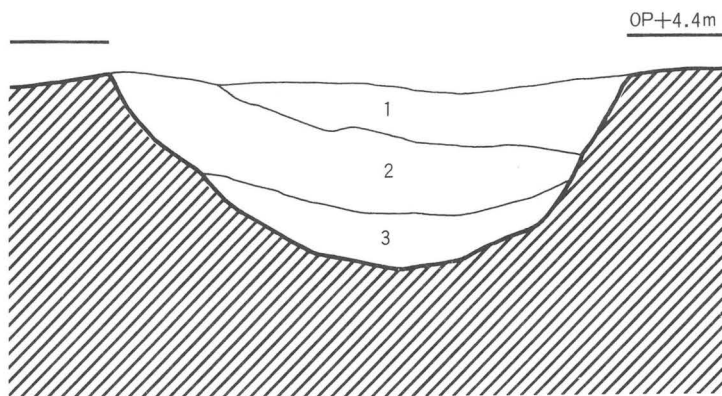
第35図 溝23 断面実測図

粘土質シルト、灰色粘土質シルトである。灰色粘土質シルトからは土師器小皿、同大皿、同羽釜、瓦、瓦器椀、同羽釜、同甕、同羽釜脚、須恵質陶器が出土した。土師器から16世紀後半に埋ったものと思われる。

溝23 (第35図)

幅10.34m、深さ1.4m、検出長6.52m、真南北にはしる大溝である。両側壁ともゆるやかな傾斜をもつU字形の断面である。溝は下層が自然堆積による茶灰色粘土で竹の根が多くみいだされた。上層は埋土であり、茶褐色、茶灰色の砂質シルトを中心として灰褐色粘土質シルト、青灰色粘土、青灰色シルト質粘土等がブロック状に入っている。この埋土からは瓦器椀、同練鉢、同皿、同甕、同火舎、土師器小皿、同大皿、同羽釜、須恵質陶器、須恵器杯身、灰釉系陶器、伊万里焼茶椀、砥石、石臼、桃の種が出土した。溝の底は湧水が激しく又断面が崩壊しかけたこともあり確認できなかったが、埋った状態をみると、下層は常に水が溜っており、しかも流れがほとんどないという状態であり木の葉の堆積も多くみられた。発掘当初は溝の幅が広く深いこと、溝の東肩に集石や逆茂木と思われるような木杭が見つかったこと、出土遺物の大部分が室町時代の後半から末に位置づけられるものであること、字切図の字城の西限とほぼ一致していることなどから若江城の堀と考えられた。しかし、遺物の中には江戸時代中頃まで下がると思われる伊万里焼茶椀が出土していることから少なくともこの溝が埋められたのは江戸時代の中頃と思われる。また、この溝が完全に埋まった段階で井戸23が構築され、掘形出土の遺物から江戸時代中頃から後半にかけての時期のものであることからそれが裏付けられる。溝の掘削された時期は、遺物の上では12世紀代より以降の各時期のものがすべて含まれているので明確にはしがたい。

溝24



1. 灰褐色粘土質シルト 2. 灰褐色砂礫 3. 青灰色砂礫混り粘土質シルト

第36図 溝27 断面実測図

溝25～27を切る溝で、西から東にはしるものが2 A 3 - 4 a 地区で北へ向きをかえると同時に2つに分流し、ほぼ平行してはしる。検出長15m、幅1.65m～2.8m、深さ29cm～55cmで2 A 3 a 地区で一番低くなる。溝内の堆積土は灰褐色砂質シルト、細粒砂混り青灰色粘土である。溝内の出土遺物は、多量の瓦類、土師器大皿と、瓦器羽釜、同脚付羽釜、土師器小皿、同羽釜、青磁碗、瓦器碗、同播鉢、須恵器杯身、須恵質陶器、漆器碗、下駄、桃の種、板材、スサ入粘土（壁土）である。特に2 A 4 a 地区北壁に沿って集中しており、北側から投げ込まれたものと思われる。

溝25、26

溝25は北北西より南南東に延びる、幅50cm、深さ12cmの溝である。井戸26によって切られているが1 A 5 a 地区で溝26と合流して南に延びる。出土遺物は土師器片、瓦器碗、須恵質陶器である。溝26は幅1m～1.3m、深さ24cm～28cm、北西から南東に延びる小溝である。出土遺物は土師器小皿、瓦器碗、同羽釜、同甕、同火舎、同鉢、須恵質陶器、土師器羽釜、同大皿、須恵器で土師器小皿は半数以上を占める。埋められた時期は溝26が16世紀中頃から後半、溝25が16世紀代である。溝の性格は不明である。

溝27（第36図）

調査地域の西端を北西から南東にはしる溝で、幅約2m、深さ0.6m～0.7m、長さ7m以上である。溝の底は西から東に傾斜し、かつ深くなってゆく。溝の断面形はU字形であるがゆるやかな傾斜である。溝内堆積土は上から灰褐色粘土質シルト、灰褐色砂礫、青灰色砂礫混り粘土質シルトで、灰褐色砂礫から古墳時代の土師器高杯、土師器の細片が少量出土した。溝内からの出土遺物は、ほんのわずかであるし、堆積土も長期間にわたって水の流れた形跡がみあたらないため、溝の掘削後比較的短期間のうちに埋ったものと思われる。

土壙5

溝8によって切られた0.32m×1.27m、深さ0.12mの長方形を呈する土壙である。埋土は淡灰褐色砂質シルトで土師器、瓦器碗、瓦、須恵器の細片が出土した。土師器は胎土から奈良時代のもと思われるが、瓦器は13世紀前半～中頃に比定されるものである。土壙の底面にはかなりの凹凸がある。

土壙6

上面が0.69m×1.35m、下面が0.49m×1.2m、深さ0.37m～0.42mの長方形の土壙である。埋土は暗灰色砂質シルト混り黄茶褐色シルトで、ここから瓦器碗、土師器小皿が4割づつ、あとは須恵器、瓦、土師器大皿、同羽釜、須恵質陶器、瓦器皿、内黒の黒色土器、須恵器杯蓋、白磁碗の破片、スサ入粘土塊（壁土であったかもしれない）が出土した。瓦器碗は12世紀中頃から後半ぐらいのもの、土師器小皿は細片で詳しい時期は限定できないが13世紀後半から14世紀にかけてのものと思われる。

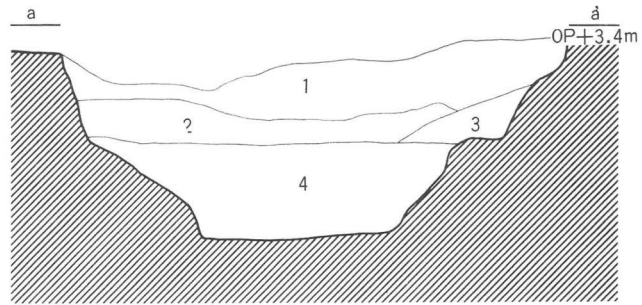
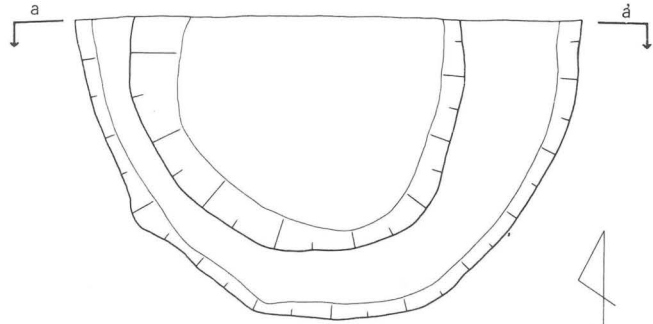
土壙7

上面が推定1m×0.75m、下面0.75m×0.41m、深さ0.18mの楕円形を呈する土壙である。

断面はほぼ楕円状でゆるやかに傾斜する。埋土は暗灰色粘土質シルトであるが遺物は出土しなかった。

土壌 8

上面が $0.6\text{m} \times 0.82\text{m}$ 、下面が $0.46\text{m} \times 0.71\text{m}$ 、深さ 0.22m の楕円形の掘形である。埋土は暗褐色砂質シルトで主として土師器小皿が出土したがそれ以外に瓦器椀、土師器中皿、同羽釜、瓦、須恵質陶器、瓦器練鉢がある。土師器小皿では正確な時期決定がしがたいが、瓦器は大半が12世紀後半のものである。



1. 灰褐色砂質シルト 2. 淡茶灰色細粒混り灰褐色砂質シルト
3. 淡茶灰色細粒混り灰色砂質シルト 4. 灰色粘土質シルト

第37図 土壌 9 実測図

土壌 9 (第37図)

上面の直径 2m 、下面の直径 0.75m 、深さ 0.76m 、2段

掘りの円形の掘形の南側半分を検出した。掘形の埋土は上から灰褐色砂質シルト、淡茶灰色細粒砂混り灰褐色砂質シルト、淡茶灰色細粒砂混り灰色砂質シルト、灰色粘土質シルトである。灰褐色砂質シルトからは、瓦、瓦器椀、同羽釜脚、土師器小皿、須恵器片、自然石が、灰色粘土質シルトからは青磁椀、弥生後期の甕が出土した。出土した遺物から13世紀前半に埋められたものと思われる。

落ち込み 1

25 A 12-15地区にかけて検出されたものである。25 A 17-21地区の遺構面は淡茶灰色砂質シルトであるが落ち込み 1 の肩部あたりではほとんどこの層はなく淡青灰色粘土であった。落ち込み 1 は北西から南東にかけてゆるやかな傾斜をもって落ち込む。落ち込み 1 内の埋土は上層が灰色砂質シルト、下層が暗青灰色粘土質シルトである。上層は東側、南側へゆくにつれて層は厚くなり西側では逆に薄く、部分的に黄褐色シルト混り暗灰色砂質シルトに変っている。ここからは多量の瓦類と土器類、木片、砥石、曲物片、火を受けた凝灰岩、粘土塊が出土した。瓦類には平瓦、丸瓦のほか奈良時代の扁行唐草文軒平瓦、重弧文軒平瓦、均正唐草文軒平瓦や雁振、鴟尾、鎌倉時代の連珠文軒平瓦、五輪塔のスタンプ文のある平瓦がある。土器類には瓦器椀、同小皿、同甕、同火舎、同羽釜、同羽釜脚、同ミニチュア羽釜、同練鉢、土師器小皿、同大皿、同羽釜、同高杯、同杯、同把手、須恵器杯、同練鉢、青磁、白磁、備前焼楕鉢、同甕、陶器片

がある。下層は東端を除けば上面は割合平坦になっている。しかし下面、自然堆積層である淡青灰色粘土、茶灰色粗粒砂の上面は凹凸が激しく、特に25A13-14a地区付近が一番低くなっている。ここからは瓦類、土師器羽釜、同小皿、瓦器椀、須恵質陶器、炭化した自然木が出土したが量は上層に比べると非常に少なかった。落ち込み1は現状においては何になるのか断定できないが埋められたのは16世紀中～後半頃と思われる。

落ち込み2

25A21-24地区で検出した。東から西にゆるやかに傾斜するもので埋土は上から細礫混り青灰色粘土質シルト、茶褐色砂質シルトである。下層からは多量の瓦類と瓦器椀、同羽釜、土師器片、青磁、自然石、須恵器片が出土した。瓦類は焼成のよい平瓦、丸瓦のほか奈良時代の複弁蓮華文軒丸瓦、室町時代の巴文軒丸瓦、室町末～近世初頭の均正唐草文軒平瓦がある。出土遺物から室町末から近世初頭に北東側から投棄されたものと思われる。

ピット群

ピットは昭和53年度調査地域の東端25A17-21地区で155個まとまって検出した。25A19-20地区のものは径8cm前後のものが多く、深さも4cm～22cm、平均8cm前後のものが多い。これらのピットは堆積土が灰褐色砂質シルトのものと黒褐色砂質シルトのものに二分でき、また、切り合いをしていることから時期差を表わすものと思われるが、出土遺物が細片であることから時期は明確にはしがたい。配列の仕方、ピットの大きさ、深さなどから柵状のものではないかと思われる。

25A17-18地区のピットは25A19-20地区のものに比べて大きなものが多い。大きさは20cm～35cm、深さは8cm～48cm、平均17cmでこれらは建物を構成するものと思われるが、調査面積が狭いこと、25A17a地区付近は井戸の掘形などで破壊されているため建物の規模、方向などは復元することができなかった。

5. 2A18-25～3A1-15地区

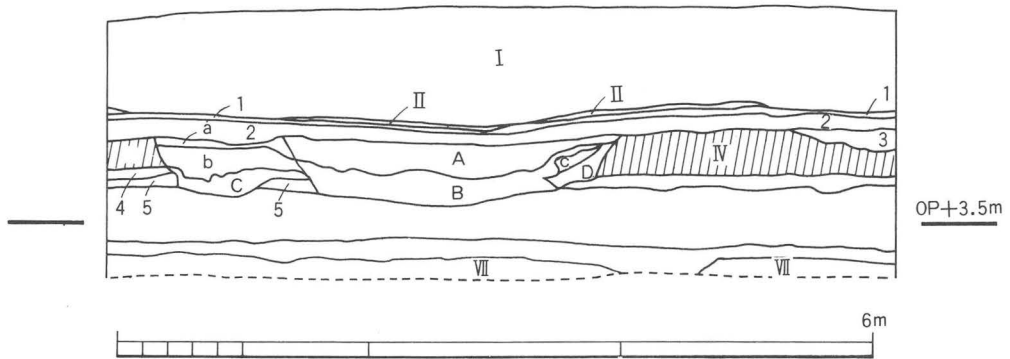
昭和52年度に実施したもので、同年11月21日から調査を開始し翌昭和53年4月8日に現場作業を終了した。調査地は、若江南町3丁目の府道南側、東西約90m、南北約6.5m、面積約540m²であり、調査対象地の現状は水田、畑、宅地であった。

この地区での遺構面は2枚であるが、生活面として明確なものは淡茶灰色砂質シルト上面で下層の淡青灰色細粒砂で検出したシガラミ状遺構は人為的な手が加わっているが生活面として扱えることができなかった。検出した遺構は、井戸6、溝9、土壇4、落ち込み1、シガラミ状遺構である。

層序 (第38図)

後世において人為的な手が加わっているところは異なった状況を呈するが基本的な層序は以下の通りである。

第1層 盛土 現代層で宅地であった部分とその周辺部にみられる。厚さ60cm～70cmであ



I. 盛土 II. 耕土 1. 褐色極細砂 2. 青灰色砂質シルト A. 淡茶褐色細砂混り茶灰色砂質シルト
 B. 淡茶褐色砂質シルト混り灰色粘土 a. 茶灰色砂質シルト b. 灰色粘土 c. 淡黄褐色砂
 3. 灰褐色砂質シルト VI. 淡茶褐色砂質シルト 4. 淡褐色細砂 5. 青灰色砂質シルト
 V. 淡褐色中粒砂 IV. 暗灰色粘土 VII. 淡青灰粘土 C. 淡茶褐色中粒砂混り淡灰色細粒砂
 D. 淡灰色細粒砂

第38図 3A13-15地区 南壁断面実測図

る。

第2層 耕土 水田、畑地であったところで調査を開始する少し前まで農作業が行なわれていた。

第3層 茶褐色砂質シルト 平安時代後期から江戸時代にかけての遺物を含む包含層で調査地域のほとんどの箇所検出した。厚さは4cm～50cm、平均30cmである。

第4層 淡茶灰色砂質シルト 遺構のベース面となっているもので鎌倉時代後期から室町時代後期にかけての各種遺構を検出した。この土層には遺物は全く含んでおらず、堆積状態などからみて平安時代以前に氾濫原、後背湿地という地理的状况のもとで徐々に堆積したもので、調査地の西半分を中心とした地域に30cm～50cmの厚さで認められる。

第5層 淡褐色中粒砂 10cm～50cm、平均30cmの厚さで拵がっている。東側ではこの層と同一レベルで青灰色細粒砂になっているところもある。この青灰色細粒砂の中からシガラミ状遺構を検出した。

第6層 暗灰色粘土

第7層 淡青灰色粘土

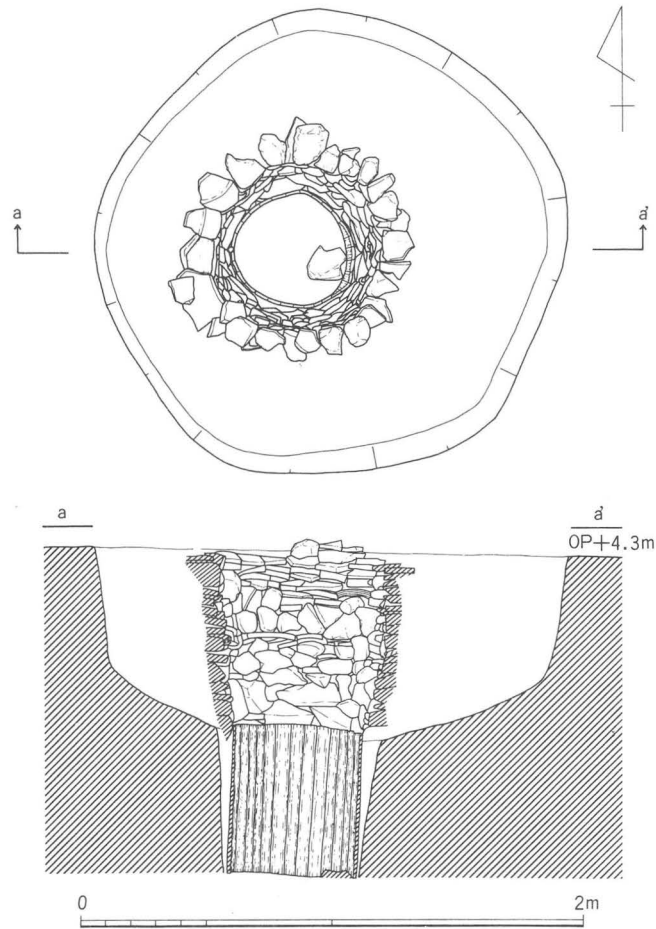
遺構 (第66・67図)

井戸27

曲物の井側を置く井戸である。底面の径は曲物より少し大きい28cm、検出面での掘形の直径は46cmである。曲物は最下段だけ残っていて直径26cm、深さ26cm、曲物の厚さ4mm、底は淡茶色粗粒砂である。堆積土は細礫混り暗灰色粘土質シルト、淡灰色粘土であるが遺物は全く出土しなかった。

井戸28 (第39図)

上面は直径1.87m、底面は直径0.54m、深さ1.3m、円形の二段掘りの掘形をもつ。井側は



第39図 井戸28実測図

下が桶側、上が瓦積みである。桶側は幅5cm、厚さ1cm、長さ70cmの板材28枚を直径51cmの円形になるように縦に並べ、外面を3条の竹製のタガで締めている。瓦積みは下がほとんどが花崗閃緑岩、両雲母花崗岩などの石材を用いて直径55cmの円形にし、上に積み上げるにしたがい徐々に径を大きくしている。石積みの下面から30cm程上がった所からは瓦や瓦器火舎などを混え積み上げている。瓦の中には奈良時代の重弧文軒平瓦や鎌倉時代の連珠文軒平瓦が含まれている。井戸内の埋土及び堆積土は上から灰褐色砂質シルト、褐色砂質シルト、青灰色粘土質シルトで、底は青灰色細粒砂層、標高2.91mである。灰褐色砂質シルトからは瓦、瓦器椀、同羽釜、土師器椀高台部が、褐色砂質シルトからは瓦を主体として土師器羽釜、須恵質陶器、瓦器羽釜、同播鉢、同火舎、土師器小皿、砥石が出土した。16世紀代に廃絶したものである。

井戸29

底面の直径38cm、検出面での直径67cm、深さ61cm、断面が播鉢形を呈する掘形である。井側

は曲物で最下段だけしか残っておらず、その上残存状態が悪い。復元すると直径34cmであったと思われる。堆積土は上から灰褐色粘土質シルト、淡茶灰色中粒砂であり底は淡褐色中粒砂、標高3.61mである。灰褐色粘土質シルトからは瓦器椀、土師器小皿、同羽釜、瓦が出土し、15世紀前半頃に廃絶したものである。

井戸30 (第40図)

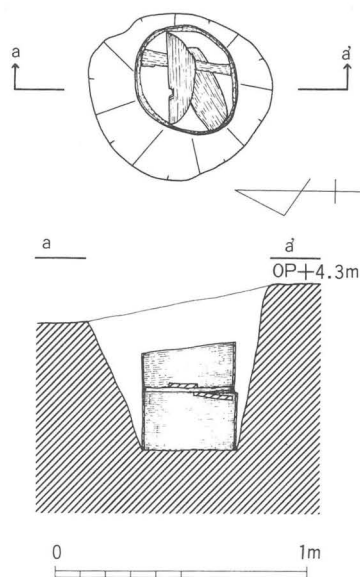
底径51cm、検出面での直径72cm、深さ59cm、円形の掘形はやや東寄りに曲物の井側を置く。曲物は、2段あり上段が直径37cm、深さ19cm、下段が直径38cm、深さ23cmで底は淡褐色中粒砂に達している。底の標高は3.54mである。堆積土は淡茶灰色粘土質シルトで瓦器椀、同小皿、土師器小皿、同羽釜、板材が出土した。13世紀代に廃絶したものである。

井戸31 (第41図)

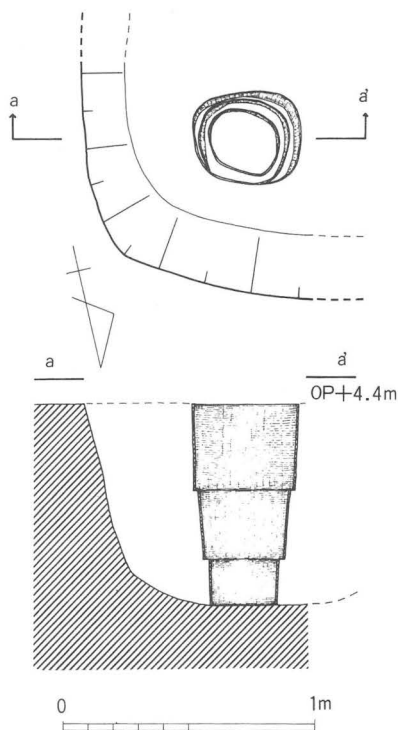
検出面での掘形の直径1.88m、深さ0.8mの北側を掘出した。掘形の両側は溝36によって切られている。井側は曲物で3段検出した。上段は長径42cm、短径35cm、深さ34cm、中段は長径36cm、短径34cm、深さ27cm、下段は長径29cm、短径25cm、深さ18cmである。井戸内堆積土は灰色粘土で、瓦器椀、土師器小皿を主体として瓦、土師器羽釜、同中皿、須恵質陶器が出土した。井戸の底は淡褐色中粒砂に達しており標高は3.49mである。湧水はない。出土遺物から14世紀前半頃に廃絶したものである。

井戸32 (第42図)

溝36の底近くで検出した。曲物は1段のみ残っており内外2重となっているが上に積まれてあったものが落ち込んだものであろう。内側の曲物は長径35cm、短径33cm、深さ26.5cm、外側の曲物は長径41cm、短径38.7cm、深さ26.5cm、底の標高3.23mである。曲物の外側4カ所に花崗閃緑岩をフラットな面を上に向けて置かれている。井戸の井側を固定させるために置かれたものか溝36との関連で把えるべきものなのか判断できない。曲物内からは板材、瓦、瓦器椀、同羽釜脚、



第40図 井戸30実測図

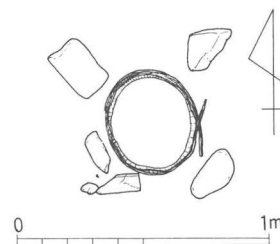


第41図 井戸31実測図

須恵質陶器、梅の実が出土した。14世紀前半頃のものである。

溝28

幅60cm、深さ25cm、南南西より北北東に延びる溝である。溝内の堆積土は暗灰色粘土で植物遺体を多く包含していたが遺物は出土しなかった。溝の断面は逆台形を呈している。溝底の標高は3.35mである。



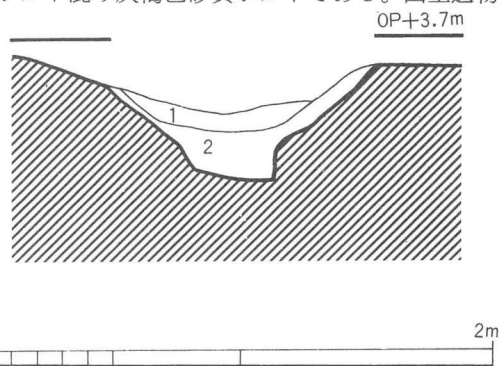
第42図 井戸32実測図

溝29 (第43図)

ほぼ真南北に延びる溝である。上面の幅1.03m~0.71m、底面の幅0.32m、深さ0.41mである。溝の壁は上面はゆるやかな播鉢状であるが途中から逆台形の急な傾斜となる。溝の堆積土は上から暗灰色粘土、暗灰色砂質シルトで、暗灰色粘土からは、自然木、瓦器椀、同甕、瓦が暗灰色砂質シルトからは土師器小皿、瓦器椀を主体として土師器中皿、同羽釜、瓦、須恵器杯身、須恵質陶器、灰釉系陶器、瓦器小皿が出土した。14世紀中頃のものである。

溝30 (第44図)

溝31とほぼ平行に延びる溝である。上面の幅1.53m、底面の幅0.7m、深さ0.57m、南南西から北北東にはしる。断面は逆台形を呈しており東壁の方が西壁にくらべゆるやかな傾斜である。埋土は灰褐色砂質シルト、淡黄灰色粘土質シルト混り灰褐色砂質シルトである。出土遺物は多く、瓦器椀、土師器小皿を主体として土師器羽釜、瓦器羽釜脚、土師器大皿、須恵質陶器、白磁、灰釉系陶器、砥石、瓦、瓦器小皿が出土した。时期的には12世紀代から14世紀前半にかけてで、特に14世紀前半代のものが多いことから埋められたのは14世紀前半と思われる。

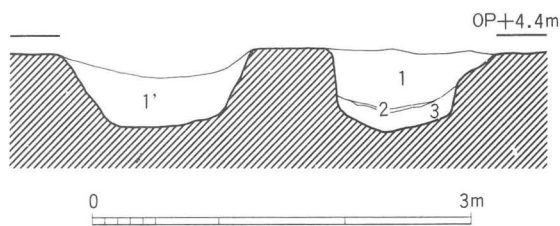


1. 暗灰色粘土 2. 暗灰色砂質シルト

第43図 溝29 断面実測図

溝31 (第44図)

溝30と平行にはしる、幅1.05m~1.32m、深さ0.85mの溝である。北側を土壌10により切られている。断面は溝中央部が一番深くなり5角形を呈する。埋土及び堆積土は上から灰褐色砂質シルト、淡黄灰色粘土質シルト混り灰褐色砂質シルト、黒灰色シルト、黄灰色粘土である。黒灰色シルトは灰層であり植物質のものが燃焼し堆積したものである。上層からは瓦器椀、土師



1. 淡黄灰色粘土質シルト混り灰褐色シルト
2. 黒灰色シルト
3. 黄灰色粘土
1. 灰褐色砂質シルト

第44図 溝30 溝31断面実測図

器小皿、同羽釜、瓦が出土した。上層の埋土が溝30と同じであることからほぼ同時期に埋められたものと思われる。

溝32

3 A 7 Y 地区から 3 A 12 Y 地区まで13.1mにわたって検出した。東側では幅1.5mであるが西側にゆくにしたが幅は広がっている。溝の深さは 3 A 8 Y 地区では19cm、3 A 11 Y 地区では25cmと西側へゆくほど深くなってゆく。埋土は灰色粘土、淡褐色中粒砂が入り混ったものであり、土師器小皿、瓦器椀、土師器中皿、同羽釜、瓦器羽釜、瓦、青磁椀が出土した。14世紀代に埋められたものである。

溝33

上面幅1.5m～1.6m、底面幅約1.1m、深さ10cm～14cm、南から北へ延びる溝で断面は逆台形である。埋土は黄灰褐色砂質シルトで土師器小皿、瓦器椀、土師器羽釜、瓦が出土した。出土遺物から14世紀前半のものと思われる。

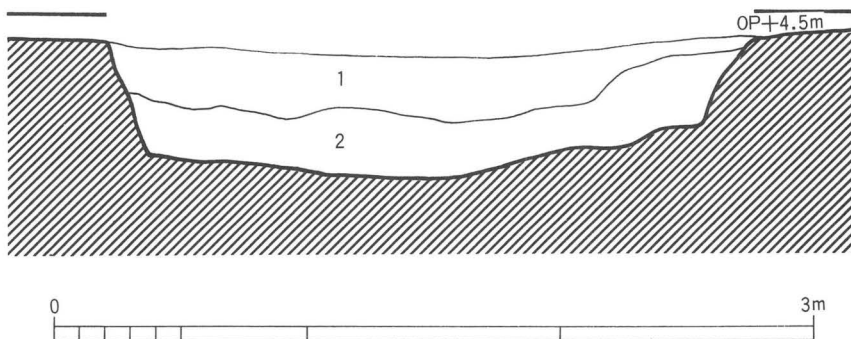
溝34

上面幅1.46m～2.7m、底面幅1.15m～2.15m、深さ10cm、南から北に延びる溝である。底は起伏があるが断面形は皿形を呈する。埋土は溝32に非常に類似している。出土遺物は瓦器椀、土師器小皿、同中皿、同羽釜、瓦、瓦器小皿である。溝32とほぼ同時期に埋められた可能性がある。

溝35

3 A 13 x 地区から 3 A 15 x 地区まで8.6mにわたって検出した。東から西に延びる幅0.3m、深さ16cm、断面逆台形を呈する溝である。埋土は、淡茶褐色砂質シルト混り灰色粘土である。ここからは土師器小皿、瓦器椀、土師器羽釜、瓦、土師器大皿、瓦器小皿、同羽釜、須恵質陶器が出土した。

溝36 (第45図)



1. 淡茶褐色細砂混り茶灰色砂質シルト 2. 淡茶褐色砂質シルト混り灰色粘土

第45図 溝36 断面実測図

上面幅2.55m～2.8m、底面幅2.1m～2.25m、深さ54cm、断面逆台形を呈する南から北へ延びる溝である。井戸31、32、溝35、落ち込み3を切る。埋土は淡茶褐色細粒砂混り茶灰色砂質シルト、淡茶褐色砂質シルト混り灰色粘土である。下層の淡茶褐色砂質シルト混り灰色粘土からは多量の遺物が出土した。瓦器椀が全出土量の5割を占め、あとは土師器小皿が3割、残りが土師器羽釜、瓦器羽釜、須恵質陶器、土師器大皿、瓦器小皿、同甕、同播鉢、同練鉢、同火舎、瓦、青磁椀、白磁鉢、桃の実、鉄滓である。14世紀後半に位置づけられる。

土壙10

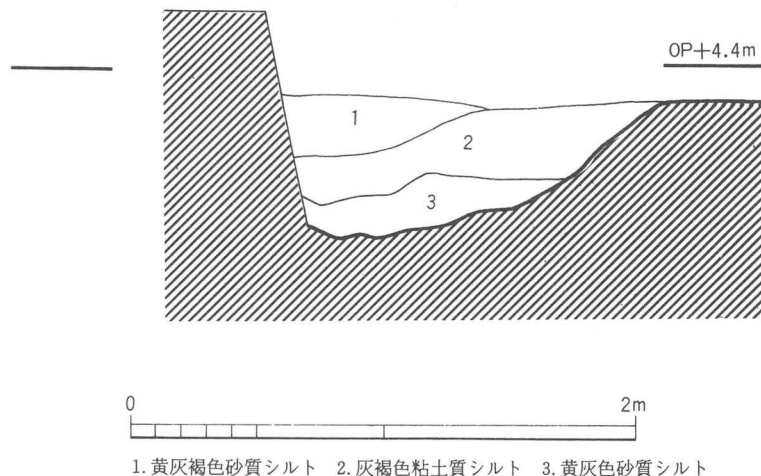
上面の直径2.68m、底面の直径2.08m、深さ0.53mの円形を呈する土壙の南側を掘出した。断面は播鉢状で土壙内の埋土は灰褐色粘土質シルトであった。ここからは瓦器椀、土師器小皿、同羽釜、瓦、須恵質陶器、瓦器羽釜脚、木製椀が出土した。特に土壙の西側では底に置いたような形で土師器羽釜の完形品とその上に木製の一升椀が置かれていた。出土遺物から14世紀前半に埋まったものである。

土壙11

溝31のすぐ西側に隣接する。直径1.12m、深さ37cm、円形を呈する土壙である。断面形は皿状である。埋土は黄褐色粘土質シルト、暗灰褐色粘土質シルトである。底には全面に黒色の灰が検出され、わら状の植物繊維質のものをここで焼いたと思われる。黄褐色粘土質シルトからは、土師器中皿、瓦器椀、土師器小皿、同甕、同羽釜の破片が少量出土した。14世紀代のものと思われる。

土壙12 (第46図)

方形の大きな土壙で全体の大きさは不明である。検出したものでは長さ1.8m、深さ56cm、断面が播鉢状でゆるやかに傾斜する。埋土は上から黄灰褐色砂質シルト、灰褐色粘土質シルト、黄灰色砂質シルトで底は淡褐色中粒砂である。黄灰褐色砂質シルトからは、土師器小皿、瓦器



第46図 土壙12 断面実測図

碗を主体として土師器羽釜、瓦、須恵質陶器が、灰褐色粘土質シルトからもほぼ上層と同種、同割合で遺物が出土した。

土壌13

検出したものは0.6m×0.5m、深さ15cmの方形の土壌であるが北側へ延びているため全体の大きさは不明である。埋土は灰褐色砂質シルトで、土師器小皿、瓦器碗を主体として土師器羽釜、同中皿、瓦、瓦器練鉢、同羽釜、須恵質陶器が出土した。

落ち込み3

3 A13-15×地区で検出した。北側へゆるやかな傾斜で落ち込むが起伏は激しい。埋土は暗灰色粘土で、瓦器碗、土師器小皿、同大皿、同羽釜、須恵質陶器、瓦器羽釜、同羽釜脚、砥石、鉄滓が出土した。

シガラミ状遺構（堰状遺構）

シガラミ状遺構の全長は明確にしがたいが、推定すれば東西約17m、検出した最大幅約4m、検出高54.2cmの規模をもつ。シガラミ状遺構は南側で約33度北へふる主軸をもち、ほぼ直線的に設置されている。南南西から北北東への水の流れを直角に堰止めていたものであると思われる。シガラミ状遺構の西端は青灰色粘土となっており、これが岸となっていたものであろう。遺構の基底は青灰色シルトにおいており、これが遺構構築時の流路床であると思われる。

遺構の構造は残存状態がきわめて悪いのと、一部分のみの検出であるため明確ではないが推定すると次のようになるとと思われる。まず横木を流路と直角の方向に渡し、横木を固定するため径5cm前後の杭を20cm～30cmの間隔で打ち込む。この杭は頭を北と南に交互に向くように打ち込んでいる。ついでこの横材の流出を防止するため下流側に径3cm～4cm、長さ2mの斜材を流路床に接するぐらいの小さな角度で打ち込み、ツル状のもので横木に固定する。そして横木の周辺に自然木、板などを頭をやや下流に向けて何本も打ち込む。斜材の間に小枝・流木・板材・草木植物等をつめ込んで流水を堰き止める。これでは完全に流れを堰き止めることができないため同様の施設をこれと平行に設置している。ただ、使用されている材が0.5cm～1cmと極めて細いこのことから、流れがあまり速くなく、どちらかという淀んだ流れに築かれたものと思われる。

6. 1 A 3～3 A 6 地区

当該地区も、昭和54年度に調査を実施した地区である。府道四条～長堂線の北側道路下と道路に接する水田地を調査した。調査面積は、東西140.7m、南北4mで、563㎡である。調査区のほぼ中央部に東西に走る旧水道管が埋設されていたため、大規模に削平を受けていた。盛土約0.5mを機械掘削し、以下約3mまで人力掘削による調査を行なった。

層序

1 A 地区（第47図）

第1層 盛土 道路建設時の盛土、旧耕土を含む。

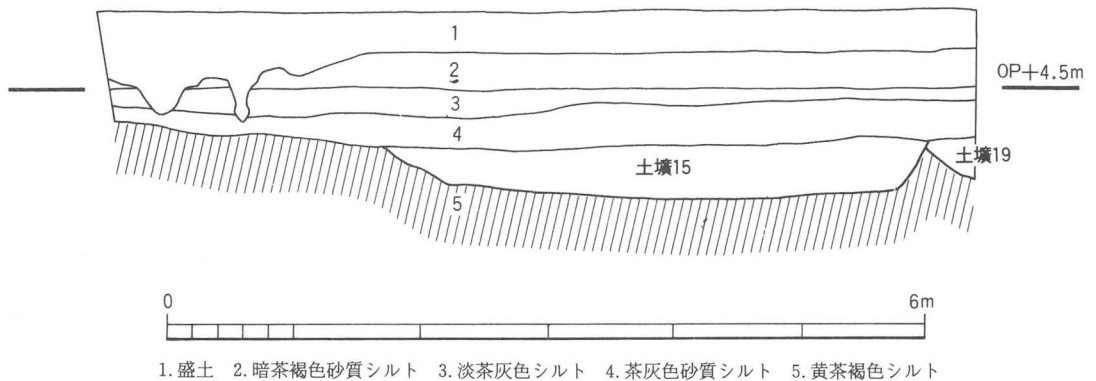
第2層 暗茶褐色砂質シルト 粗粒砂を多く含んでいる。中世から近世の遺物を少量含む。

第3層 淡茶灰色シルト 若干砂質である。細粒砂を非常に多く含んでいる。中世から近世の遺物を含む遺物包含層であるが、2次堆積によるものである。従って、出土する土器は、細片が多く磨滅が著しい。

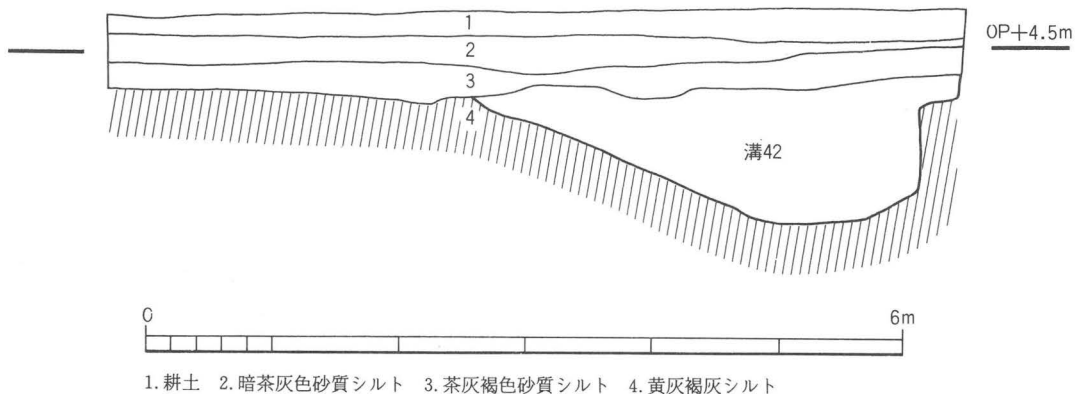
第4層 茶灰色砂質シルト 若干粘性が認められる。第3層同様、鎌倉時代から江戸時代までの遺物を含む遺物包含層である。しかしながら、江戸時代以後に削平を受けた後に堆積した2次堆積の遺物包含層である。

第5層 黄茶褐色シルト 自然堆積層である。鉄分の沈着が多く認められる。当遺跡西側に大きく広がりを認める層である。鎌倉時代、室町時代の遺構面を形成している。

当該地区は、第3層、第4層より遺物が多く出土しているが、いずれも江戸時代以後に大規模な削平を受けた後に堆積した2次堆積の遺物包含層である。従って、古墳時代、奈良時代、平安時代、鎌倉時代、室町時代、江戸時代の遺物が出土している。この中で最も出土量が多い



第47図 1A11-12地区南壁断面実測図



第48図 3A12-15地区北壁断面実測図

のは鎌倉時代、室町時代の遺物である。第5層は、鎌倉時代、室町時代の遺構を同一面で検出した遺構面である。整地層は当該地区では検出できなかった。

3 A地区 (第48図)

第1層 耕土 現在水田として使用中である。

第2層 暗茶灰色砂質シルト 水田の床土である。中世から近世の遺物を若干含んでいる。

第3層 茶灰褐色砂質シルト 細粒砂を多く含んでいる。鎌倉時代から江戸時代に至る遺物を多く含む遺物包含層であるが、2次堆積の遺物包含層である。

第4層 黄灰褐色シルト 若干砂質であり、鉄分の沈着が非常に多く認められる。1 A地区第5層と同一であり、自然堆積層である。鎌倉時代、室町時代の遺構面を形成している。

当該地区も、1 A地区同様、遺物包含層は、江戸時代以後の大規模な削平の後に堆積した2次堆積の包含層である。第4層も第5層と同一層であるが、西側へ行くほど砂粒を多く含み、調査区西端付近では存在しなくなっている。さらに1 A地区とは約50cmの比高差があり、遺構数が減少し、残りも悪い。従って、当該地区は、前地区よりさらに削平を大規模に受け、遺跡の西端に近づいていると言えよう。

遺構 (第68・69・70・71図)

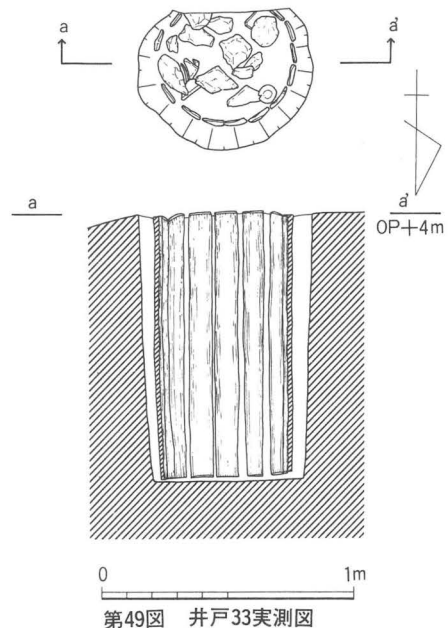
当該地区で検出した遺構は、井戸8基、溝15条、土塋7基、落ち込み3個である。いずれも黄灰褐色シルト層上面から検出している。

井戸33 (第49図)

最大径72cm、最小径52cm、深さ1.05mを測る。円形の掘形を持ち、井側は、長さ105cm、幅20cm、厚味2cmの縦板を12枚、竹のタガで締めつけ、円形に組み合わせている。上部は近世以後の削平により残っていない。出土遺物は、井戸内から土師器、須恵器、瓦器、土師器羽釜、瓦がある。井戸の廃絶時期は、土師器皿などにより15世紀後半から16世紀前半と思われる。

井戸34 (第50図)

最大径1.68m、最小径1.6m、深さ76.4cmを測る楕円形で2段に掘り込んだ掘形を持っている。井側は、長さ37cm、幅約8m、厚さ約2cmの縦板を20枚円形に組み合わせ、竹のタガで締めつけている。井戸の上部は、近世に削平を受けて残っていないが、本来、瓦あるいは石で構築していたと思われる。出土遺物は、掘形内より土師器、瓦器、土師器羽釜、瓦器羽釜、青磁、



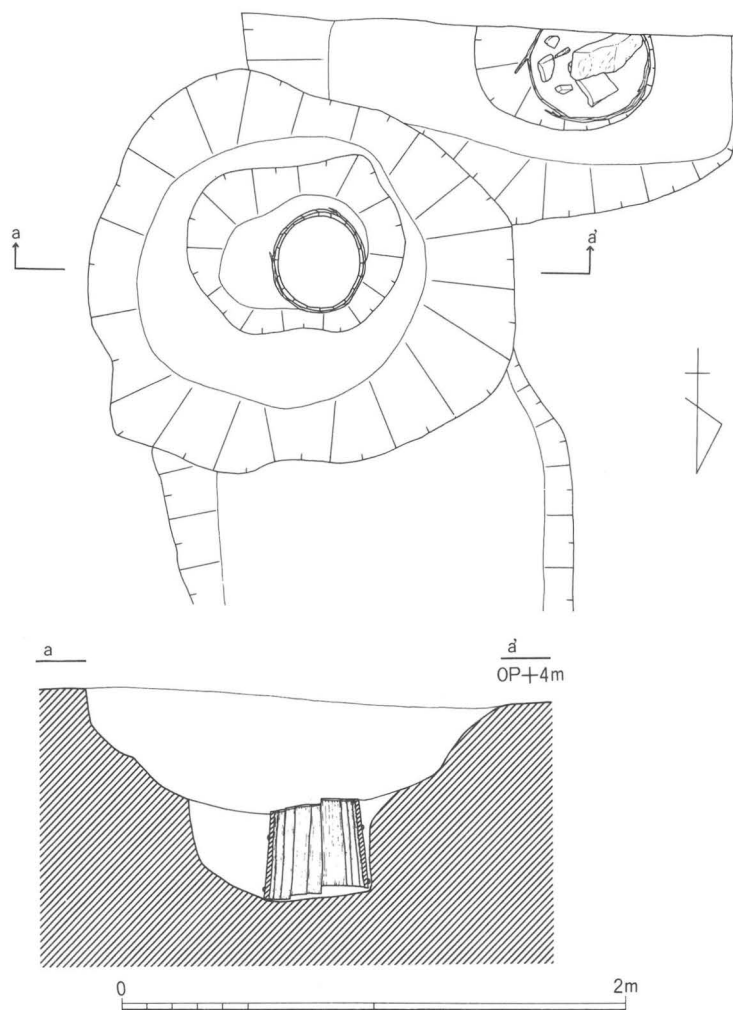
瓦が出土し、井戸内からは、土師器、須恵器、土師器、瓦器羽釜、瓦器、瓦が数多く出土した。これらの多くの遺物より廃絶時期は、16世紀後半であると考えられる。

井戸35（第50図）

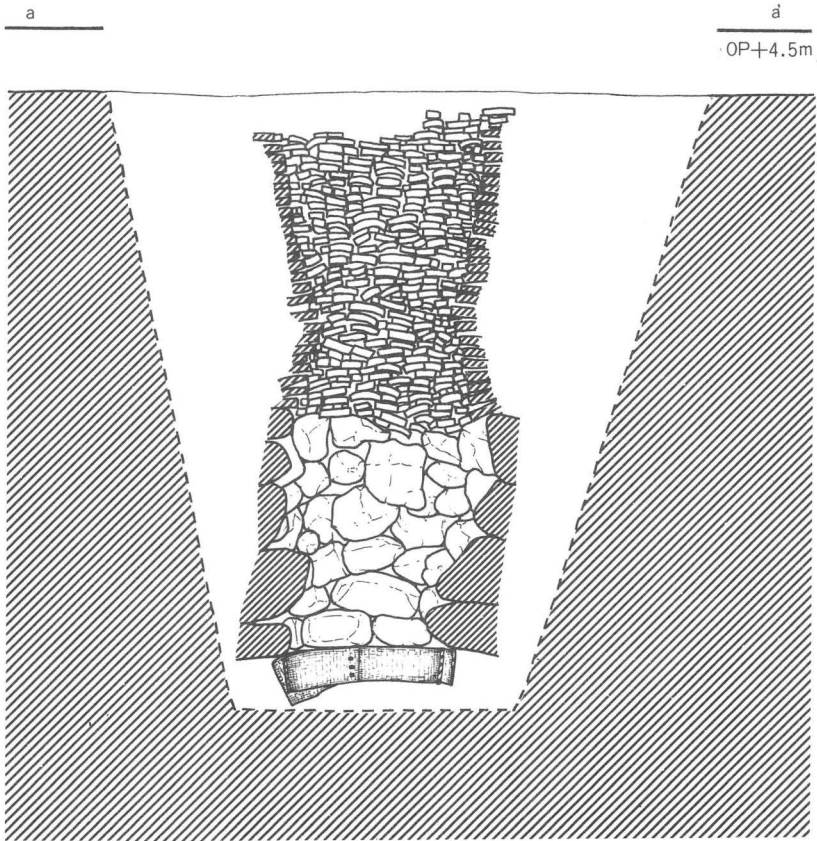
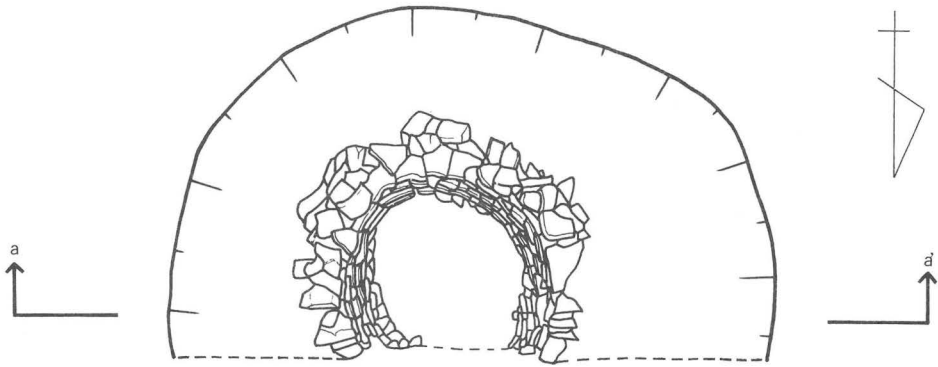
井戸34と切り合い関係にあり、この井戸の方が古い。最大幅2m、深さ54cmを測る楕円形の掘形を持っている。井側は、径48cm、深さ54cmの曲物を西よりにすえている。曲物の残りは非常に悪く、取り上げは不可能であった。この井戸も、近世以後に削平を受けており上部構造は残っていなかった。遺物は、井側より土師器、須恵器、瓦が少量出土している。井戸の廃絶時期は、土師器より16世紀中葉と考えられる。

井戸36

瓦積の井戸である。掘形は、最大幅1.44m、深さ1.19mを測る楕円形を呈し、断面は逆台形で



第50図 井戸34・井戸35実測図



第51図 井戸37実測図

ある。井側は、上部は平瓦、丸瓦を使用し、円形に上部から下方に向けて開き気味に構築している。径60cmを測る。下部は人頭大の石を円形に1段組み合わせている。遺物は、土師器、須恵器、瓦器、瓦が出土している。遺物から井戸の廃絶時期は16世紀後半と考えられる。

井戸37 (第51図)

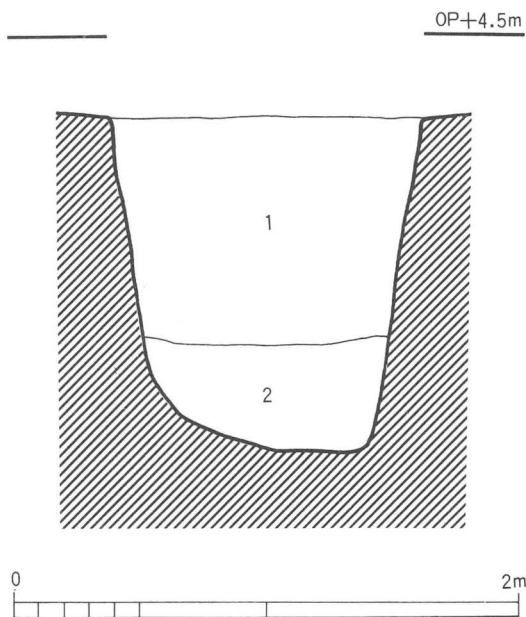
最大幅1.72m、深さ2.28mを測る楕円形の掘形を持つ瓦積の井戸である。井側の上部は平瓦、丸瓦を円形に組み合わせ、上方から下方に向けて若干開かせて構築している。下部は人頭大の石を円形に1段組み合わせ、さらに、径78cmの曲物を2個重ねてすえつけている。遺物は、土師器、須恵器、瓦器、備前焼、常滑焼、古銭など多数出土している。廃絶時期は、土師器、備前焼などからみて16世紀後半であると考えられる。

井戸38 (第52図)

最大幅1.2m、深さ1.34mを測り、楕円形を呈する素掘りの井戸である。ほぼ垂直に掘り込んでいる。井戸内から井側を構成するものが全く出土していないので素掘りと断定している。出土遺物は、土師器、瓦、古銭が少量出土した。しかし、すべて細片であり、時期の判別しうるものは無い。従って井戸の廃絶時期も不明である。

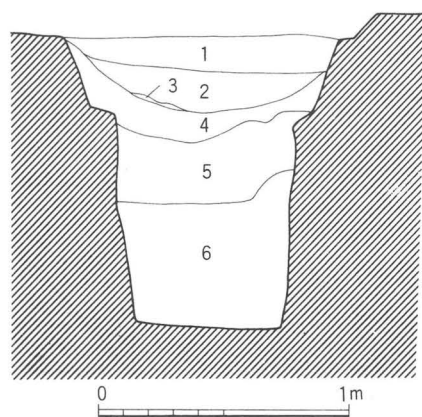
井戸39 (第53図)

最大幅1.2m、最小幅1.08m、深さ1.25mを測る楕円形の素掘りの井戸である。内部構造はなく、2段に掘り込んでいる。断面形態は、上段が逆台形、下段が長方形を呈している。遺物は、土師器、須恵器、瓦器が出土した。井戸の廃絶時期は、土師器、瓦器碗からみて12世紀中葉から後半であろう。



1. 暗灰色砂 2. 灰褐色粘土質シルト

第52図 井戸38断面実測図

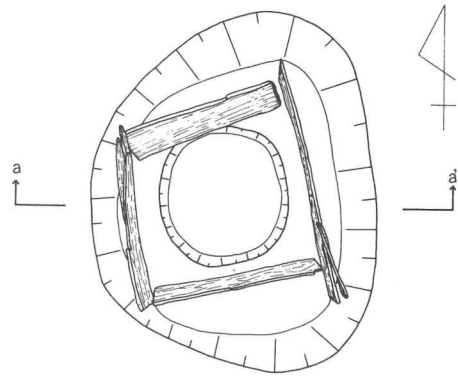


1. 灰褐色砂質シルト 2. 黄灰褐色粘土質シルト
3. 黒色粘土質シルト 4. 黄褐色粘土質シルト
5. 灰色粘土質シルト 6. 暗灰色粘土

第53図 井戸39断面実測図

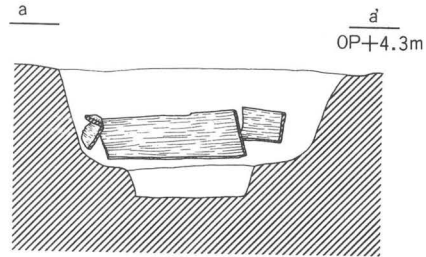
井戸40 (第54図)

削平が著しく、残りは悪い。最大幅1.4m、最小幅1.16m、深さ56cmを測る楕円形の掘方を持っている。井側は、幅20cm、長さ60cm~100cm、厚味2cmの板材を4枚、いげた状に1段組み合わせ、その下方に残存していないが、径110cmの曲物をすえていたと思われる。遺物は、土師器、瓦器が少量出土したが、すべて細片で時期の判別可能なものはない。



溝14 (第55図)

検出幅4.8m、検出長2.8m、深さ1mを測る南北方向に走る大溝である。溝の東肩および、底は調査区外になる為、確認し得なかった。溝の断面形態は、浅い皿状である。埋土は存在せず、溝の中の土はすべて粘土質シルトおよび粘土で構成する堆積土である。このことは、溝が存在していた当時、常に水が溜っていたことを示していると思われる。出土遺物は、土師器、



第54図 井戸40実測図

須恵器、瓦器、土師器羽釜、瓦、木製品が多く出土した。特に土師器皿が多く、完形品も数点出土している。これらの遺物から、この溝は14世紀後半から15世紀初頭には廃絶されたと考えられる。

溝15

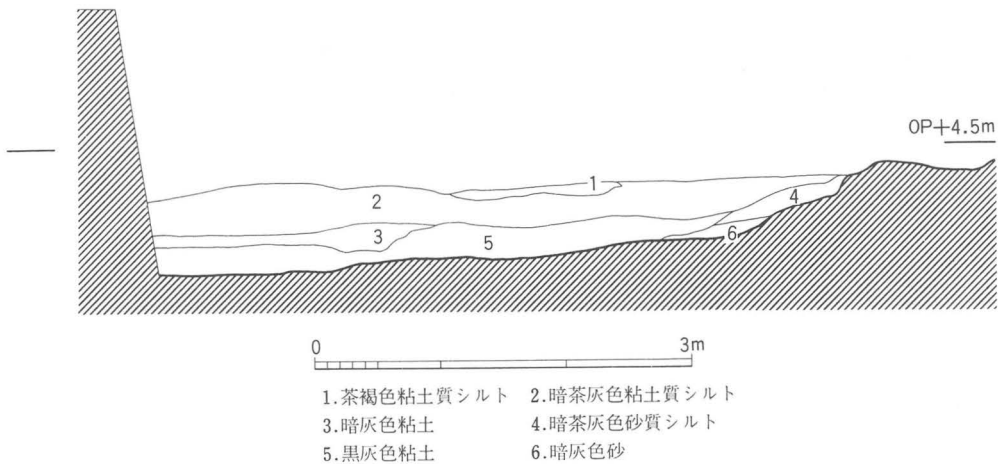
幅64cm、検出長2.8m、深さ21.5cmを測り、断面椀状を呈し、南北方向に走る溝である。埋土は、黄茶褐色砂質シルトのみで、短時間に埋まったことを示している。遺物は、土師器、須恵器、瓦器、土師器羽釜、瓦器羽釜、瓦が多く出土した。これら多くの遺物から溝の廃絶時期は、16世紀中葉から後半であると考えられる。

溝18

幅2.4m、深さ60cm、検出長31mを測り、断面U字形を呈する溝である。東西方向に走っており、1 A12地区ではほぼ直角に南へ曲っている。溝の西側は溝23によって切られている。埋土は黄褐灰色砂質シルト、堆積土は暗青灰色粘土である。水が流れていた形跡はあまり認められない。遺物は、土師器、須恵器、瓦器、土師器羽釜、瓦器羽釜、青磁、白磁、染付、備前焼、常滑焼、瓦、石臼、木製品が多量に出土した。溝の廃絶時期は、埋土内より16世紀後半の土師器、染付などが出土していることによりこの時期であろう。

溝23

幅10.34m、深さ1.5m、検出長3mを測り、断面椀状を呈する大溝である。東肩は2段に掘



第55図 溝14断面実測図

り込んでいる。南北方向に走っている。溝全体に暗青灰色粘土、黒灰色粘土が堆積しており、常時水が溜っていた状況がうかがえる。この溝は今回検出した溝の中では溝1に次いで大規模な溝である。遺物は、土師器、須恵器、瓦器、瓦器羽釜、青磁、白磁、染付、古伊万里、唐津焼天目、瓦、キセル、木製品が多量に出土した。唐津焼、あるいは古伊万里など近世に入る遺物が出土していることから見て、溝の埋った時期は17世紀初頭と考えられる。

溝37

幅1.52m、検出長1.4m、深さ14.7cmを測り、断面形態は浅い逆台形を呈する溝である。やや西に振りながら南北方向に走っている。遺物はまったく出土しなかった。従って時期は不明であるが、井戸34に切られていることから下限は、16世紀後半に置くことができる。

溝38

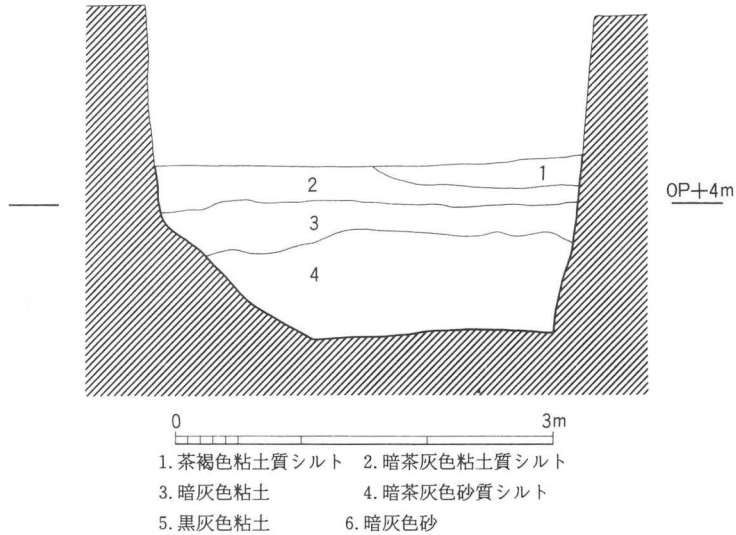
幅32cm、検出長1.4m、深さ15.5cmを測る。断面形態は浅い椀状を呈している。ほぼ南北方向に走る小溝である。溝の南端はトレンチほぼ中央で終わっている。出土遺物は、土師器、須恵器、瓦器、瓦が出土したが少量でかつ細片であるため時期は不明である。

溝39

幅36cm、深さ10.5cm、検出長2.52mを測り、断面は椀状を呈し、東西方向に走る小溝である。西側は土壌16によって切られている。埋土は、暗茶褐色砂質シルトである。出土遺物は、土師器、瓦器、瓦が少量出土した。廃絶時期は、切り合い関係より下限が15世紀代に設定できるが上限は、遺物が細片であるため決定できない。

溝40

検出幅32cm、深さ35cm、検出長2mを測る溝である。北肩の一部分を検出したにすぎず、大部分はトレンチ外である。溝18によって切られているため、溝の廃絶時期の下限は、16世紀中葉から後半である。



第56図 溝41断面実測図

溝41 (第56図)

検出幅2.8m、深さ1.16m、検出長28.04mを測り、断面U字形を呈する大溝である。南北肩とも2段掘りを行なっている。方向は、やや北に振るが、ほぼ東西方向に走っている。東側は溝23によって切られている。埋土は、茶灰色砂、青茶灰色砂質シルトで、堆積土は、上層が茶灰褐色粘土質シルト、下層が暗青灰色粘土である。この溝も堆積状況を見る限り水が流れていた形跡は認められなかった。遺物は、土師器、須恵器、瓦器、瓦器羽釜、土師器羽釜、青磁、白磁、備前焼、常滑焼、瓦、石臼、木製品が多量に出土した。これら多くの遺物から、溝の廃絶時期は、15世紀後半から16世紀前半であると考えられる。

溝42 (第57・58図)

検出幅3.4m、深さ1.33m、検出長2.84mを測る。西肩は3段に掘り込んでおり、断面は椀状を示している。方向は南北方向である。東肩は1段しか検出しておらず、全体の幅は不明であるが、推定すれば6m前後になると思われる。埋土は、灰褐色砂、灰褐色粘土質シルトで、これより多量の瓦が投げ込まれた状態で出土しており、一見瓦溜りの様相を呈している。堆積土は、暗青灰色粘土一層で、分層は出来なかった。出土遺物は瓦が大部分であるが、土師器、須恵器、瓦器、青磁、白磁、備前焼がある。溝の廃絶は、埋土内の土師器、備前焼をみると16世紀後半に比定しうるものである。

溝43

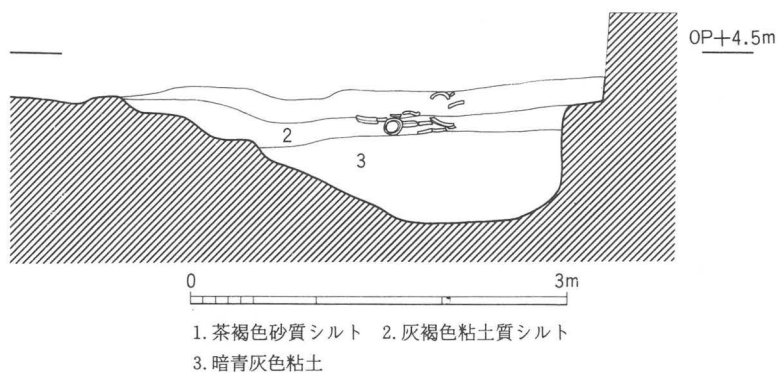
幅2m、深さ12cm、検出長4.04mを測り、断面は浅い皿状を呈する。北西から東南に若干蛇行しながら走っている。埋土は、黄灰褐色砂で、遺物は出土しない。時期は不明である。

溝44

幅1.2m、深さ27cm、検出長2.6mを測り、断面皿状を呈する溝である。方向は、北北東から南南西である。溝の南端は、袋状を呈して終結している。出土遺物は、土師器、須恵器、瓦器、



第57図 溝42平面実測図



第58図 溝42断面実測図

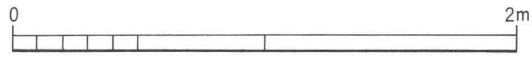
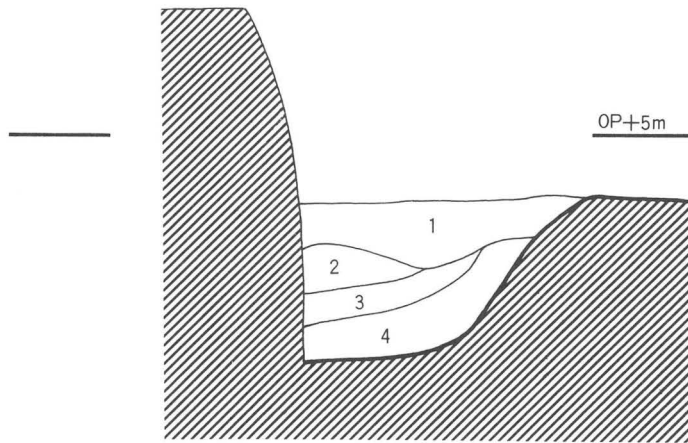
土師器羽釜、瓦が少量出土したが、細片であるため時期は不明である。

溝45

幅1.08m、深さ37cm、検出長1.12mを測る。断面皿状を呈し、北北西から南南東に走る溝である。落み込み6によって北側が切られている。遺物は出土しなかったため時期は不明であるが、切り合い関係にある落み込み6が16世紀後半であることから下限はこの時期であろう。

土壇14

最大幅1.2m、最小幅84cm、深さ40cmを測り、楕円形を呈する。断面は椀状である。埋土は、



1. 茶灰色砂 2. 暗茶褐色砂質シルト 3. 茶褐色粘質シルト
4. 暗褐色砂質シルト

第59図 土壌15断面実測図

黄褐色砂質シルトで、土師器、須恵器、瓦器、土師器羽釜が出土した。いずれも細片で、時期は決定し得ない。

土壌15（第59図）

南断面にかかっており全体の形状は明確ではないが、隅丸方形を呈すると思われる。最大幅4.64m、最小幅84cm、深さ57cmを測り、断面逆台形を呈する。埋土は上層より、茶灰色砂質シルト、暗茶褐色砂質シルト、茶褐色粘土、暗褐色粘土質シルトである。埋土の状況からすれば、除々に埋まって行ったと思われる。遺物は各層よりまんべんなく出土している。土師器、須恵器、瓦器、瓦器羽釜、土師器羽釜、青磁、白磁、備前焼、常滑焼、湊焼が出土した。土壌の廃絶時期は、土師器、備前焼などからみて16世紀後半であると考えられる。

土壌16

最大幅2.28m、最小幅1.44m、深さ61cmを測る。全体の形状は明確ではないが、長方形になるとと思われる。断面は逆台形を呈している。北は土壌17、南は土壌15によって切られている。埋土は上層より、黄褐色砂質シルト、茶灰色砂質シルトであり、埋土の状況からすれば短時間に埋まったものと考えられる。遺物は土師器、須恵器、瓦器、土師器羽釜、瓦器羽釜、備前焼、瓦が多量に出土した。これらの遺物からみれば、土壌は15世紀代に埋まったものと考えられる。

土壌17

最大幅88cm、最小幅40cm、深さ30cmを測り、断面逆台形を呈する。全体の形状は、南断面内にあるため不明であるが、楕円形に近い形を呈すると思われる。埋土は、茶褐色砂質シルトで

ある。遺物は出土しなかった。時期は溝18を切っていることから、下限を16世紀前半から中葉以後に置くことができる。

土壌18

最大幅72cm、最小幅56cm、深さ58cmを測り、断面逆台形を呈する。南断面にかかっており全形は不明であるが、楕円形を呈すると思われる。埋土は茶灰色砂質シルトである。遺物は出土しなかった。しかしながら、溝18を切っており、土壌17同様下限は16世紀前半から中葉に置くことができる。

土壌19

最大幅11.2m、最小幅2m、深さ1mを測り、断面逆台形を呈する大土壌である。全体の形状は、北断面にかかっており不明確であるが、ほぼ方形を呈すると思われる。西南隅の部分に溝18によって切られている。埋土は、上層より茶褐色砂質シルト、灰褐色粘土質シルト、暗青灰色粘土で、遺物は、暗青灰色粘土中に集中していた。土師器、須恵器、瓦器、瓦器羽釜、土師器羽釜、白磁、備前焼、常滑焼、瓦、曲物、箸、椀などの木製品が多量に出土した。土壌の埋まる時期は、土師器などよりみて16世紀前半であると考えられる。

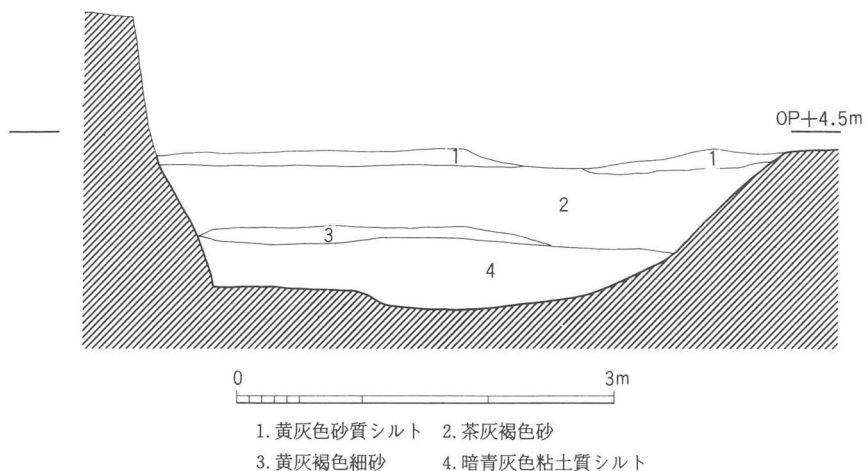
土壌20

最大幅3m、最小幅96cm、深さ25cmを測る。断面皿状を呈し、平面隅丸方形を呈すると思われる。埋土は、黄褐色砂である。遺物は出土しなかった。

土壌21

最大幅2.08m、最小幅1.88m、深さ18cmを測り、断面浅い皿状を呈する、ほぼ円形の土壌である。埋土は灰褐色砂質シルトである。遺物は、土師器、瓦器、瓦器羽釜、土師器羽釜、瓦が出土したが、いずれも少量で細片であり、時期の判別できるものはない。

落ち込み5



第60図 落ち込み8 断面実測図

最大幅7m、最小幅88cm、深さ30cmを測り、断面皿状を呈する大形落ち込みである。北断面に大半がかかっているため全形は明確ではないが、楕円形を呈すると思われる。東南隅は溝18によって切られている。埋土は、茶灰褐色砂質シルトのみである。遺物は、土師器、須恵器、瓦器、瓦器羽釜、土師器羽釜、備前焼、瓦が出土した。土壌の廃絶時期は、土師器、備前焼などの遺物、あるいは切り合い関係より16世紀前半であると考えられる。

落ち込み6

最大幅2.2m、最小幅60cm、深さ15cmを測り、断面浅い皿状を呈している。平面は一見溝状で、蛇行し、不定形である。埋土は、黄褐灰色砂である。遺物は、土師器、須恵器、瓦器、瓦器羽釜、土師器羽釜、白磁、備前焼、天目が出土した。落ち込みが埋まった時期は、遺物からみると16世紀後半であると考えられる。

落ち込み7

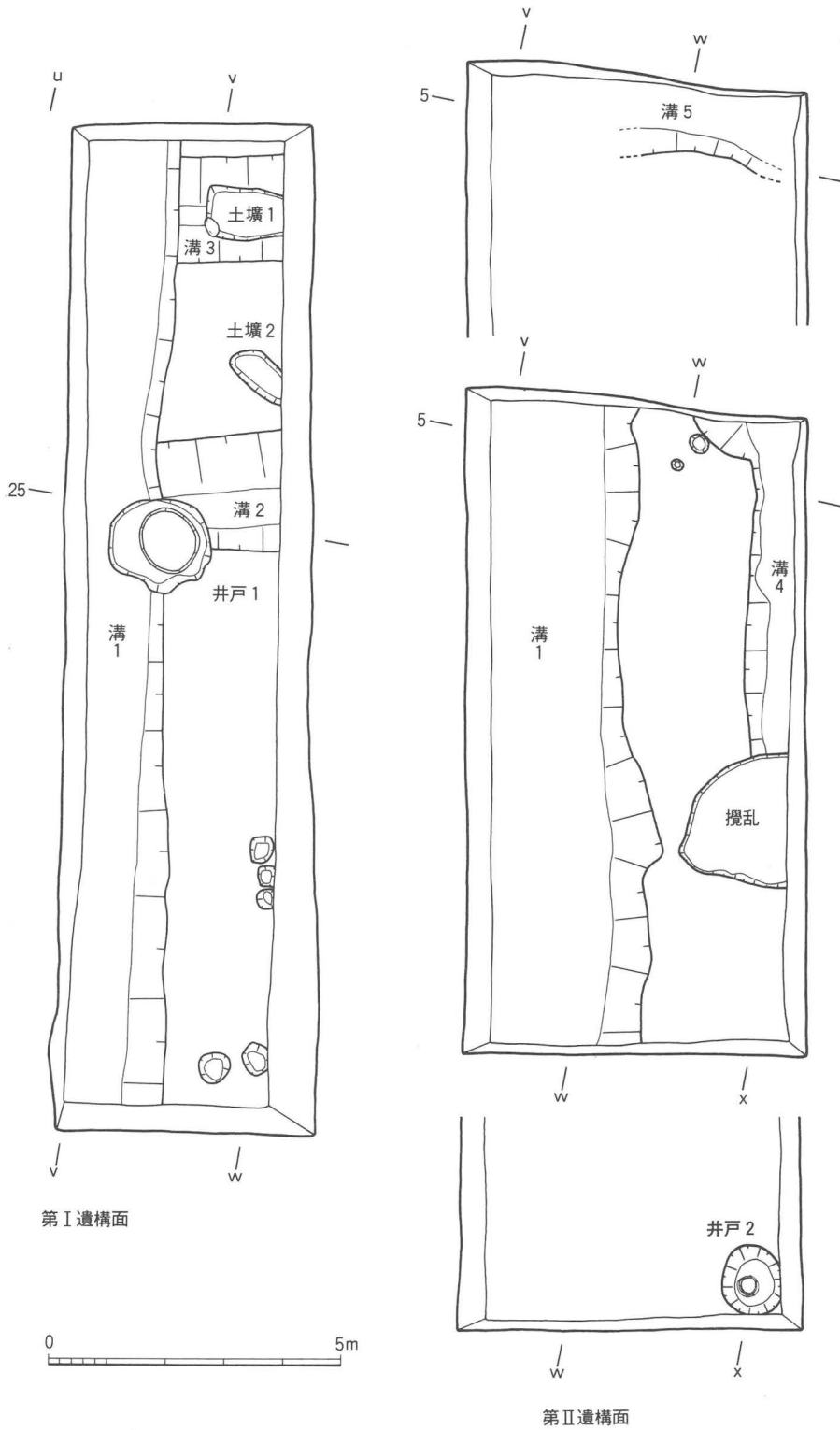
最大幅1.56m、最小幅76cm、深さ17cmを測る。断面は浅い皿状を呈し、平面は不定形ながらもたまご形に近い形状である。埋土は、茶褐色砂質シルトである。遺物は出土しなかった。

落ち込み8(第60図)

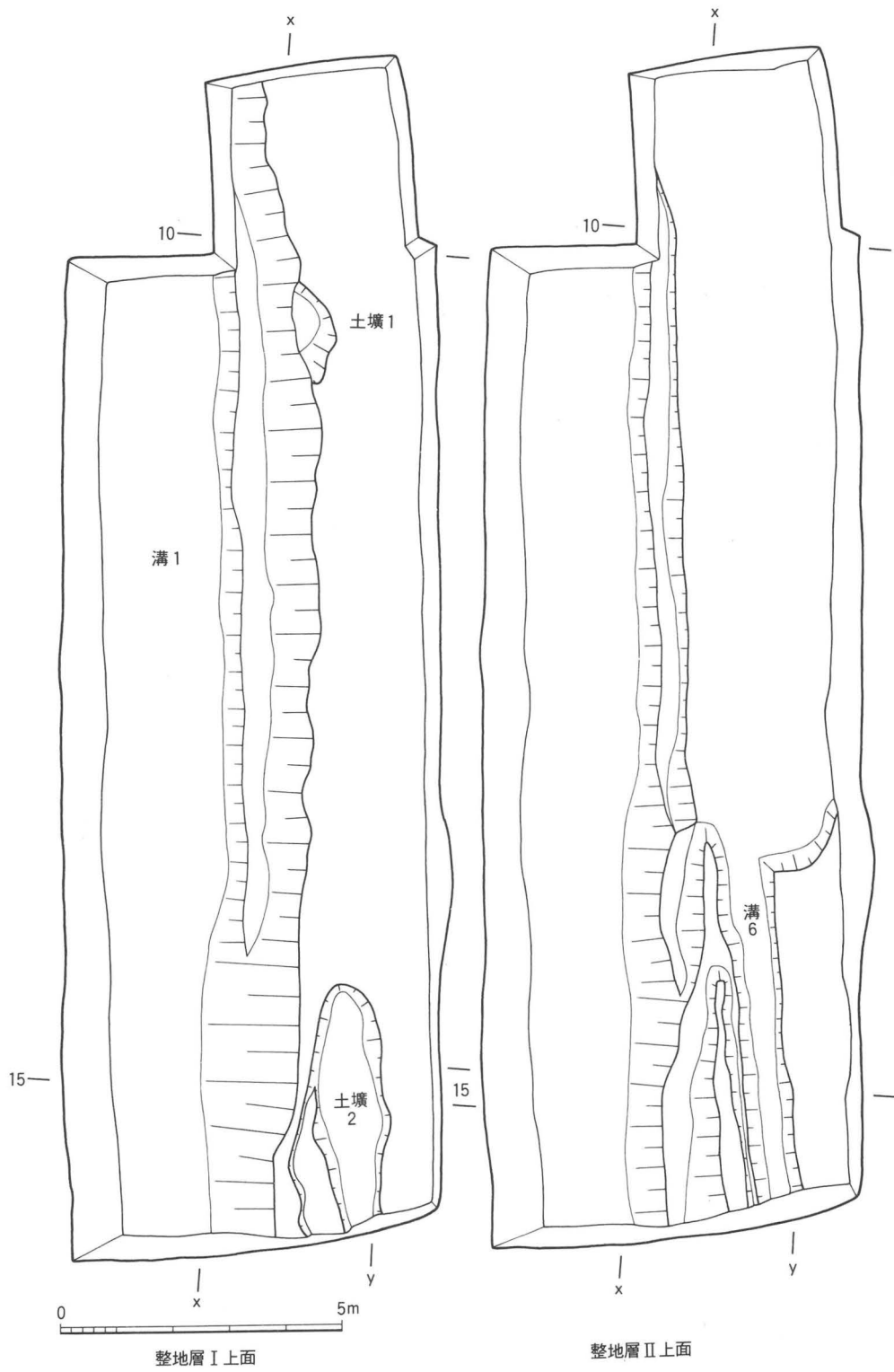
最大幅4.94m、最少幅68cm、深さ1.24mを測る。断面椀状を呈しており、不定形である。埋土は上層より、黄灰色砂質シルト、茶灰褐色砂、黄灰褐色細砂、暗青灰色粘土質シルトである。これらの埋土より、土師器、須恵器、瓦器、瓦器羽釜、土師器羽釜、青磁、白磁、備前焼、瓦が多量に出土した。これら多くの遺物からみて、15世紀後半に埋まったものと考えられる。

ピット群

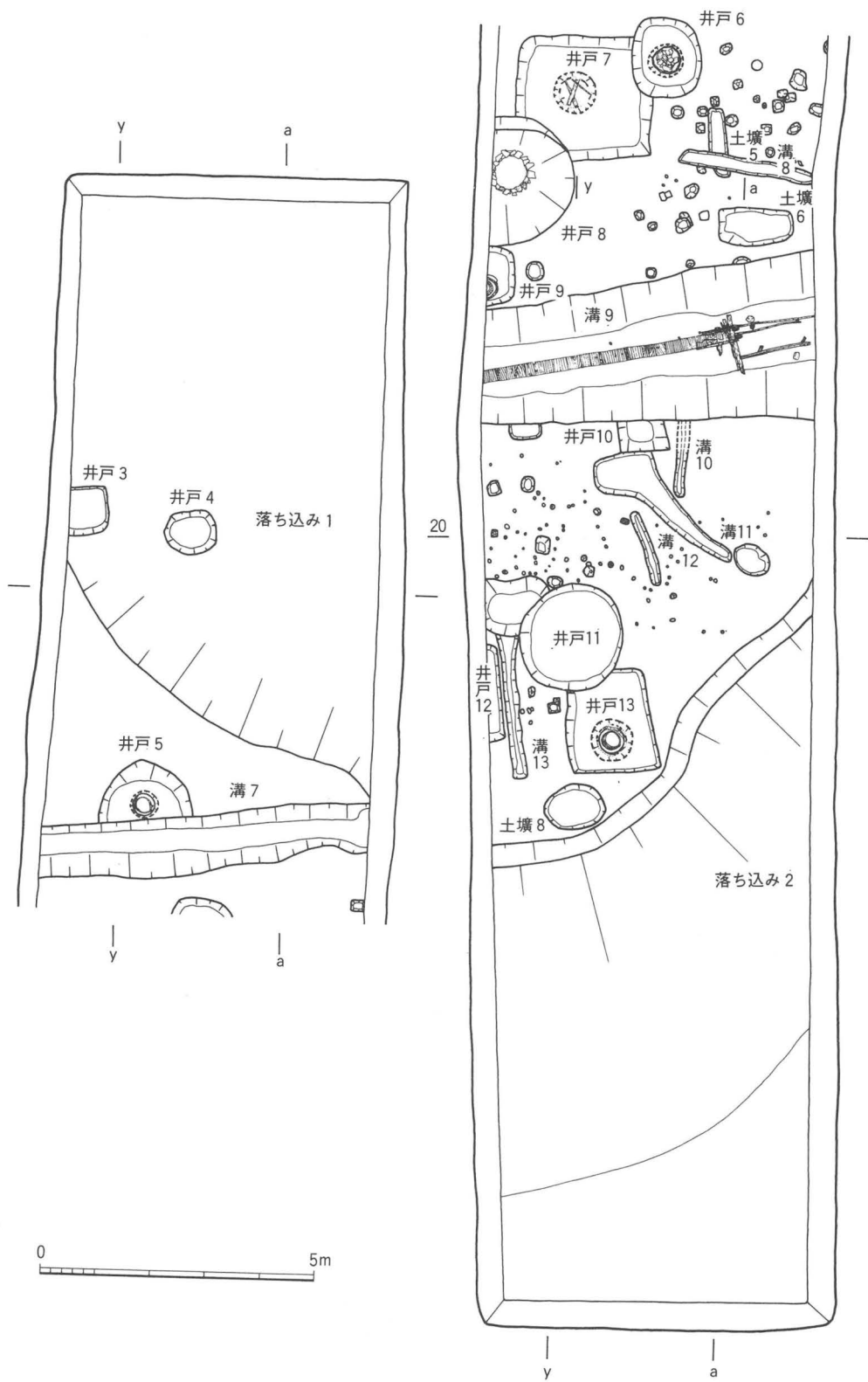
ピットは合計して9個検出した。1A8～11地区にほぼ集中している。形状は、円形あるいはたまご形のものである。最大のもは径72cm、最小のもは径18cmを測る。深さも不ぞろいであり、埋土も同一ではない。ピットはすべてが柱穴であると思われるが、建物、あるいは柵にはなり得ない。遺物は、各ピットより土師器、須恵器、瓦器、瓦器羽釜、土師器羽釜、瓦がそれぞれ少量出土している。



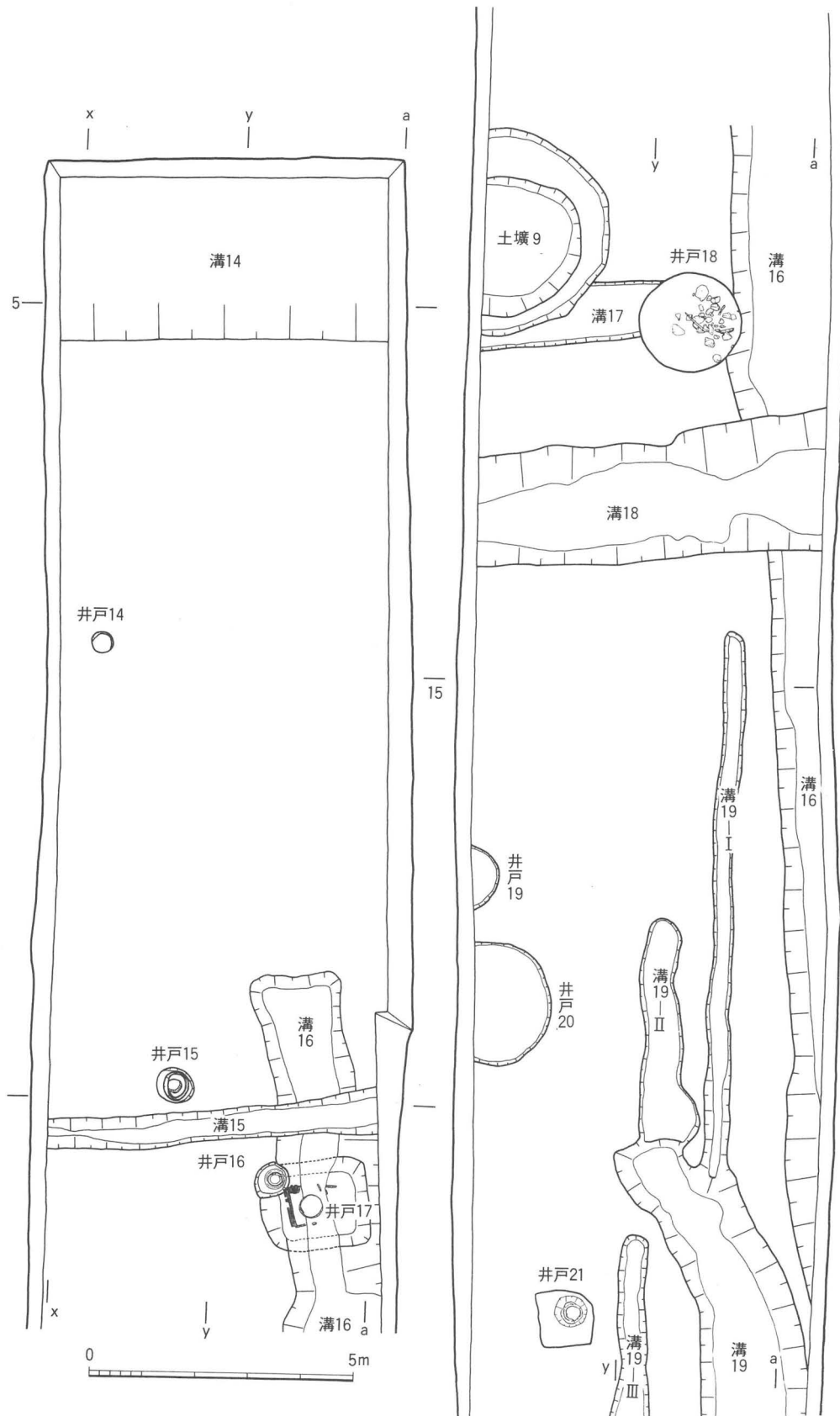
第61図 23A22-25・24A1-8地区遺構実測図



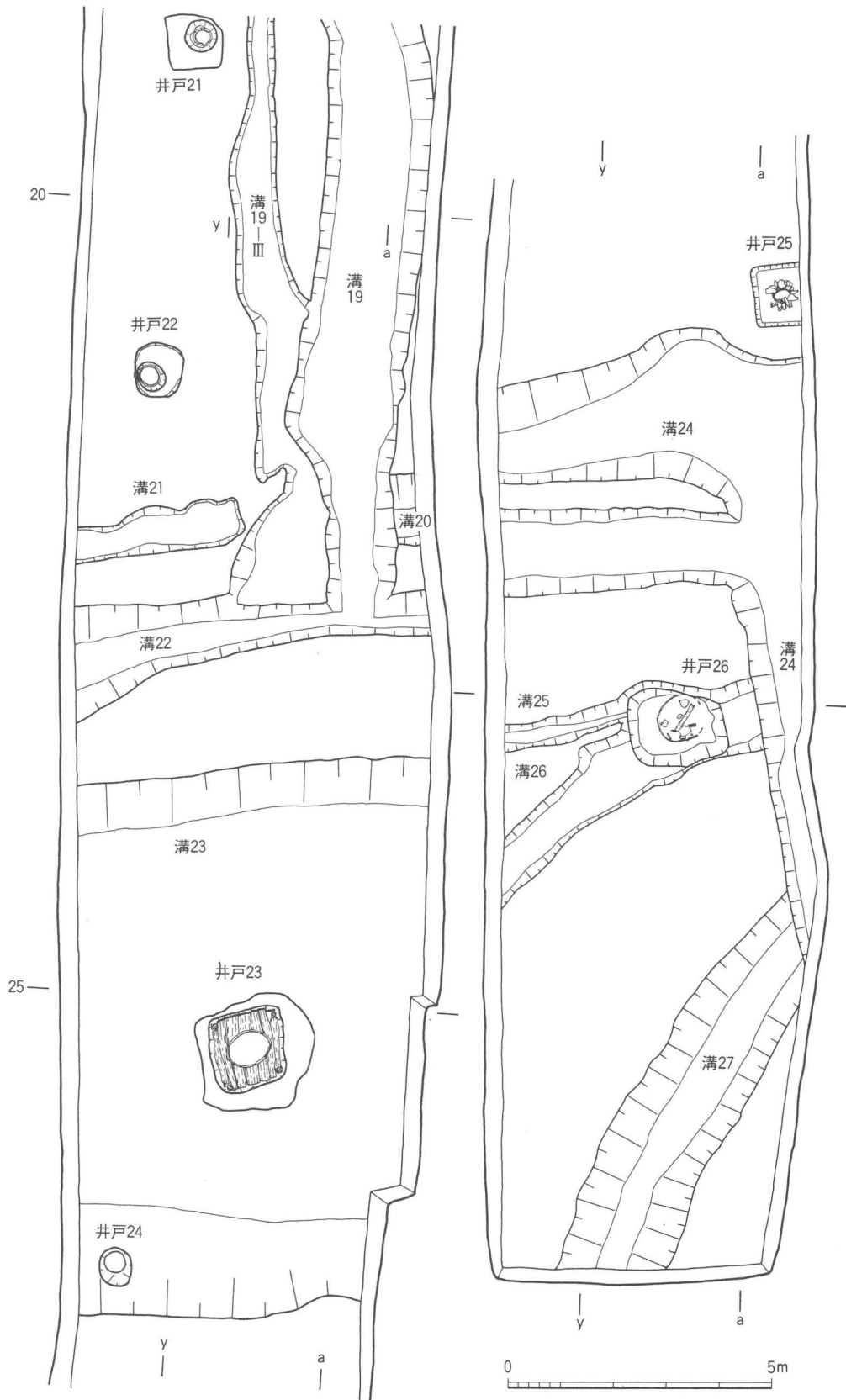
第62图 24A 8-16地区遺構実測図



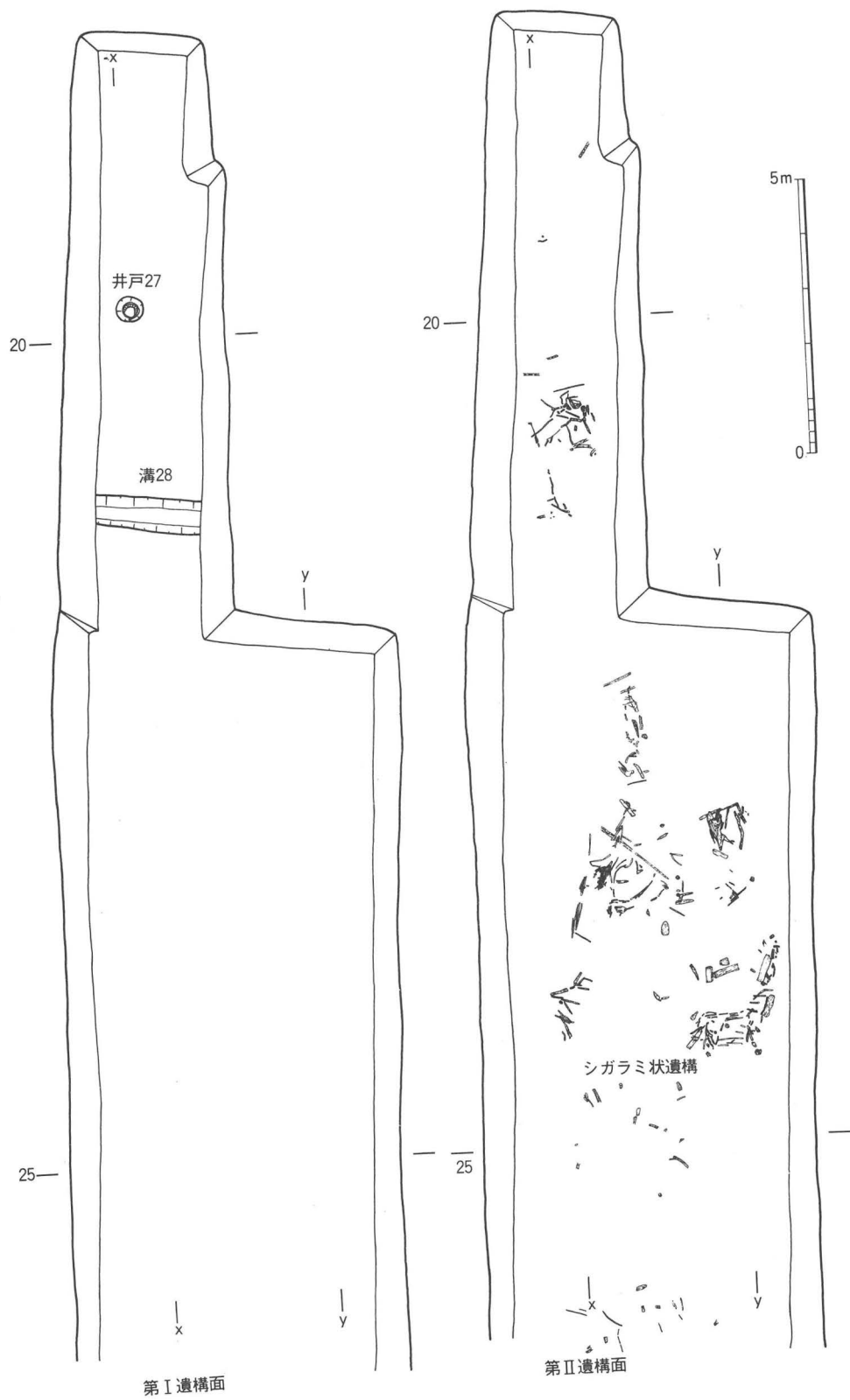
第63図 25A・B 12-24地区遺構実測図



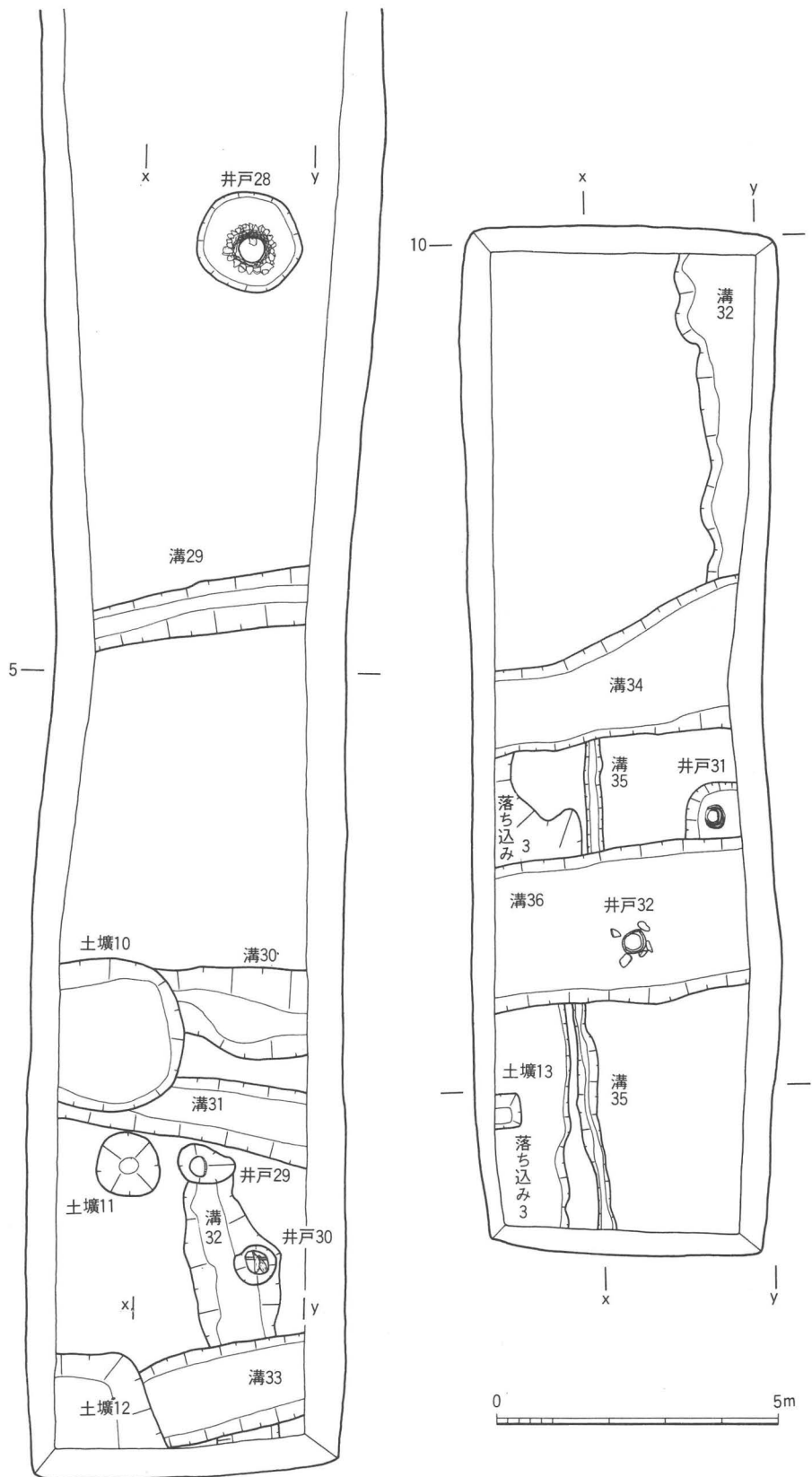
第64图 1 A · B 4 - 19地区遺構実測図



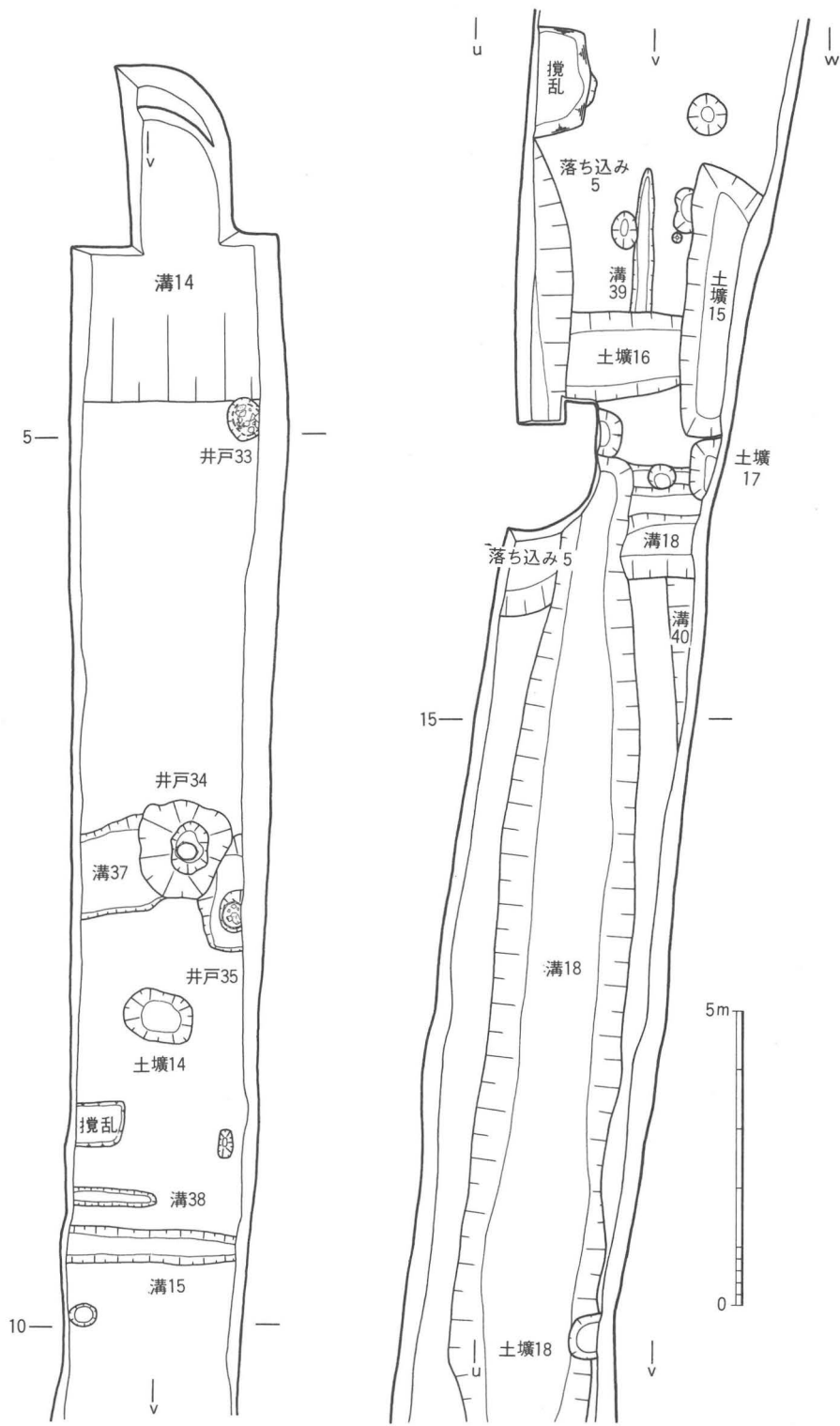
第65図 1A・B19-2A8地区遺構実測図



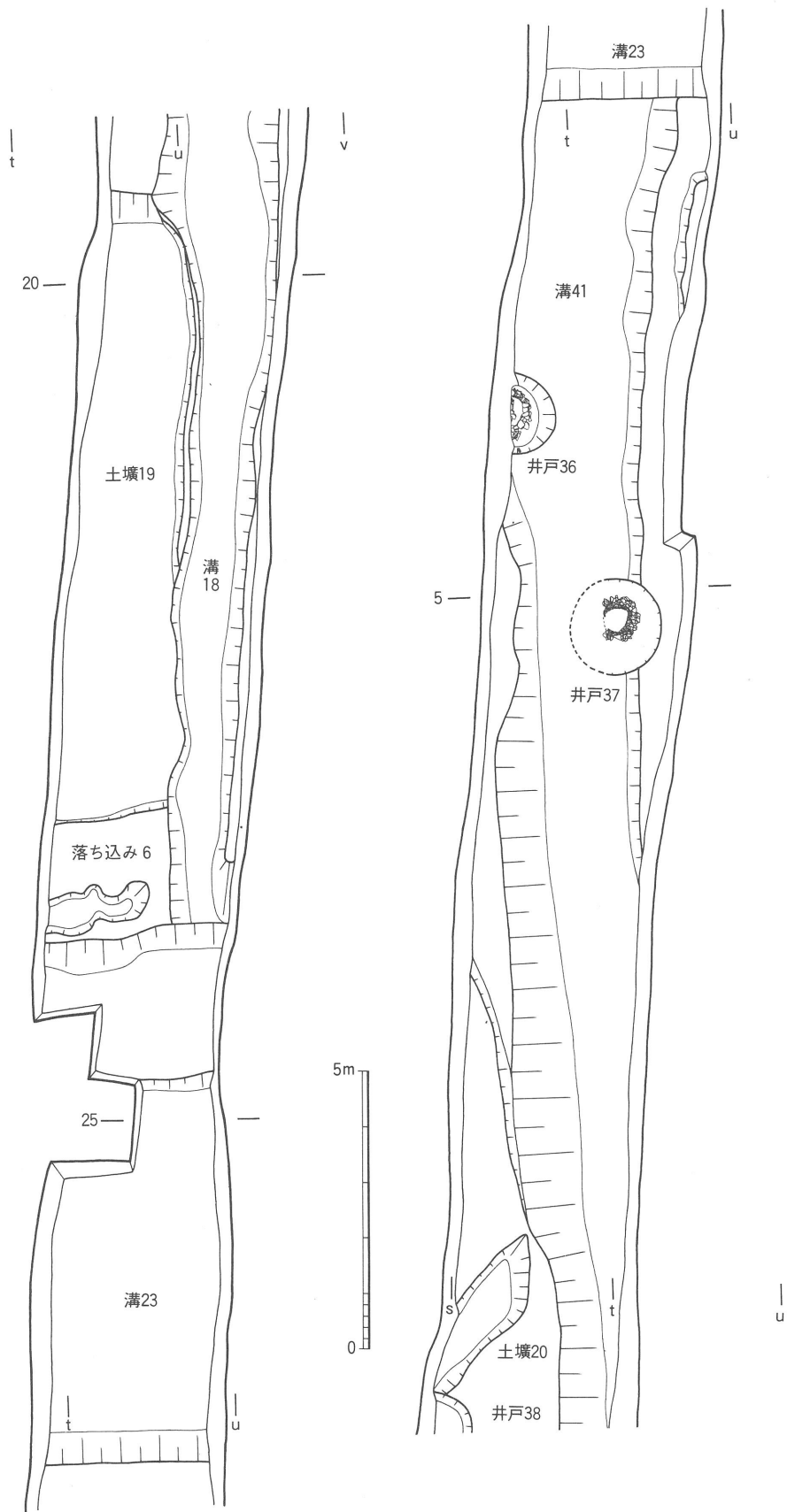
第66図 2 A18~3 A1 地区遺構実測図



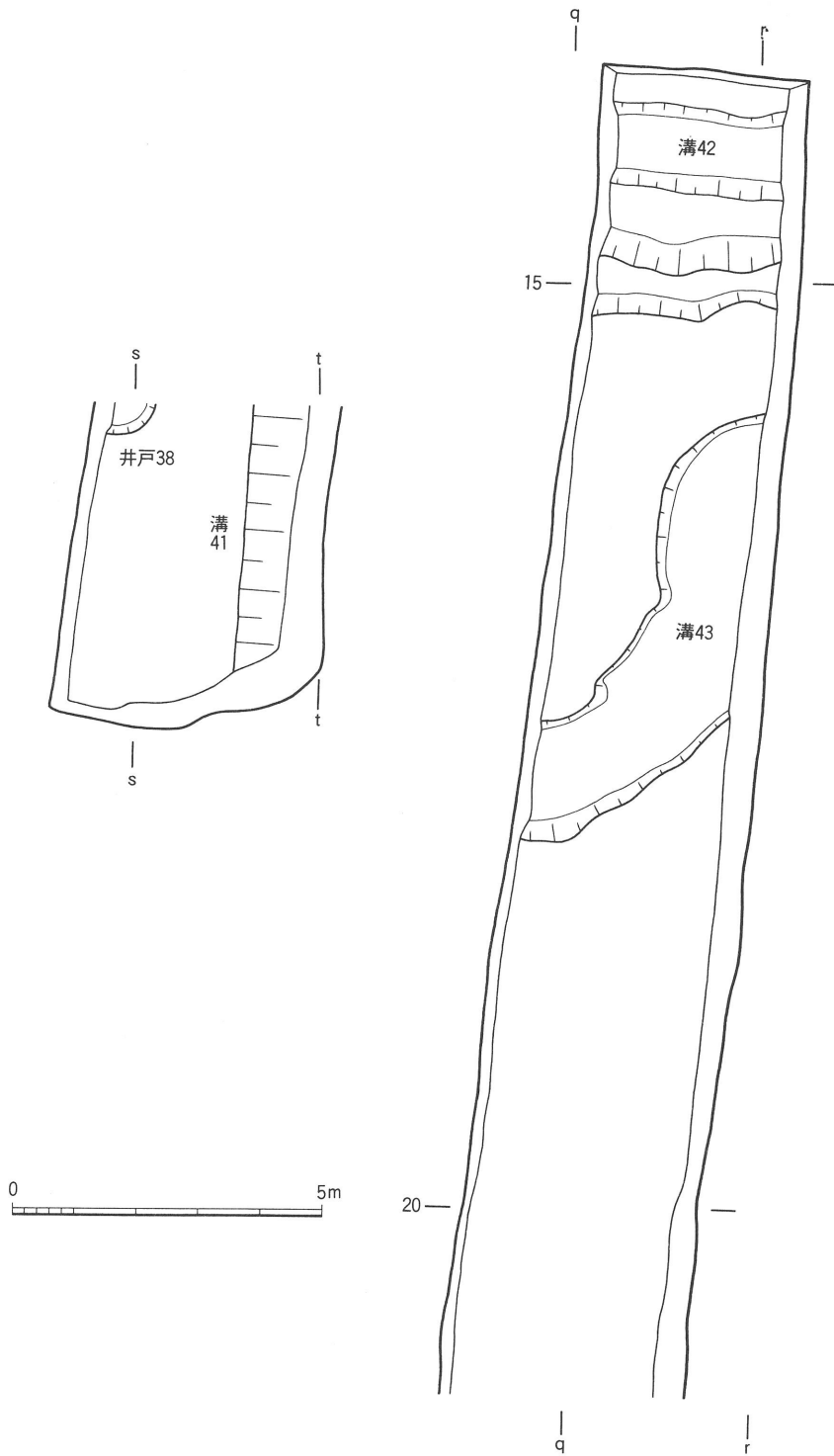
第67図 3A2-16地区遺構実測図



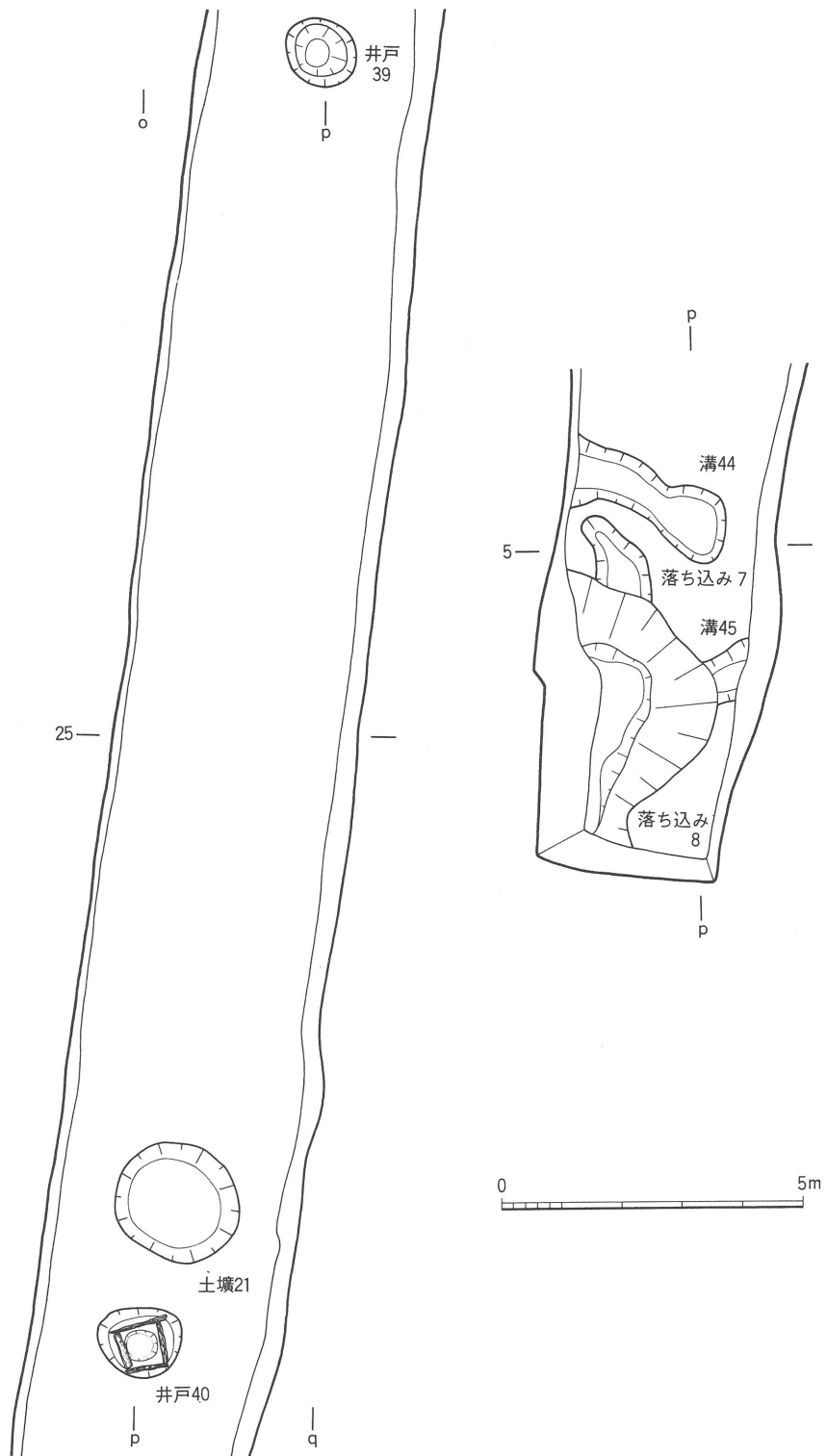
第68図 1A3-17地区遺構実測図



第69図 1 A18~2 A 9 地区遺構実測図



第70图 2 A 9—20地区遺構実測図



第71図 2 A20~3 A6 地区遺構実測図

表1 井戸一覧表

遺構 番号	掘 形				
	平面形態	断面形態	最大幅	最小幅	深 さ
1	楕円形	長方形	174	159	140
2	楕円形	逆台形	117	101	62
3	方形	長方形	89		106
4	楕円形	椀形	95	79	34
5	楕円形	ロウト形	174	112	164
6	隅丸方形	逆台形	137	124	126
7	長方形	T形	247	227	105
8	円形	ロウト形	230		235
9	隅丸方形	逆台形	120		152
10	方形	逆台形	90		69
11	円形	台形	190	187	160
12	方形	長方形	173		102以上
13	長方形	T形	183	164	205
14	円形	長方形	42	40	50
15	楕円形	長方形	76	66	65
16	円形	ロウト形	75	62	50
17	方形	台形	208	149	82
18	円形	長方形	192	191	60
19	円形	逆台形	125		100
20	円形	長方形	235		86
21	円形+方形	T形	107	104	52
22	楕円形	T形	104	90	87
23	不整形	ジョウゴ形	214	204	

井		側		
素 材	平面形態	構 造	規 模	深 さ
土器	円形	羽釜積み	φ28 D26	62
木	円形	曲物	φ41 D18 φ36 D24 φ39 D21 φ28 D13	76
木	円形	桶	φ53 D126	126
木	円形	桶+曲物	桶 φ54 D63 曲物 φ36 D28 φ33 D24	115
瓦・石・土器・木	円形	瓦積+桶	瓦積 φ56~60 D110 桶 2段 φ70 D60 φ70 D60	235
木・土器	円形	曲物+羽釜	曲物 φ40 D26 φ28 D19 羽釜 φ21 D18 φ23 D19	82
木	円形	桶+曲物	桶 φ54 D40 曲物 φ45 D38 φ33 D15 φ32 D16 φ33 D24 φ32 D29	162
木	円形	曲物	φ40 D25 φ40 D14	39
木	円形	曲物	φ45 D14 φ35 D19	33
土器・木	円形	羽釜+曲物	羽釜 φ23 D26 曲物 φ21 D10	36
木	方形+円形	板+曲物	板 80×80 D55 曲物 φ47 D22	77
木	円形	桶		
土器・木	円形	羽釜+曲物	羽釜 φ24 D20 曲物 φ31 D26	46
木	円形	曲物	φ38 D26 φ38 D21	47
木・瓦	円形+方形	瓦+桶+板 (隅柱, 横 棧, 縦板)	瓦 84×66 D30 桶 84×66 D90 板 120×124	

φは直径, Dは深さ, ~×~は一皿又は長径×短径
単位cm

表1 井戸一覧表

遺構 番号	掘		形		
	平面形態	断面形態	最大幅	最小幅	深 さ
24	楕円形	椀形	72	62	65
25	方形	長方形	121		114
26	不整形	逆台形	180	146	64
27	円形	椀形	50	46	26
28	円形	ジョウゴ形	187	176	130
29	楕円形	ロウト形	67	54	61
30	円形	ロウト形	72	68	59
31	円形	椀形	188	162	80
32					
33	円形	長方形	72	52	105 o. p 295
34	楕円形	2段逆台形	168	160	76 o. p 306
35	楕円形	逆台形	200	64	54
36	楕円形	逆台形	144	80	119 o. p 217
37	楕円形	逆台形	172	88	228 o. p 256
38	円形	長方形	120	68	134 o. p 334
39	楕円形	2段逆台形	120	108	125 o. p 300
40	楕円形	2段逆台形	140	116	56 o. p 361

井		側		
素 材	平面形態	構 造	規 模	深 さ
木	円形	曲物	φ40 D25	25
瓦・土器 石・木	円形	瓦積+曲物	最大47 最小22 φ30 D21 φ29 D19	45
木	円形	桶	タガの直径90	
木	円形	曲物	φ26 D26	26
瓦・石 土器・木	円形	瓦積+桶	瓦積φ51~55 D60 桶 φ51 D70	130
木	円形	曲物	φ34	17
木	円形	曲物	φ37 D19 φ38 D23	42
木	円形	曲物	42×35 D34 36×34 D27 29×25 D18	79
木	円形	曲物	41×39 D27	27
木	円形	縦板+桶側	φ56 D105	105
木	楕円形	縦板+桶側	φ36 D37	37
木	円形	曲物	φ48 D54	54
瓦・石	円形	瓦積+石積	φ60 D119	119
瓦・石・木	円形	瓦積+石積 +曲物	曲物φ78 D14 φ64 D14	228
		素掘り		134
		素掘り		125
木	方形 円形	木組+曲物	木組 77 D15 曲物φ42 D12	34

φは直径，Dは深さ，～×～は一辺又は長径×短径
単位cm

表2 溝一覧表

遺構 番号	幅	深 さ	検出長	断面形態	方 向
1	270	150	3170	逆台形	東西
1	396	121	2040	深い皿状	東西
2	210	73	211	逆台形	南北
3	180	65	334	V字形	南北
4		76~82	565	逆台形	東西
5		26	202	逆台形	南南西~北北東
6	108	30	720	逆台形	東西
7	79~108	39~58	596	逆台形	南南東~北北西
8	28	12	250	逆台形	南南西~北北東
9	310~207	140	604	逆台形	南南東~北北西
10	15~18	8	92	逆台形	東西
11	25~76	6	308	逆台形	南西~北東
12	15~18	5	143	逆台形	西南西~東北東
13	24~26	26	262	逆台形	東西
14	480	100	617	皿状	南北
14	480	100	280	皿状	南北
15	60	7~14	620	逆台形	南北
15	64	22	280	椀状	南北
16		30~60	2892	逆台形	東西
17	60	6~19	308	逆台形	南北
18	238	58	648	逆台形	南北
18	240	60	3100	U字形	東西
19	215	82	2398	逆台形	東西
20	135	62	41	V字形	南北
21	78	4	360	逆台形	南南東~北北西
22	64~220	45~85	670	逆台形	南北
23	1034	140	652	U字形	南北

単位cm

遺構 番号	幅	深 さ	検出長	断面形態	方 向
23	1034	150	300	椀状	南北
24	165~280	29~55	1500	逆台形	東西~南北
25	50	12	240	逆台形	北北西~南南東
26	100~130	24~28	256	逆台形	北西~南東
27	214	77	700	U字形	北西~南東
28	60	25	188	逆台形	南南西~北北東
29	94	41	376	逆台形	南北
30	153	57	226	逆台形	南南西~北北東
31	116	85	441	逆台形	南南西~北北東
32	148	19~25	1310	逆台形	東西
33	160	10~14	297	逆台形	南北
34	188	10	436	逆台形	南北
35	30	16	860	台形	東西
36	268	54	450	逆台形	南北
37	152	15	140	浅い逆台形	南北方向であるが やや西にふる
38	32	16	140	浅い椀状	南北
39	36	11	252	椀状	東西
40	32	35	200	深い皿状	東西
41	280	116	2804	U字形	東西
42	340	133	284	椀状	南北
43	200	12	404	浅い皿状	北西~東南
44	120	27	260	皿状	北北東~南南西
45	108	37	112	皿状	北北西~南南東

単位cm

表3 土壇一覧表

遺構 番号	平面形態	断面形態	最大幅	最小幅	深 さ
1	長方形	逆台形	132	90	14
2	楕円形	逆台形	120	58	17
3	楕円形	浅い皿状	184	68	18
4	不定形	逆台形	420	152	30
5	長方形	逆台形	127	32	12
6	長方形	逆台形	135	69	37~42
7	楕円形	擂鉢形	100	75	18
8	楕円形	逆台形	82	60	22
9	円形	ジョウゴ形	200		76
10	円形	擂鉢形	268		53
11	円形	皿形	120	108	37
12	方形	擂鉢形	180		56
13	長方形	逆台形	60	50	15
14	楕円形	椀状	120	84	40
15	隅丸方形	逆台形	464	84	57
16	長形	逆台形	228	144	61
17	楕円形	逆台形	88	40	30
18	楕円形	逆台形	72	56	58
19	方形	逆台形	1120	200	100
20	隅丸方形	皿状	300	96	25
21	円形	浅い皿状	208	188	18

単位cm

7. 遺構内出土遺物

各遺構からの出土遺物は、量・種類とも甚大かつ多種多様である。この中で、今回の報告は遺構を中心とした報告であり、遺構の年代決定に必要な遺物のみ抽出して記載した。なお表中のI群は、褐色系、II群は、白色系の土師器を示す。

表4 遺物観察表

土器番号	器種	出土遺構	法量cm	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	土師器 小皿	井戸33	口径7.8 器高1.4	○平底の底部から外反気味に立ち上がる。 ○口縁端部は尖る。 ○内底面と口縁部の境界は、ヨコナデにより凹む。	○外面は口縁部のみヨコナデし体部下 半・底部は未調整。 ○内面は右まわりの 2回のヨコナデ。 ○内底面と口縁部の 境界のヨコナデは、 その末端が上方へ ナデ上げられる。 ○内底面は一定方向 のナデ。 ○全体にやや雑な作 り。	○I群 ○胎土中に1 mm以下の長 石・雲母を 含む。
2	土師器 小皿	井戸12	口径8.1 器高0.9	○平底の底部から内 彎気味に立ち上 がる。 ○口縁端部はやや尖 り気味。	○口縁部内外面はヨ コナデ。 ○底部は未調整。 ○内底面はナデ。	○I群 ○胎土中に1 mm以下の雲 母・チャ ート・長石を 含む。 ○口縁部外面 の一部に煤 付着。
3	土師器 小皿	井戸12	口径8.4 器高1.1	○平底の底部からや や外反気味に立 ち上がる。 ○口縁端部は尖る。	○口縁部内外面はヨ コナデ。 ○底部外面は未調整。 ○内底面はナデ。	○II群 ○胎土中に1mm 以下の石英・ 長石を含む。
4	土師器 小皿	井戸2	口径7.8 器高1.1	○やや凹底の底部か ら内彎して立ち 上がる。 ○口縁部は若干上 方へ立ち上がる。	○外面は口縁部のみ ヨコナデ。体部・ 底部は未調整。 ○内面はヨコナデ。 ○内底面はナデ。	○I群 ○胎土中に1 mm以下の雲 母を含む。
5	土師器 小皿	井戸30	口径8.4 器高1.4	○やや凹底の底部か ら内彎気味に立 ち上がる。 ○口縁端部は上方へ つまみ上げる。	○外面は口縁部のみ ヨコナデ。体部下 半・底部は未調整。 ○内面はヨコナデ。 ○内底面はナデ。	○II群 ○胎土中に2 mm以下の長 石を含む。
6	土師器 小皿	井戸5掘形	口径9.1 器高1.65	○平底の底部から若 干外反気味に立 ち上がる。 ○口縁端部はやや尖 り気味におさめる。	○口縁部内外面は右 まわりのヨコナ デで、その末端は上 方へナデ上げら れる。 ○底部外面は未調整。 ○底部内面は一定方 向のナデ。	○I群 ○胎土中に1 mm以下のく さり礫・雲 母を含む。

土器番号	器種	出土遺構	法量cm	形態の特徴	手法の特徴	備考	
7	土師器	中皿	井戸5 掘形	口径10.4 器高 1.6	○平底の底部から内 彎して立ち上がる。 ○口縁端部は丸い。	○口縁部内外面はヨ コナデ。 ○底部外面は未調整。 ○内底面はナデ。	○II群 ○胎土中に雲 母・長石粒 を含む。
8	土師器	小皿	井戸7 掘形	口径 9.7 器高 1.6	○平底の底部からや や外反気味に立ち 上がる。 ○口縁端部は丸い。	○口縁部内外面はヨ コナデ。 ○底部外面は未調整。 ○内底面はナデ。	○I群 ○胎土中に1mm 以下の長石・ 石英を含む。
9	土師器	小皿	井戸37	口径 7.3 器高 1.7	○やや凹底の底部か ら若干内彎気味に 立ち上がる。 ○口縁端部は丸い。	○外面は口縁部のみ ヨコナデ。体部下 半・底部は未調整。 ○内面は2回のヨコ ナデ。 ○内底面はナデ。 ○全体に粗雑な作り である。	○I群 ○胎土中に1 mm以下の長 石・雲母・ くさり礫を 含む。 ○内面全体に 煤付着。
10	土師器	小皿	井戸34 井側内	口径 7.6 器高 1.5	○小さな平底の底部 から内彎気味に立 ち上がる。 ○口縁端部は若干、 肥厚気味である。 ○内底面と口縁部の 境界は、ヨコナデ により凹む。	○外面は口縁部のみ ヨコナデし、体部 下半・底部は未調 整。 ○内面は2回のヨコ ナデ。 ○内底面と口縁部の 境界のヨコナデは、 その末端が上方へ ナデ上げられる。	○II群 ○胎土中に1 mm以下の雲 母を含むが 全体に砂粒 の混入は少 ない。
11	土師器	小皿	井戸39	口径 8.8 器高 2.0	○小さな平底の底部 から内彎して立ち 上がる。 ○口縁端部は比較的 丸い。 ○口縁部のひずみが 著しい。	○外面は口縁部のみ ヨコナデ。体部下 半・底部は未調整。 ○内面はナデ。	○I群 ○胎土中に1 mm以下のく さり礫・雲 母を含む。
12	土師器	小皿	土塚10	口径 9.0 器高 1.7	○底部から内彎気味 に立ち上がる。 ○口縁端部は尖り気 味である。	○外面は口縁部のみ ヨコナデ。体部下 半・底部は未調整。 ○内面はヨコナデ。	○I群 ○胎土中に1 mm以下のく さり礫・雲 母を含む。
13	土師器	小皿	井戸35	口径 7.7 器高 1.8	○やや凹底の底部か ら外反気味に立ち 上がる。 ○口縁端部は尖り気 味である。 ○内底面と口縁部の 境界は、ヨコナデ によって若干凹む。	○外面は口縁部のみ ヨコナデ。体部下 半・底部はユビオ サエ。 ○内面は2回のヨコ ナデ。 ○内底面は一定方向 のナデ。	○II群 ○胎土中に1 mm以下のチ ャート・雲 母を含む。 ○内面全体に 煤付着。
14	土師器	小皿	溝4	口径 7.8 器高 2.0	○底部から外反気味 に立ち上がる。 ○口縁端部は尖り気 味である。	○口縁部内外面はヨ コナデ。 ○体部下半は未調整。 ○内面は右まわりの ヨコナデで、その 末端は上方へナデ 上げられる。	○I群 ○胎土中に1 mm以下の雲 母・長石・ くさり礫を 含む。

土器番号	器種		出土遺構	法量cm	形態の特徴	手法の特徴	備考
15	土師器	小皿	井戸38	口径 9.2 器高 2.0	○やや凹底の底部から内彎気味に立ち上がる。 ○口縁端部は比較的厚手である。	○外面は口縁部のみヨコナデ。体部下半はユビオサエ。 ○内面は右まわりのヨコナデで、その末端は上方へナデ上げられる。	○II群 ○胎土に砂粒をほとんど含まず密。 ○口縁部内面の一部に煤附着。
16	土師器	中皿	井戸9	口径11.8 器高 1.8	○平底の底部から内彎して立ち上がる。 ○口縁端部は尖り気味である。	○口縁部内外面はヨコナデ。 ○底部外面は未調整。 ○内底面はナデ。	○I群 ○胎土中に1mm程度の長石を含む。
17	土師器	中皿	井戸33	口径11.3 器高 1.7	○平底の底部から内彎気味に立ち上がる。 ○口縁端部は上方へつまみ上がる。 ○内底面と口縁部の境界は、ヨコナデにより凹む。	○外面は口縁部のみヨコナデし、体部下半・底部は未調整。 ○内面は2回のヨコナデ。 ○内底面は一定方向のナデ。	○I群 ○胎土中に1mm以下の石英・くさり礫を含み密。
18	土師器	中皿	井戸20	口径12.6 器高 2.5	○平底の底部からやや外反気味にのびる。 ○口縁端部はやや尖り気味で肥厚する。	○口縁部外面はヨコナデ。体部外面・底部は未調整。 ○口縁部内面は右まわりの2回のヨコナデ。 ○内底面はナデ。	○I群 ○胎土中に1mm以下のくさり礫・長石を含み緻密である。
19	土師器	中皿	井戸20	口径14.6 器高 2.8	○平底の底部からやや内彎気味に立ち上がる。 ○口縁端部は若干尖り気味で肥厚する。 ○口縁部内面と内底面との境界は、若干凹み気味である。	○口縁部外面はヨコナデ。体部外面・底部は未調整。 ○口縁部内面は2回のヨコナデ。	○II群 ○胎土中に1mm以下のくさり礫・長石を含む。
20	土師器	中皿	井戸34 井側内	口径14.4 器高 2.1	○体部は内彎気味に立ち上がる。 ○口縁端部は肥厚気味である。	○外面は口縁部のみヨコナデし、体部はユビオサエ。 ○内面はヨコナデ。	○II群 ○胎土中に砂粒をほとんど含まない。
21	土師器	大皿	井戸35	口径17.1 器高 1.6	○平底の底部から外反気味に立ち上がる。 ○口縁端部は尖る。	○外面は口縁部のみヨコナデ。体部下半・底部はユビオサエ。 ○内面は2回のヨコナデ。 ○内底面はナデ。	○I群 ○胎土中に1mm程度のくさり礫・雲母を含む。
22	土師器	大皿	井戸25	口径15.6 器高 2.4	○平底の底部からやや外反気味に立ち上がる。 ○口縁端部は丸く仕上げられる。 ○口縁部内面と内底面との境界は、ヨコナデにより凹む。	○口縁部は2回のヨコナデ。 ○底部外面は未調整。 ○内底面はナデで仕上げる。	○I群 ○胎土中に1mm以下のくさり礫・雲母を含む。

土器 番号	器種	出土遺構	法量cm	形態の特徴	手法の特徴	備考	
23	土師器	大皿	井戸7 掘形	口径17.2 器高 3.0	○平底の底部から内 彎気味に立ち上 がる。 ○口縁端部は丸くお さめる。	○口縁部内外面は2 回のヨコナデ。 ○底部外面は未調整。 ○内底面はナデ。	○I群 ○胎土中に長 石・雲母を 含む。
24	瓦器	羽釜	土坑9	口径16.4	○口縁部は内傾して 立ち上がり、端部 は内側へ肥厚する。 ○鏝は短く水平にの びる。	○口縁部内外面はヨ コナデ。 ○体部は内外面とも ナデ。 ○鏝の接合痕が明瞭 に残る。	○胎土中に1 mm程度の石 英・チャー ト粒を含む。
25	瓦器	羽釜	井戸18	口径20.7	○口縁部は内傾して 立ち上がり、明瞭 な段を3段構成し ている。 ○鏝はやや上向きに つく。	○口縁部外面から鏝 にかけてはヨコナ デ。 ○体部は鏝貼り付け 後、右まわりの横 方向のケズリ。	○胎土中に2 mm程度の長 石・チャー トをやや多 く含む。
26	瓦器	羽釜	井戸28	口径26.0	○口縁部はほぼ直立 し、やや不明瞭な 段が2段ある。下 段直下には水平方 向にのびる鏝があ る。 ○口縁端部は四角く おさめる。	○外面は口縁から鏝 にかけてヨコナデ。 ○体部外面には鏝貼 り付け後、左まわ りのケズリ。 ○内面は右上りのハ ケメ調整後ヨコナ デ。	○胎土中に2 mm程度のチ ャート・長 石を含む。 ○鏝下半から 体部にかけて 煤付着。
27	土師器	羽釜	井戸16	口径25.6	○口縁部は内傾し、 口縁端部は外方に 肥厚する。 ○鏝は水平方向に長 くのび、先端部で 下方に肥厚する。	○口縁部内外面から 鏝にかけてはヨコ ナデ。 ○体部外面は横ハケ メ後、板状原体に よるナデ消し。 ○鏝の接合痕が明瞭 に残る。	○胎土中に1 mm程度の長 石・くさり 礫・チャー トを含む。 ○鏝下半から 体部にかけて 煤付着。
28	瓦器	椀	井戸24 掘形	底径 4.0	○粗雑な低い高台を 有する底部片であ る。	○高台は粘土紐を右 まわりに巻いて貼 り付ける。 ○体部はユビオサエ によって仕上げる。 ○底部内面には1.5 mmの暗文を6本以 上平行に施す。	○胎土中に微 量の石英・ 長石を含む。
29	瓦器	椀	井戸6 掘形	口径11.2 器高 2.2	○やや丸底気味の底 部から内彎して立 ち上がる。 ○口縁端部は丸くお さめる。	○口縁部内外面はヨ コナデ。 ○底部外面は未調整。 ○内面には雑な横方 向の暗文が認めら れる。	
30	瓦器	椀	井戸22 掘形上層	口径11.7 器高 2.5	○体部は大きく開き、 口縁端部は若干角 張り気味におさめ る。 ○器壁は薄手の作り である。	○口縁部の外面はヨ コナデ。 ○体部はユビオサエ で仕上げる。 ○体部内面はナデ調 整。	○胎土中に1 mm以下の長 石を含み密。

土器番号	器種		出土遺構	法量cm	形態の特徴	手法の特徴	備考
31	瓦器	椀	井戸13	口径11.6 器高 2.8	○平底風の底部から内彎気味に立ち上がり、口縁部で外反する。 ○口縁端部は丸い。	○口縁部内外面はヨコナデ。 ○体部から底部外面は未調整。 ○体部内面はナデ。 ○体部内面には巾の広い雑なうず巻き状の暗文を施す。	○胎土中に1mm程度の長石を含む。
32	瓦器	椀	井戸32	口径13.2	○内彎する体部から口縁部は外反しておわる。 ○口縁端部は丸くおさめる。	○口縁部内外面はヨコナデ。 ○体部外面はユビオサエ。 ○体部内面はナデ後、雑な暗文を施す。	○胎土中に1mm以下の長石を含み精良。
33	瓦器	椀	井戸 9	口径13.8 器高 3.9	○無造作に小さく貼り付けられた高台から内彎気味に立ち上がる。 ○口縁端部は丸い。	○口縁部内外面はヨコナデ。 ○体部外面はユビオサエが残る。 ○体部内面はヨコナデを施し、その後内底面を一定方向にナデる。 ○内面の暗文は巾広の雑なうずまき文である。	○胎土中に長石・石英を含み緻密。
34	瓦器	椀	井戸 5 掘形	口径16.0	○内彎気味の体部に小さく外反する口縁部がつく。 ○口縁端部はゆるやかに内傾する面をもつ。	○口縁部内外面はヨコナデ後、巾の狭い密な横方向の暗文を施す。 ○体部外面は5分割程度にわけ、横方向に巾の狭い密な暗文を一定方向から施す。 ○体部内面は巾の狭い密な暗文を無造作に施す。	○胎土中に微石をほとんど混入せず緻密。
35	瓦器	椀	井戸31	口径16.3	○底部から内彎して体部につづき口縁部は外反しておわる。 ○口縁端部は丸くおさめる。	○口縁部は強いヨコナデ調整。 ○体部外面は明瞭なユビオサエで暗文は認められない。 ○体部内面は丁寧なナデ後、巾約1.5mmの粗雑な暗文を施す。	

土器 番号	器種		出土遺構	法量cm	形態の特徴	手法の特徴	備考
36	瓦器	椀	井戸3	口径15.0 器高 5.5	○断面が方形の高台から内彎して立ち上がり、口縁部で短かく外反する。 ○口縁端部は丸く仕上げる。	○口縁部内外面はヨコナデ。 ○体部外面はユビオサエ。 ○体部内面はナデ。 ○内底面は一定方向のナデ。 ○体部外面上半はやや巾広の横方向の暗文。 ○内面の暗文に関しては、内底面に平行する9条の巾広の暗文を施した後、体部に弧状の巾広の暗文を右まわりに密に施す。 ○口縁内面には巾の狭い暗文を横方向に密に施す。	○底部周辺は灰白色を呈する。 ○胎土中に砂粒をほとんど含まず精良。
37	瓦器	椀	井戸4	口径15.0 器高 6.4	○低い高台から内彎して立ち上がり、口縁部で直立気味に立つ。 ○口縁端部は丸くおさめる。 ○高台は断面三角形を呈する。	○口縁部内外面はヨコナデ。 ○体部外面はユビオサエで仕上げる。 ○体部外面上半にはヨコナデ後、横方向のやや密な暗文を加える。 ○内底面は一定方向のナデ。 ○内面の暗文は内底面の斜格子状の暗文を施し、また口縁端部内面には巾の狭い横方向の密な暗文を施す。その後、体部内面に弧状のやや巾広の暗文を密に施す。 ○器壁はやや厚手である。	○胎土中に砂粒をほとんど含まずきわめて精良。
38	瓦器	羽釜	井戸8 掘形		○口縁部は直立気味に立ち上がり、明瞭な段を4段持つ。 ○口縁端部は角張って仕上げる。 ○鏝はほぼ水平方向に長くのびる。	○口縁部内外面から鏝にかけてはヨコナデ。 ○体部は鏝貼り付け後、右まわりで横方向のかるいヘラケズリ。	○胎土中に1mm以下の長石・チャートを含む。
39	瓦器	甕	井戸11	口径 23	○短い口縁部から外側に折り込み、丸く終わる端部に続く。 ○体部は「ハ」の字に大きく開く。	○体部は水平方向のタキメで成形する。 ○タキメは2.2条/1cmでやや太筋。 ○口縁部内外面はヨコナデ。 ○体部内面は横方向のやや細かいハケメ調整後、一部ナデ消し。	○胎土中に1mm以下の長石・石英を含む。

土器番号	器種		出土遺構	法量cm	形態の特徴	手法の特徴	備考
40	瓦器	甕	井戸11	口径30.1	○「ハ」の字に大きく開く体部に、外側に折り込み丸く終わる口縁端部がつく。	○口縁部内外面はヨコナデ。 ○体部はやや右上がりのタタキメで成形する。 ○体部内面は横方向のハケメ調整後、ナデ消し。	○胎土中に3～1mm程度の長石・石英・雲母を含む。
41	土師器	小皿	溝18	口径 5.6 器高 0.8	○平底の底部から内彎して立ち上がる。 ○口縁端部は丸い。 ○内底面と口縁部の境界は、ヨコナデのため凹む。	○外面は口縁部のみヨコナデ。体部下半・底部は未調整。 ○内面は右まわりのヨコナデで、その末端は上方ヘナデ上げられる。 ○内底面はナデ。	○I群 ○胎土中に1mm程度の長石・雲母を含む。
42	土師器	小皿	溝35	口径 6.3 器高 1.0	○やや凹底の底部からやや外反して立ち上がる。 ○口縁端部は丸い。	○口縁部内外面はヨコナデ。 ○底部は未調整。 ○内底面はナデか。	○I群 ○胎土中に1mm以下の石英・くさり礫を含む。
43	土師器	小皿	溝30	口径 7.6 器高 1.1	○平底の底部から内彎して立ち上がる。 ○口縁端部は若干つまみ上げ気味。	○外面は口縁部のみヨコナデ。体部下半・底部は未調整。 ○内面はヨコナデ。 ○内底面はナデ。	○I群 ○胎土中に1mm以下のくさり礫・雲母を含む。
44	土師器	小皿	溝16	口径 7.5 器高 1.6	○平底の底面から外反気味に立ち上がる。 ○口縁端部は若干尖り気味。	○口縁部外面はヨコナデ。 ○底部は未調整。 ○内面は2回の右まわりのヨコナデで、その末端は上方ヘナデ上げられる。 ○内底面は一定方向のナデ。	○I群 ○胎土中に1mm程度のくさり礫・雲母を含む。 ○口縁部内面の一部に煤付着。
45	土師器	小皿	溝35	口径 8.2 器高 1.2	○平底の底部から内彎して立ち上がる。 ○口縁端部は若干尖り気味。	○口縁部内外面はヨコナデ。 ○底部は未調整。 ○内底面はナデ。	○I群 ○胎土中に1mm以下のくさり礫・雲母を含む。
46	土師器	小皿	溝29	口径 8.2 器高 1.4	○平底の底部からやや外反気味に立ち上がる。 ○口縁端部は丸い。 ○口縁部と内底面の境界は、ヨコナデにより若干凹む。	○口縁部内外面はヨコナデ。 ○内面はヨコナデ。 ○内底面はナデ。	○I群 ○胎土中に1mm程度のくさり礫・雲母を含む。
47	土師器	小皿	落ち込み3	口径 7.2 器高1.95	○平底の底部からやや外反気味に立ち上がる。 ○口縁端部は丸い。	○口縁部内外面はヨコナデ。 ○底部はナデ。 ○内底面はナデ。 ○全体的に厚手の作り。	○II群 ○胎土中に1mm以下の雲母を多く含む。

土器番号	器種	出土遺構	法量cm	形態の特徴	手法の特徴	備考	
48	磁器	皿	溝23	口径10.6 器高 2.5	○底部には断面三角形の高台がつく。 ○高台から内彎気味にゆるく立ち上がる。 ○口縁端部は丸い。	○釉は透明感のある緑灰色を呈し、厚味は約1mmである。 ○貫入が多く認められる。	○唐津焼
49	磁器	椀	溝23	口径10.6	○体部は内彎気味に立ち上がり、体部中央で直立気味に立つ。 ○口縁端部は丸い。	○釉は、淡灰を呈し、厚味は約0.5mmである。 ○細かい貫入が多く認められる。	○唐津焼
50	磁器	椀	井戸23 掘形	口径11.0 器高 6.2 高台径4.5	○高台は高く断面逼台形を呈する。 ○高台から若干内彎して立ち上がりそのまま口縁部にする。 ○口縁部は丸い。	○釉は器表全体にかけてあり、不透明な灰白色を呈する。 ○文様は木・草をもチーフにして抽いている。	○伊万里焼
51	土師器	小皿	落ち込み3	口径 7.4 器高1.35	○平底の底部からやや外反気味に立ち上がる。 ○口縁端部は尖る。	○口縁部内外面はヨコナデ。 ○底部は未調整。 ○内底面はナデ。 ○全体に厚手の作り。	○I群 ○胎土中に1mm以下のくさり礫・石英を含む。
52	土師器	小皿	溝42	口径 8.3 器高 1.7	○平底の底部から内彎気味に立ち上がる。 ○口縁端部は丸い。	○外面は口縁部のみヨコナデ。体部下半及び底部はユビオサエ後ナデ。 ○内面は右まわりに2回にヨコナデし、その末端は上方へナデ上げられる。 ○全体に器形のひずみ大きい。	○I群 ○胎土中に1mm以下の雲母・石英・くさり礫を含む。
53	土師器	小皿	溝14	口径 8.8 器高 1.7	○平底の底部から内彎して立ち上がる。 ○口縁端部は丸い。	○外面は口縁部のみヨコナデ。体部下半は未調整。 ○内面はナデ。	○I群 ○胎土中に1mm以下のくさり礫・雲母を含む。 ○内面全体に煤付着。
54	土師器	小皿	溝29	口径 8.8 器高 1.5	○平底の底部から外反して立ち上がる。 ○口縁端部は尖り気味。	○口縁部内外面はヨコナデ。 ○体部下半・底部は未調整。 ○内底面はナデ。	○I群 ○胎土中に1mm程度のくさり礫・雲母を含む。
55	土師器	小皿	溝35 連結	口径 8.8 器高 1.6	○平底の底部から内彎して立ち上がる。 ○口縁端部は丸い。	○外面は口縁部のみヨコナデ。体部下半、底部は未調整。 ○内面はヨコナデ。	○I群 ○胎土中に1mm以下のくさり礫・雲母を含む。

土器番号	器種	出土遺構	法量cm	形態の特徴	手法の特徴	備考	
56	土師器	小皿	溝1	口径 8.2 器高 1.7	○底部から外反して立ち上がる。 ○底面はユビオサエによって強く凹む。	○外面はユビオサエ後、口縁部のみヨコナデ。 ○内面は右まわりのヨコナデで、その末端は上方ヘナデ上げられる。 ○内底面は一定方向のナデ。	○I群 ○胎土中に1mm前後の雲母・くさり礫を含む。
57	土師器	小皿	溝2	口径 8.3 器高 1.8	○凹底の底部からやや外反気味に立ち上がる。 ○口縁端部は丸い。 ○内底面と口縁部の境界は、ヨコナデにより強く凹む。	○外面は口縁部のみヨコナデ。体部下半・底部は未調整。 ○内底面と口縁部の境のヨコナデは右まわりで、その末端は上方ヘナデ上げられる。	○I群 ○胎土中に1mm以下のくさり礫・雲母を含む。
58	土師器	小皿	溝2	口径 8.0 器高 1.7	○凹底の底部から外反気味に立ち上がる。 ○口縁端部は尖り気味で、口縁端部直下は肥厚する。 ○内底面と口縁部の境界は、ヨコナデにより強く凹む。	○外面は口縁部のみヨコナデ。体部下半・底部は未調整。 ○内面は右まわりの2回のヨコナデ。 ○内底面と口縁部の境のヨコナデは右まわりで、その末端は上方ヘナデ上げられる。 ○底面はナデ。 ○比較的厚手の作り。	○I群 ○胎土中に1mm以下のくさり礫・長石・雲母を含む。
59	土師器	小皿	溝1	口径 8.9 器高 1.6	○平底の底部から外反気味に立ち上がる。 ○口縁部は尖り気味である。	○口縁部内外面はヨコナデ。 ○体部下半はユビオサエ。 ○内面はヨコナデ。	○II群 ○胎土中に1mm以下の長石を含む。
60	土師器	小皿	溝1	口径 9.0 器高 1.6	○ほぼ平底の底部から外反気味に立ち上がる。 ○口縁端部は尖る。 ○内底面と口縁部の境界は、ヨコナデにより凹む。	○外面は口縁部のみヨコナデし、体部下半・底面は未調整。 ○内面は右まわりのヨコナデ。 ○内底面と口縁部の境界に見られるヨコナデは、その末端が上方ヘナデ上げられる。 ○内底面は一定方向のナデ。	○II群 ○胎土は1mm以下のくさり礫・雲母を含み密。
61	瓦器	椀	溝30	口径11.7 器高 3.4	○丸底の底部から内彎して立ち上がる。 ○口縁部で段を有し、端部は丸い。	○口縁部内外面は強いヨコナデ。 ○体部から底部にかけてはユビオサエが残る。 ○内面はナデ後、時計回りの不連続の渦巻状の暗文。 ○暗文の中は1~2mm程度。	

土器番号	器種	出土遺構	法量cm	形態の特徴	手法の特徴	備考	
62	土師器	中皿	溝30	口径12.4 器高 2.2	○平底の底部から内彎して立ち上がる。 ○口縁端部は上方へつまみ上がり面を持つ。	○外面は口縁部のみヨコナデ。体部下半・底部は未調整。 ○内面はヨコナデ。 ○内底面はナデ。 ○器壁は比較的厚手。	○II群 ○胎土中に1mm程度の雲母・チャート・石英を含む。
63	土師器	中皿	溝15	口径12.0 器高 2.1	○底部からやや内彎気味に立ち上がる。 ○口縁端部は若干つまみ上げ気味で面を持つ。	○口縁部内外面はヨコナデ。 ○体部下半は未調整。 ○内面はヨコナデ。	○I群 ○胎土中に1mm以下の雲母・くさり礫を含む。
64	土師器	中皿	溝35	口径12.5	○体部から内彎して立ち上がる。 ○口縁端部は角ばり、中くぼみの面をもつ。	○外面は口縁部のみヨコナデ。体部は未調整。 ○内面はヨコナデ。 ○器壁は比較的厚手。	○I群 ○胎土中に1mm以下の雲母・くさり礫を含む。
65	土師器	中皿	溝35	口径13.8	○内彎する体部からやや外反気味に立ち上がる。 ○口縁端部は丸い。	○口縁部内 外面はヨコナデ。体部下半・底部は未調整。 ○内底面はナデ。	○I群 ○胎土中に1mm以下のくさり礫・雲母を含む。
66	土師器	中皿	溝18	口径11.0 器高 2.6	○平底の底部から若干外反気味に立ち上がる。 ○口縁端部は尖り気味。 ○内底面と口縁部の境界は、ヨコナデのため凹む。	○外面は口縁部のみヨコナデ。体部下半・底部は未調整。 ○内面は右まわりの2回のヨコナデ。 ○内底面と口縁部の境界にみられるヨコナデの末端は、上方へナデ上げられる。 ○内底面は一定方向のナデ。	○II群 ○胎土中に2mm以下のチャート・石英粒を含む。
67	土師器	中皿	溝 1	口径12.0 器高 1.9	○口縁部は外反し、若干肥厚気味である。 ○内底面と口縁部の境界は、ヨコナデのため凹む。	○外面はユビオサエ後、口縁部はヨコナデ、底部はナデ。 ○内面は2回のヨコナデ。	○II群 ○胎土中に1mm以下のくさり礫・チャートを含む。
68	土師器	中皿	溝15	口径12.3 器高 2.1	○平底の底部からやや外反気味に立ち上がる。 ○口縁端部は尖り気味。 ○内底面と口縁部の境界は、ヨコナデのため凹む。	○外面は口縁部のみヨコナデ。体部下半・底部はユビオサエ。 ○内面は右まわりの2回のヨコナデ。 ○内底面は一定方向のナデ。	○II群 ○胎土中に1mm以下の長石・雲母を含む。
69	土師器	中皿	溝 1	口径13.4 器高 2.7	○平底の底部からやや外反気味に立ち上がる。	○外面はユビオサエ後、口縁部のみヨコナデ。 ○内面はヨコナデ。	○II群 ○胎土中に雲母・チャートを含み密。

土器番号	器種	出土遺構	法量cm	形態の特徴	手法の特徴	備考	
70	土師器	中皿	溝 1	口径14.6 器高 2.1	○平底でやや内彎気味に立ち上がる。 ○端部は尖り気味である。 ○内底面と口縁部の境界は、ヨコナデにより凹む。	○外面はユビオサエ後、口縁部のみヨコナデ。 ○内面は2回のヨコナデ。 ○内底面は一定方向のナデ。	○I群 ○胎土中にくさり礫を微量含み密。
71	土師器	大皿	溝14	口径15.9 器高 2.2	○底部から内彎して立ち上がる。 ○口縁端部は尖り気味で、端部直下は若干肥厚する。	○外面は口縁部のみヨコナデ。 ○体部下半は未調整。 ○内面はヨコナデ。	○II群 ○胎土中に1mm以下の長石・チャートを含む。
72	土師器	大皿	溝41	口径15.9 器高 2.9	○平底の底部から若干内彎気味に立ち上がる。 ○口縁端部はやや尖り気味。	○外面は口縁部のみヨコナデ。体部下半及び底部はか弱いユビオサエ。 ○内面は右まわりの2回のヨコナデ。 ○内底面と口縁部の境界におけるヨコナデの末端は、上方へナデ上げられる。	○II群 ○胎土中に2mm以下の長石を含む。 ○内面の口縁端部の一部に煤付着。
73	土師器	大皿	溝 1	口径17.7 器高 2.6	○底部から直線的に立ち上がる。 ○口縁端部は丸くおさめる。	○外面はユビオサエ後、口縁部のみヨコナデ。 ○内面はヨコナデ。	○II群 ○胎土中に1mm以下の雲母・長石を含む。
74	土師器	中皿	溝15	口径13.8 器高 2.1	○底部から外反して立ち上がる。 ○口縁端部は若干角ばる。	○口縁部内外面はヨコナデ。 ○底部は未調整。 ○内面はヨコナデ。 ○全体に厚手の作り。	○II群 ○胎土中に1mm以下の雲母・くさり礫を含む。
75	土師器	中皿	溝29	口径13.2 器高 2.0	○平底の底部からやや外反気味に立ち上がる。 ○口縁端部は丸い。	○口縁部内外面はヨコナデ。 ○体部下半・底部はナデ。 ○内底面はナデ。	○I群 ○胎土中に1mm程度のくさり礫・長石を含む。
76	土師器	中皿	溝35	口径13.8 器高 2.3	○底部から内彎して立ち上がる。 ○口縁部は角ばる。	○外面は口縁部のみヨコナデ。体部下半・底部は未調整。 ○体部内面はヨコナデ。 ○内底面はナデ。	○I群 ○胎土中に1mm以下のくさり礫・雲母を含む。
77	土師器	大皿	溝36	口径15.0 器高1.95	○平底の底部から内彎して立ち上がる。 ○口縁端部は角ばる。	○外面は口縁部のみヨコナデ。体部下半・底部は未調整。 ○内面は2回のヨコナデ。 ○内底面は一定方向のナデ。	○I群 ○胎土中に1mm以下のくさり礫・長石を含む。

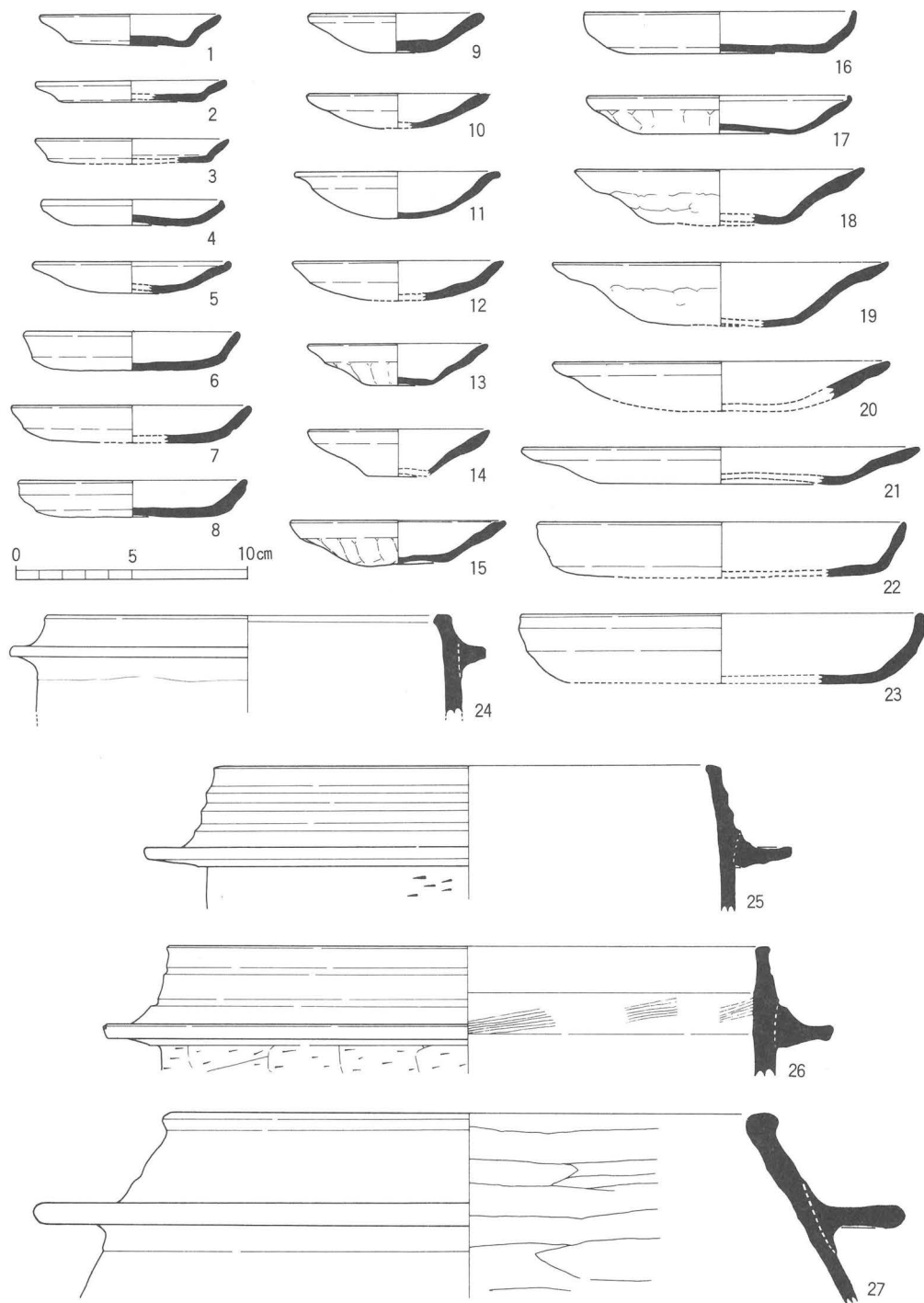
土器番号	器種	出土遺構	法量cm	形態の特徴	手法の特徴	備考	
78	土師器	大皿	溝36	口径15.0 器高 2.3	○やや凹底の底部から内彎して立ち上がる。 ○口縁端部は若干尖り気味。	○口縁部内外面のみヨコナデ。 ○体部下半・底部は未調整。 ○内面はナデ。	○II群 ○胎土中に1mm以下のくさり礫・雲母を含む。
79	瓦器	椀	溝20	口径16.0	○内彎気味の体部から口縁部でやや外反気味に立ち上がる。 ○口縁端部は丸い。	○口縁部内外面はヨコナデ後、横方向のやや密なヘラミガキ。 ○体部外面はユビオサエ後、横方向の暗文。 ○内面は横方向の密な暗文。	○胎土は砂粒をほとんど含まず緻密。
80	土師器	小皿	井戸 6	口径 6.9 器高 1.1	○平底の底部から内彎気味に立ち上がる。 ○口縁端部はやや尖り気味。	○口縁部内外面はヨコナデ。 ○底部は未調整。 ○内底面はナデ。	○I群 ○胎土中に1mm以下の長石・チャートを含む。
81	土師器	小皿	土塚12	口径 7.2 器高 1.3	○平底の底部から内彎して低く立ち上がる。 ○口縁端部は尖り気味である。	○口縁部内外面はヨコナデ。 ○体部下半・底部は未調整。 ○内底面はナデ。	○II群 ○胎土中に1mm以下の雲母・長石を含む。
82	土師器	小皿	土塚 4	口径 8.3 器高 1.1	○やや凹む底部に内彎気味の口縁部をもつ。 ○口縁端部は丸い。	○口縁部はヨコナデ。 ○体部下半・底部は未調整。 ○内面はヨコナデ。	○II群 ○胎土中に1mm以下の長石・雲母を含む。
83	土師器	小皿	土塚 3	口径 8.0 器高 1.6	○体部は平底の底部から立ち上がり、口縁端部で上方に立つ。	○外面は口縁部のみヨコナデ。 ○内面はヨコナデ。	○I群 ○胎土中に1mm以下の雲母・くさり礫・チャートを含む。
84	土師器	小皿	土塚12	口径 8.4 器高 1.4	○平底の底部から内彎して低く立ち上がる。 ○口縁端部は面を持って若干上方へ立ち上がる。	○口縁部内外面はヨコナデ。 ○体部下半・底部は未調整。 ○内面はヨコナデ。 ○内底面はナデ。	○I群 ○胎土内に1mm以下の長石を含む。
85	土師器	小皿	ピット	口径 8.9 器高 2.0	○平底の底部から内彎して立ち上がる。 ○口縁部は角ばり面をもつ。	○外面は口縁部のみヨコナデ。体部下半・底部は未調整。 ○内面はヨコナデ。 ○全体に器壁は厚く、ひずみが著しい。	○I群 ○胎土中に1mm以下の雲母・長石を含む。
86	土師器	小皿	井戸 9	口径 6.6 器高 1.6	○底部から内彎して立ち上がる。 ○口縁端部は丸い。	○口縁部内外面はヨコナデ。 ○体部下半・底部は未調整。	○II群 ○胎土中に1mm以下のくさり礫・石英を含む。

土器番号	器種	出土遺構	法量cm	形態の特徴	手法の特徴	備考	
87	土師器	小皿	土塚13	口径 7.3 器高 1.3	○平底の底部から外反気味に立ち上がる。 ○口縁端部は丸い。	○口縁部内外面はヨコナデ。体部下半・底部は未調整。 ○内底面はナデ。	○I群 ○胎土中に1mm以下の雲母・くさり礫を含む。
88	土師器	小皿	土塚16	口径 8.0 器高 1.5	○平底の底部から外反して立ち上がる。 ○口縁端部は丸い。 ○内底面と口縁部との境界は、ヨコナデにより凹む。	○外面は口縁部のみヨコナデ。体部下半・底部は未調整。 ○内面は右まわりの2回のヨコナデ。 ○内底面と口縁部との境界にみられるヨコナデの末端は、上方にナデ上げられる。 ○全体に厚手である。	○I群 ○胎土中に1mm以下のくさり礫・雲母・長石を含む。
89	土師器	小皿	井戸20	口径 8.4 器高 1.7	○底部から外反して立ち上がる。 ○口縁端部は尖り気味で口縁直下は肥厚する。	○口縁部のみ内外面ヨコナデ。 ○体部下半・底部は未調整。	○I群 ○胎土中に1mm以下の雲母を含む。
90	土師器	小皿	落ち込み 8	口径 8.4 器高 1.7	○底部から外反して立ち上がる。 ○口縁端部はやや尖り気味。 ○口縁端部直下は若干、肥厚する。	○外面は口縁部のみヨコナデ。 ○体部下半はユビオサエ。 ○内面はヨコナデ。	○I群 ○胎土中に1mm以下の雲母・くさり礫を含む。
91	土師器	小皿	落ち込み 4	口径 8.5 器高 1.7	○底部から外反して立ち上がる。 ○口縁端部は尖り気味で直下は若干、肥厚する。	○外面は口縁部のみヨコナデ。 ○体部下半は未調整。 ○内面はヨコナデ。	○II群 ○胎土中に1mm以下の雲母を含む。 ○口縁部の内外面の一部に煤付着。
92	土師器	小皿	土塚16	口径 9.9 器高 2.1	○凹底の底部から外反して立ち上がる。 ○口縁端部は丸い。 ○内底面と口縁部との境界は、ヨコナデにより若干凹む。	○外面は口縁部のみヨコナデ。体部下半・底部はユビオサエ。 ○内面は2回のヨコナデ。 ○器壁は全体にうすい。	○I群 ○胎土中に1mm以下のくさり礫・雲母を含む。
93	土師器	小皿	落ち込み 4	口径 7.7 器高 1.8	○平底の底部から内彎して立ち上がる。 ○口縁端部は丸い。 ○内底面と口縁部との境界は、ヨコナデにより凹む。	○外面は口縁部のみヨコナデ。体部下半・底部はナデ。 ○内面は右まわりのヨコナデで、その末端は上方にナデ上げる。	○I群 ○胎土中に1mm以下の長石・チャートを含む。

土器番号	器種	出土遺構	法量cm	形態の特徴	手法の特徴	備考	
94	土師器	小皿	土坑19	口径 9.2 器高 2.1	○平底の底部から内彎気味に立ち上がる。 ○口縁端部は若干尖り気味である。	○外面は口縁部のみヨコナデ。体部下 半・底部は未調整。 ○内面は右まわりの 2回のヨコナデで、 その末端は上方へ ナデ上げられる。 ○内底面は一定方向 のナデ。 ○やや厚手の作りで ある。	○II群 ○胎土中に1 mm以下の雲 母・長石を 含む。
95	土師器	小皿	土坑13	口径 9.6 器高 1.9	○底部から内彎して 立ち上がる。 ○口縁端部は丸い。	○口縁部内外面はヨ コナデ。 ○体部下半は未調整。 ○内面はヨコナデ。 ○全体に厚手の作り。	○II群 ○胎土中に1 mm以下の雲 母・くさり 礫を含む。
96	土師器	中皿	土坑19	口径10.0 器高 2.1	○凹底の底部から内 彎気味に立ち上 がる。 ○口縁端部は若干尖 り気味。	○外面は口縁部のみ ヨコナデ。体部下 半・底部は未調整。 ○内面は右まわりの ヨコナデ後一部ナ デ。	○II群 ○胎土中に1 mm程度のチャ ート粒を 微量混入。
97	土師器	小皿	土坑 8	口径 9.4 器高 1.3	○やや凹底の底部か ら内彎して立ち上 がる。 ○口縁端部は丸い。	○口縁部内外面はヨ コナデ。体部下半・ 底部は未調整。 ○内底面は一定方向 のナデ。	○I群 ○胎土中に1 mm程度のく さり礫・長 石・雲母を 含む。
98	土師器	小皿	土坑 8	口径 9.5 器高 1.4	○やや凹底の底部か ら内彎して立ち上 がる。 ○口縁端部は角ばる。	○口縁部内外面はヨ コナデ。 ○体部下半・底部は 未調整。 ○内底面は一定方向 のナデ。	○I群 ○胎土中に1 mm以下のく さり礫・長 石・雲母を 含む。
99	土師器	中皿	落ち込み 4	口径10.2 器高 2.2	○凹底の底部から内 彎気味に立ち上 がる。 ○口縁端部は尖り気 味である。 ○内底面と口縁部と の境界は、ヨコナ デにより強く凹む。	○外面は口縁部のみ ヨコナデ。体部下 半・底部はユビオ サエ。 ○内面は2回のヨコ ナデ。 ○内底面はナデ。	○II群 ○胎土中に1 mm以下の長 石・雲母を 含む。 ○口縁部内外 面から内底 面に煤附着。
100	土師器	中皿	土坑15	口径10.8 器高 2.2	○底部から若干外反 気味に立ち上がる。 ○口縁端部は尖り気 味。	○外面は口縁部のみ ヨコナデ。体部下 半は未調整。 ○内面はヨコナデ。 ○全体にうすい作 りである。	○I群 ○胎土中に1 mm以下の雲 母・長石を 含む。

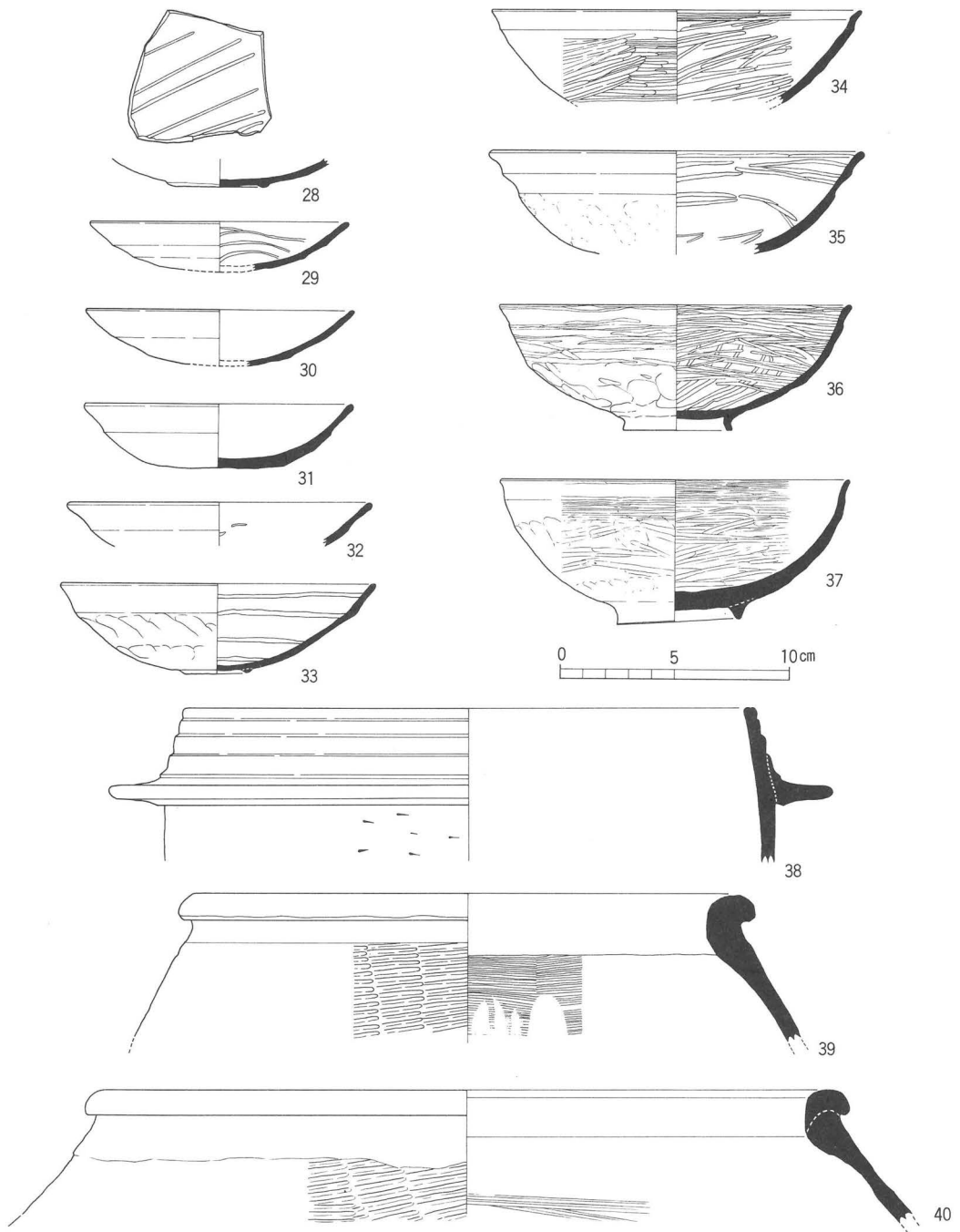
土器番号	器種	出土遺構	法量cm	形態の特徴	手法の特徴	備考
101	土師器	中皿	落ち込み4 口径12.6 器高 2.2	○平底の底部からやや外反して立ち上がる。 ○口縁端部は尖り気味で若干つまみ上げ気味。 ○内底面と口縁部の境界は、ヨコナデにより凹む。	○外面は口縁部のみヨコナデ。体部下半・底部は未調整。 ○内面は2回のヨコナデ。 ○内底面は一定方向のナデ。	○II群 ○胎土中に1mm以下の長石・チャートを含む。
102	土師器	中皿	土坑19 口径12.8 器高 2.0	○底部から内彎気味に立ち上がる。 ○口縁端部は尖り気味。	○外面は口縁部のみヨコナデ。体部下半は未調整。 ○内面は右まわりのヨコナデ。	○II群 ○胎土中に1mm以下のチャート・長石を含む。
103	土師器	中皿	土坑15 口径12.4 器高 2.1	○底部から若干内彎気味に立ち上がる。 ○口縁端部は尖り気味で、ややつまみ上がる。	○外面は口縁部のみヨコナデ。体部下半は未調整。 ○内面は2回のヨコナデ。	○II群 ○胎土中に1mm以下の雲母を含む。
104	土師器	中皿	土坑19 口径12.5 器高 2.3	○平底の底部から若干外反気味に立ち上がる。 ○口縁端部は尖り気味。 ○内底面と口縁部との境界は、ヨコナデにより凹む。	○外面は口縁部のみヨコナデ。体部下半・底部は未調整。 ○内面は右まわりの2回のヨコナデ後、一部ナデ。 ○内底面は一定方向のナデ。	○II群 ○胎土中に1mm程度の石英・長石を含む。 ○体部外面から口縁部にかけて煤付着。
105	土師器	中皿	落ち込み4 口径12.4 器高 2.5	○平底の底部から若干内彎気味に立ち上がる。 ○口縁端部は尖り気味でやや上方へつまみ上げる。 ○内底面と口縁部の境界は、ヨコナデにより凹む。	○外面は口縁部のみヨコナデし、体部下半・底部はナデ。 ○内面は2回のヨコナデ。 ○内底面はナデ。	○II群 ○胎土中に1mm以下の雲母・長石・チャートを含む。
106	瓦器	椀	土坑21 口径10.9 器高 2.4	○底部から内彎気味に立ち上がる。 ○口縁端部は丸くおさめる。	○内外面ともヨコナデ後、横方向の暗文を加える。 ○暗文の巾は1.5mm前後。	○焼成良好。 ○胎土中に1mm以下の長石をやや多く含む。
107	瓦器	椀	土坑12 口径10.7 器高 2.5	○平底の底部からやや内彎気味に上方へ立ち上がる。 ○口縁端部は丸い。	○口縁部内外面ともヨコナデ。 ○体部下半から底部はユビオサエ。 ○内面はナデ後、雑な暗文が一部分認められる。	○胎土中に1mm以下の長石を含む。 ○内面には煤付着。
108	瓦器	椀	土坑13 口径12.3 器高 2.4	○丸底の底部から内彎して立ち上がる。 ○口縁端部は丸い。	○口縁部内外面はヨコナデ。 ○体部はユビオサエ。 ○内面はナデ後、雑な暗文を施す。 ○暗文の巾1.5mm~2mm前後。	

土器番号	器種		出土遺構	法量cm	形態の特徴	手法の特徴	備考
109	瓦器	椀	井戸6	口径13.6	○体部からやや内彎気味に立ち上がり、口縁部で若干外反する。 ○口縁端部は丸い。	○口縁部内外面はヨコナデ。 ○内面はヨコナデ後、雑な暗文。	○胎土中に2mm以下の長石・チャート粒を含む。
110	瓦器	椀	土塚6	口径13.6	○体部からやや内彎気味に立ち上がり、口縁部はやや外反気味。 ○口縁端部は丸い。	○口縁部内外面はヨコナデ。 ○体部外面はユビオサエ。 ○内面はナデ後、雑な横方向の暗文。	○胎土中に1mm以下の長石を含む。
111	土師器	中皿	土塚4	口径10.8 器高 1.3	○凹む底部に内彎する口縁部をもつ。 ○口縁端部はつまみ上げ気味。	○外面は口縁部のみヨコナデで、体部下半・底部は未調整。 ○内面はヨコナデ。	○I群 ○胎土中に1mm以下の雲母・長石を含む。
112	土師器	中皿	落ち込み8	口径12.5 器高 2.0	○平底の底部から内彎して立ち上がり、体部上半でかるい稜をもって屈接し立つ。 ○口縁端部は丸い。	○外面は口縁部のみヨコナデ。体部下半・底部はナデ。 ○内面はヨコナデ。	○II群 ○胎土中に1mm以下の雲母・チャートを含む。
113	土師器	中皿	井戸10	口径13.2 器高 1.5	○平底の底部から外反気味に立ち上がる。 ○口縁端部は丸い。 ○内底面と口縁部の境界は、ヨコナデにより凹む。	○口縁部内外面は右まわりのヨコナデ。体部下半・底部は未調整。 ○内底面はナデ。	○I群 ○胎土中に1mm以下のくさり礫・石英・長石を含む。
114	土師器	中皿	土塚11	口径14.7 器高 2.0	○やや凹底の底部から内彎気味に立ち上がる。 ○口縁端部は丸い。	○口縁部内外面はヨコナデ。体部下半・底部は未調整。 ○内面はヨコナデ。 ○内底面はナデ。	○I群 ○胎土中に1mm以下の長石・くさり礫・雲母を含む。
115	土師器	甕	溝42	口径19.7	○口縁部は水平に近く外反する。 ○端部は内傾し上方へつまみ上げる。 ○頸部にはヨコナデによる強い稜がある。 ○体部上半には断面三角形の突帯がある。	○口縁部内外面はヨコナデ。体部内外面はナデ。 ○突帯は貼り付けている。	○II群 ○胎土中に2mm以下の長石・チャートを含む。



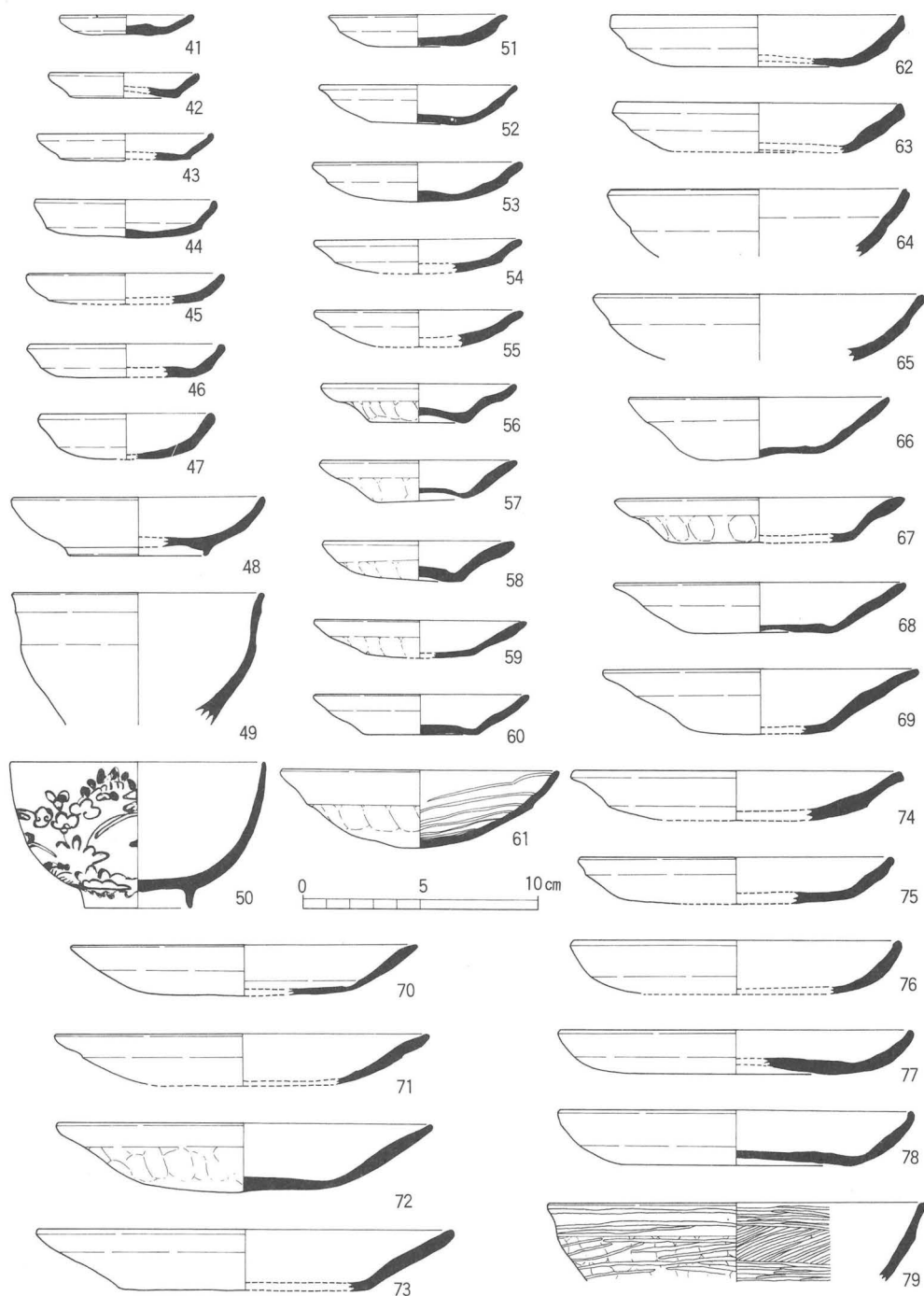
- | | | | |
|------------|-------------|-------------|----------|
| 井戸2 (4) | 井戸16(27) | 井戸30(5) | 井戸38(15) |
| 井戸5 (6.7) | 井戸18(25) | 井戸33(1.17) | 井戸39(11) |
| 井戸7 (8.23) | 井戸20(18.19) | 井戸34(10.20) | 溝4 (14) |
| 井戸9 (16) | 井戸25(22) | 井戸35(13.21) | 土壇9 (24) |
| 井戸12(2.3) | 井戸28(26) | 井戸37(9) | 土壇10(12) |

第72図 遺物実測図



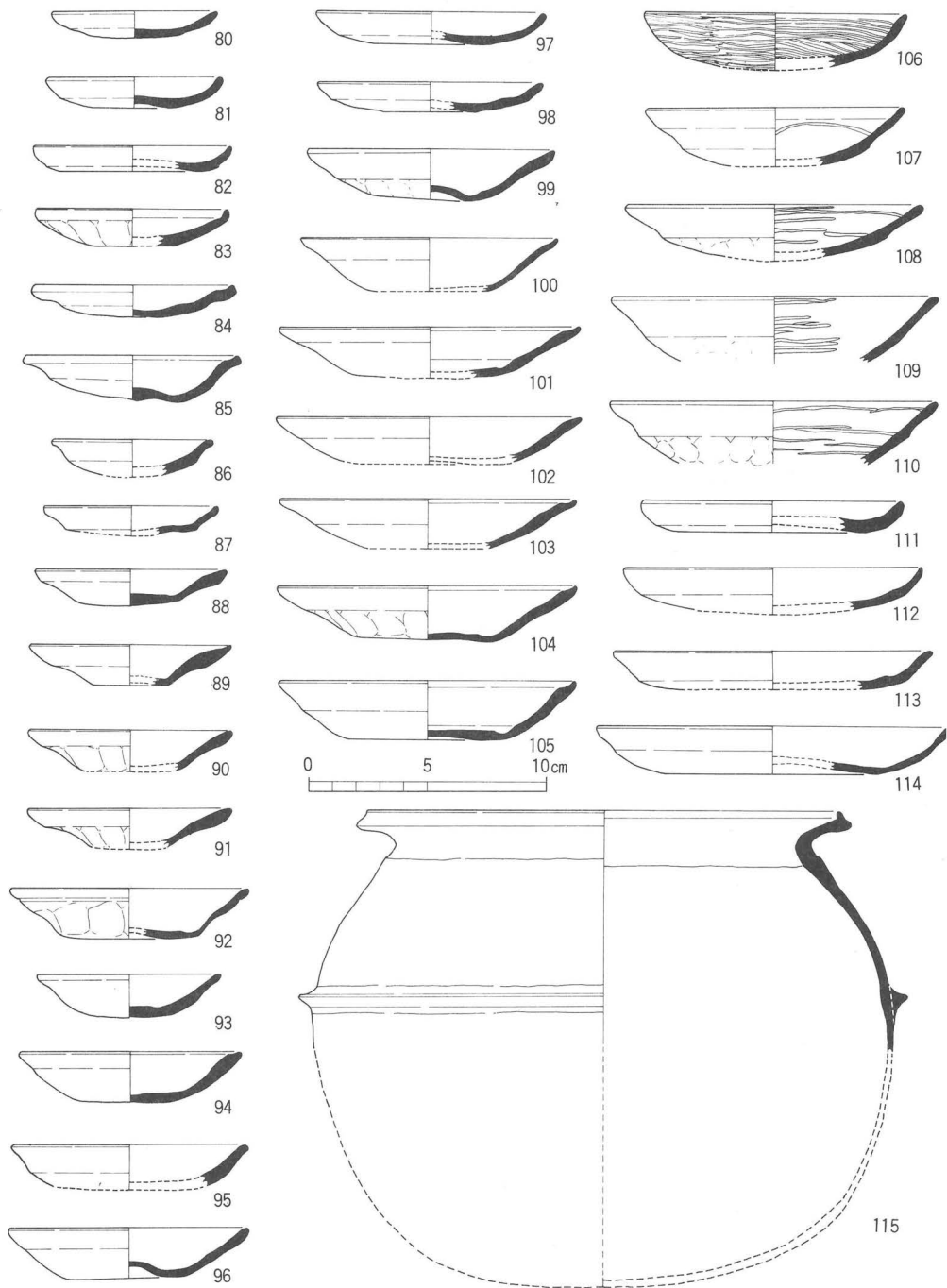
- | | | | |
|-----------|--------------|-----------|-----------|
| 井戸 3 (36) | 井戸11 (39.40) | 井戸 6 (29) | 井戸24 (28) |
| 井戸 4 (37) | 井戸13 (31) | 井戸 8 (38) | 井戸31 (35) |
| 井戸 5 (34) | 井戸22 (30) | 井戸 9 (33) | 井戸32 (32) |

第73図 遺物実測図



- | | | | |
|----------------------------|----------------|-------------------------|----------------|
| 井戸23(50) | 溝 16(44) | 溝 30(43.61.62) | 落ち込み 3 (47.51) |
| 溝 1 (56.59.60.67.69.70.73) | 溝 18(41.66) | 溝 35(42.45.55.64.65.76) | |
| 溝 2 (57.58) | 溝 20(79) | 溝 36(77.78) | |
| 溝 14(53.71) | 溝 23(48.49) | 溝 41(72) | |
| 溝 15(63.68.74) | 溝 29(46.54.75) | 溝 42(52) | |

第74図 遺物実測図



- | | | | |
|---------------|---------------|----------------------|---------------------------|
| 井戸 6 (80.109) | 土壌 3 (83) | 土壌12 (81.84.107) | 土壌21 (106) |
| 井戸 9 (86) | 土壌 4 (82.111) | 土壌13 (87.95.108) | 落ち込み 8 (90.112) |
| 井戸10 (113) | 土壌 6 (110) | 土壌15 (100.103) | 落ち込み 4 (91.93.99.101 105) |
| 井戸20 (89) | 土壌 8 (97.98) | 土壌16 (88.92) | ピット (85) |
| 溝 42 (115) | 土壌11 (114) | 土壌19 (94.96.102.104) | |

第75図 遺物実測図

VI. 遺構について

1. 井戸について

井戸は、水道が普及するまでは人間生活に欠くことのできない存在であり、飲料、調理、水浴、洗濯など広く人々の日常生活の中で用いられてきた。この井戸は、今回の報告書では40基を報告している。時期別に分類すると12世紀代5、13世紀代8、14世紀代8、15世紀代1、16世紀代13、18世紀代1、不明4である。この時期は井戸が廃絶された時期であり、使用を開始あるいは構築された時期ではない。井戸が構築された時期を掘形出土の遺物から決定づければよいものではあるが、若江遺跡の他の遺構と同様に古い時期の遺物を多量に含んでいるのである。遺物の上での時期差があまりみられないのは井戸3、井戸4、井戸5といずれも12世紀代に属するものである。13世紀代以降の各時期の井戸ではそれぞれに時期決定された新しい遺物を含んでいるものの12世紀代、13世紀代、14世紀代の遺物を割合多く含んでいる。井戸内から出土した遺物により井戸の使用されていた期間というものがあるが、古い時期の遺物をどのようにみるかにより二つの考え方ができる。一つは井戸の使用を開始した時点で誤って井戸内に落下させたものでありそれが発掘とともに再び出土したもの、もう一つは井戸が廃棄される時、あるいは周辺を大規模に整地した時に埋土といっしょに古い時期の遺物が混入したという考えである。井戸によって一律に考えることはできないが、遺物による時期差が100年～400年あり、井戸の一般的な耐用年数、井側の材質から考えても、あるいは廃絶時期の井戸の遺跡内における配置のされ方から考えても少しおかしいと言わざるをえない。このことから後者のものが多かったのではないかと思われる。



第76図 大阪府四天王寺扇面法華經冊子(井戸端の図)

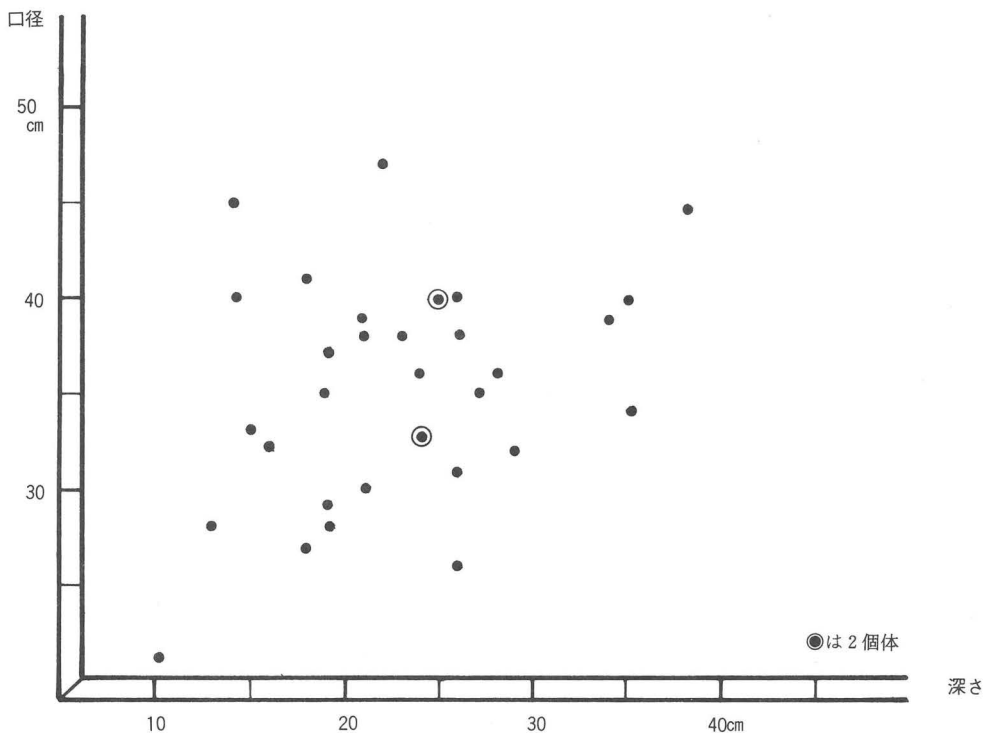
井戸の構造

井戸の構造は井戸側に使用された材質により曲物井戸、羽釜井戸、桶側井戸、板側井戸、瓦積井戸とこれらを組み合わせたものに分類できる。

曲物井戸は、井戸5、10、14、15、22、24、27、29、30、31、32の11基で曲物を1段～4段積み上げている。曲物井戸の大部分は後世の削平などにより破壊を受けており実際はもっと多くの曲物を積み上げていたか、別の材質の井側が上に乗っていた可能性が強い。一番多い5段積みの井戸13においても、遺構面から曲物の上面まで62cmあり、使用されている曲物の大きさから推定すればあと3段ないしは4段曲物があったと思われる。曲物の直径は26cm～74cm、平均38.8cm、深さは13cm～34cm、平均21.2cmである。曲物の直径、深さとも数値は一定せず規格されたものではないと思われる。(第77図参照)

羽釜井戸は、井戸2のみで土師器羽釜を3段積み上げたものである。この土師器羽釜はいずれも外面に煤が多く付着しており、日常の煮炊に使用されていたものである。しかし、使用过程中に底が破損したため適当な大きさに打ち欠いてそれを井側に転用したものである。今回の報告では1基のみであるがこれまでの若江遺跡の調査では3基検出されており河内地方においてよくみられるものである。

桶側井戸は、井戸6、18、26、33、34、35の6基である。板材は幅8cm～20cm、厚さ2cm～4.5cm、長さ37cm～126cmで、直径37cm～53cmの円形にし外面を竹のタガで締めている。桶側の中には



第77図 曲物計測値分布図

建築材を転用して作られた井戸6、桶側がほとんど残っていなかったがタガや板材が出土していることから桶側と断定した井戸18.26もある。

板側井戸は、井戸17、40の2基である。いずれも板側のみではなく曲物との組合せである。井戸17は方形横棧縦板の井戸で幅5cm、厚さ3cmの横棧の外側に、幅16cm～20cm、厚さ0.6cm、長さ現存で55cmの板を縦に並べ一辺80cmの方形の井側としている。この井側の下に直径47cm、深さ22cmの井側を置く。井戸40は幅20cm、厚さ2cm、長さ75cmの板材4枚を組合わせた横板セイ口組の方形井側でこの下に直径51cm、深さ12cmの曲物を置く。

瓦積井戸は、井戸8、25、28、36、37の5基である。井戸8、28は井側下部が桶側に、井戸25、37は曲物となっている。井戸8は直径2.3mの円形の掘形の中央に幅6cm～8cm、厚さ0.7cm～0.8cm、長さ60cm、28枚の板材によりなる直径70cmの桶側を2段積み上げ、その上に花崗閃緑岩等の石材を中心として瓦、瓦器火舎を積み上げている。この二つの井戸とも掘形が大きく、井戸の深さも2.35m、1.3mと深く貯水量も多い。井戸25は上部が破壊されており、瓦積の構造は明確ではないが、検出面で一辺1.18mの方形の掘形をもち、下部に曲物2段を据えて上を瓦や石、土器で積み上げている。井戸37も長径1.72mの楕円形の大きな掘形の中央に曲物1段を据えその上に瓦、石、土器を積んでいる。深さは2.28m。

羽釜十曲物井戸は、井戸9、16、21の3基である。井戸9は井側上部が曲物(2段)、下部が羽釜(土師器羽釜2段)、井戸16は井側上部が羽釜(土師器羽釜1段)、下部が曲物(1段)、井戸21は井側上部が羽釜(土師器羽釜1段)、下部が曲物(1段)である。井戸9を除けば掘形も小さく深さも50cm前後である。

桶側+曲物井戸は、井戸7、13の2基である。井戸7は井側下部が曲物(2段)、上部が直径54cmの桶側、井戸13は井側下部が曲物(5段)、上部が直径54cmの桶側である。いずれも上部が方形の大きな掘形で、一旦掘りくぼめたあと曲物より少し大きめの円形の掘形を掘り据えている。

瓦+桶側+板側井戸は、井戸23のみである。2.14m～2.04mの不整形を呈する掘形の下部に隅柱横棧縦板の堅固な井側を据えその上面に円形の穴があくようにした板の蓋をかぶせ、その板の上に桶側を1段置き、さらに平瓦を1段めぐらす。

素掘り井戸は、井戸1、3、4、11、12、19、20、38、39の9基である。この素掘り井戸は調査において井側が検出されなかったものであるが、この遺跡周辺の地質は後背湿地であった時に堆積した細粒砂や中粒砂、シルトより成りたっていて、井側がなければ井戸の壁面が湧水や水を汲み上げた時の水の振動などにより崩壊することが予想されることから、本来は何らかの井側が設置されていたものと思われる。

つぎにこれらの井戸の構造による貯水量の問題である。これは構築されたそのままの状態で見ても現在にまで至っているのが少なく、途中で腐食したり破壊を受けていたりしていること、使用当時の水位が発掘調査では確認できないことなどから正確な算定はできないが、構造上の容量からいえば、井戸23の瓦+桶側+板側井戸が群を抜いて多く、以下瓦積井戸、板側井戸、桶側井戸、桶側+曲物井戸、曲物井戸、羽釜井戸、羽釜+曲物井戸の順となる。井戸の底の層位、

つまり湧水層であったと思われるものは、井戸1、2、15～21、27、29～32が淡黄褐色、淡褐色を呈する中粒砂、それ以外は淡青灰色細粒砂であった。淡黄褐色、淡褐色中粒砂はもとは川の流路となっていた時の堆積層と思われ水質は良好で湧水量も豊富であったと思われる。淡青灰色細粒砂から湧き出る水は今では鉄気水といわれ、質も良くないそうである。井戸の現時点における湧水と底の標高をみると、まず湧水のみられた井戸は、井戸3、4、8、9、13、21、23、25、34、36、37の12基で、底の標高は井戸21を除けば3.1m以下であった。井戸21は3.86mと底の標高が高かった割には湧水がみられた。一方、湧水のみられない井戸の底の標高をみると最高が3.95m、最底が2.63m、平均3.36m、3.1m以下が5基あるが湧水はみられなかった。これらのことから標高が低ければ、つまり井戸を深く掘れば水がよく湧く傾向にはあるが、現時点における湧水のみても低くても湧水がないものもあるし、高いのにもかかわらず湧水がみられるものもある。このことから一概に標高の高い低いで湧水量を論じることはできない。又、井戸が構築された時の気候、季節等によって地下水位に変動が生じるものと思われる。例えば記録に残っている早魃の中に

承安四年(1174)五月 大旱 河流井水皆竭(続本朝通鑑)

治承四年(1180)七月十七日 自去五月 炎旱涉旬 天災競発歟 所々水皆絶(百練抄)

嘉祿二年(1226)三月二十三日 井水乾る(明月記)

同年(1226)八月十四日 天晴 久不雨 所々井水皆乾(明月記)

同年(1226)九月二十六日 天晴 早魃已久 諸井無水云(明月記)

寛喜元年(1229)八月三十日 天晴 已涉旬月 無雨露 井水已乾(明月記)

天福元年(1233)六月二十四日 炎旱彌甚しく 去冬掘る所の井、浅くして水乾了す(明月記)

正平四年(1349)一月 自冬不雨 洛中井涸(続本朝通鑑)

正平十七年(1362)十二月六日 自六月十三日 早魃 諸々井水拂底(師守記)

などと記されている年は地下水位も低下、あるいは枯渇したものである。

井戸の変遷

井戸の時期を構造別にみると、曲物井戸は12世紀代2、13世紀代2、14世紀代4、15世紀代1、不明2と各時期にわたって構築されていて、また構築数も多いことからみて、この地域ではごく一般的な構築方法であったと思われる。羽釜井戸は13世紀代1、羽釜+曲物井戸は13世紀代2、14世紀代1、板側+曲物井戸は13世紀代1、不明1、桶側+曲物井戸は13世紀代1、14世紀代1、桶側井戸は12世紀代1、16世紀代4、瓦積井戸は13世紀代1、16世紀代4、瓦+桶側+板側井戸は18世紀代1となる。これをみると、若江遺跡における時期による構築方法の違いが明らかである。曲物は12世紀から15世紀の間に構築されている。13世紀代には羽釜井戸、羽釜+曲物井戸、板側+曲物井戸、桶側+曲物井戸と構築方法にさまざまなものがみられる。15世紀代に属するものは少なく構築方法は明確ではない。16世紀代になると瓦積井戸と桶側井戸がほぼ半分ずつの割合で構築されていることがわかる。

井戸の分布

井戸の存在は同時に住居地域を推定させてくれる。これまでの調査においては建物跡と思われるものは検出されていない。今回の調査においても建物跡と推定される場所は25A17-20地区でピット多数が検出されたことにより存在が推定されるが、調査がほんの一部分だけで調査区外へ延びるため規模は明らかにすることはできなかった。このピット群の周辺では東西25mの範囲に井戸が11基まとまって検出された。これらは規模からして生活用水を得るための井戸と思われ、井戸の廃絶時期を考慮すれば、建物に伴う井戸は期間を限れば1基か2基であったかと思われる。しかし、どれくらいの建物に対してなのか、建物の規模、数量が明らかでないため、今後の周辺の調査により明らかにしていきたいと思う。また、25A14-21地区以外においても一定の間隔をおいて井戸が存在しており、井戸のそばに排水用と思われる溝も存在している。しかしながら現時点においては資料的に不足しているため、若江遺跡全体の時期別推移、集落のあり方は今後の課題である。

2. 溝について

今回の調査で検出した溝は、大小合わせて45条である。この45条におよぶ溝の性格を追求するには、幅、深さなどの規模、平面・断面形態、施設などの構造、土層の堆積状況、出土遺物の4つの要素を検討して、遺跡内における位置関係を明らかにした上で行なわなければならないと考える。現在我々が知り得る溝の性格は、生活用水溝、雨落溝などの排水溝、道路側溝、耕作用水溝、建築物等を区画する溝、防御用の溝がある。今回の調査で検出した溝の中で、以上のような性格が明確な溝は少ない。大部分の溝が性格不明である。しかしながら、溝の性格を追求する方法の1つとして今回は規模、構造による分類を行なった上で、土層の堆積状況、出土遺物、遺跡内における位置を検討していきたい。

溝の分類は、最大幅、深さの規模、平面、断面形態、施設の構造を基準として行なっている。Ⅰ類は、最大幅0.5m未満、深さ0.3m未満で、断面形態椀状および深い皿状を呈して、1段掘りのもの、Ⅱ類は、最大幅3m未満、深さ0.3m以上で、断面形態U字形および椀状を呈するもの、Ⅲ類は、最大幅3m以上、深さ1m以上で、断面形態皿状を呈するもので、1段、2段掘りである。

Ⅰ類

規模、構造ともに、小さく、単純なものである。土層の堆積状況を見てもすべて単一層で埋まっている。出土遺物も完形品はなく、細片ばかりで、時期の明確なもののごくわずかである。さらに遺跡内の位置としては、西方に集中している。従って、Ⅰ類に属する溝は、性格の追求が困難な状況にあるといえる。しかしながら、上記であげた溝の性格の内、比較的小さい溝をあげれば、生活用水溝である排水溝、雨落溝、あるいは、耕作用水溝などである。この中で、耕作用水溝は、今回調査した範囲が、若江城、あるいは集落の中心地に近いと考えられ、また、生活に密着した井戸、土壙などの遺構を多く検出していることから、耕作地として使用していた可能性は少ない。次に、雨落溝は、建物に伴う溝であるため、付近に建物の存在が必要になっ

分類	溝 番 号
I	8, 10, 11, 12, 13, 35, 38, 39, 40
II	2, 3, 6, 7, 9, 15, 17, 18, 19, 20, 21, 22, 24, 25, 26, 27, 28, 29, 30, 31, 32, 33, 34, 36, 37, 41, 43, 44, 45
III	1, 14, 23, 42

表5 溝分類表

てくるが、これも明確な建物跡を検出していないため、可能性は少ない。ただ、溝8、溝12、溝13などは周囲にピット群が集中しているので、雨落溝の可能性が全くないとは断言できない。このように、雨落溝、耕作用水溝の性格を持つ溝があまり存在しないとすれば、I類の溝は、排水溝の可能性が高いといえるが、このことも、単に排水溝とするのは短絡的である。排水溝も、色々の状況に応じて開削していると考えられ、I類の溝が、どのような施設に伴う排水溝であるかは、今後の大きな課題であろう。

II類

規模、構造ともに、当遺跡あるいは他の同時期の遺跡においても普遍的に見られる溝である。堆積状況は概ね、1層から4層に分層できるものが多く、埋土と堆積土が比較的明確である。これは、溝の機能していた時間が長く、不用になった場合、埋めたものと理解できる。遺物は、比較的豊富に出土するが、時期幅は大きい。このことも溝の機能年代が長いという1つの根拠として理解できる。このII類の溝群もI類同様、遺跡の西側に集中する傾向が見受けられるが、他の遺構とセットとして考えるような位置関係にはない。従って、II類の溝も、性格を追求するのは困難であるが、当遺跡内における可能性としては、I類同様、生活に密着した遺構群と同一地域にすべて存在しているため、生活するのに必要な排水溝あるいは、付近の河川より水を集落内に流すための溝であるかと考えられる。

III類

III類に属する溝は、現在のところ4条検出している。規模といい構造といい、いわゆる大構である。土層の堆積状況は、各溝によって大きな相違がみられる。埋土と堆積土は明確であるが、複雑である。4条の溝の中で、溝1が東西方向に走り、他の溝14、23、42は南北方向に走っている。出土遺物は、各溝とも非常に多量で、溝内の各層よりまんべんなく出土している。遺跡内における位置関係は、溝1が、推定若江城の中心部分のすぐ南側、溝23は、中心部よりやや西側に位置し、溝42はさらに西側である。これらの溝は、他の多数の遺構と切り合い関係にあり、今回検出した遺構の中では、最も新しい遺構の部類に属するものである。溝1・溝42が16世紀中葉から後半、溝23が17世紀初頭である。いずれも若江城が廃城となる時期前後であり、若江城と深い関係にある遺構であると考えられる。上記のような事実を踏まえてIII類の溝の性格を考えた場合、先にあげた防御用の溝の可能性が高いと思われる。特に溝1は、位置、規模、時期、埋土の状況より考えれば、若江城の堀の一部である可能性が非常に高いといえる。

以上の様に、各溝の性格を追求してきたが、すべて状況証拠であり、何1つ決定的な根拠はない。しかしながら、発掘調査で検出する溝は、すべて人為的にかつ目的をもって構築されている以上、溝の性格を追求することは、重要な作業である。今回行なった溝に対する性格追求の方法に多くの問題があるが、調査が進めば解決可能であると確信するものである。

3. 堰について

堰は今回の調査で2つ検出した。1つは遺物が出土せず時期は明確ではないが層位から古墳時代と思われる。今1つは江戸時代である。

古墳時代と思われる堰は、推定全長約17m、幅約4m、検出高54.2cmで青灰色シルトに構築されていた。堰の構造材である杭は直径5cm前後であるが上部はほとんど残っておらず、堰の高さ、つまり堰止めた水面の高さ、水位が明確ではない。堰止めるために使用した使用材は直径0.5cm～1cmと細く、これから考えれば、流速、水量ともそれほど多くない自然流路に設けられたものと思われる。設置された当時の周辺の地理的環境をみると、東1.6kmに旧大和川の本流である玉串川が、西2kmにやはり本流である長瀬川が流れ、すぐ西側には支流である楠根川が流れ、北約2kmで河内湖に達する。若江遺跡は、これらの河川、湖に囲まれた低湿地の微高地上にあるものと思われる。ただ当時の河川は、現在みられるような堤防により常に一定の流路をもつものではなく、大雨や洪水などにより、絶えず流路が変化するものである。そのことは、瓜生堂遺跡^①、巨摩廃寺遺跡^②、若江北遺跡^③、山賀遺跡^④などの発掘調査によりあきらかにされている。弥生時代から古墳時代に至る周辺の遺跡の状態をみると、瓜生堂遺跡は弥生時代前期から始まり、弥生時代中期には溝、ピット、土壇、落ち込み、高床式建物、方形周溝墓、土壇墓といった居住空間と墓域が検出されるが後半には洪水が発生して1m～1.5mの砂層、シルトが遺構面を覆っている。弥生時代後期では遺物は出土しているが、現在までのところ明確な遺構は検出されていない。古墳時代前期になると、遺跡の南半部で畦畔を伴う水田跡、自然河川がみつかっており、特に水田は巨摩廃寺遺跡から若江北遺跡へも広がっていることが確認されている。

巨摩廃寺遺跡では、弥生時代中期から始まり建物跡、溝、土壇、方形周溝墓が検出されている。弥生時代後期には方形周溝墓、木棺墓と河川、足跡、沼状遺構が検出されている。古墳時代前期には水田となっており、これが2面検出されている。上層のものは幅80cm、高さ20cmの南北、東西方向に区画された畦畔で1枚の水田の大きさが、17㎡前後である。下層のものは畦畔の方向が北西—南東、北東—南西で、1枚の水田の大きさが25㎡～40㎡であった。古墳時代後期には古墳が築造されている。

若江北遺跡では、弥生時代前期に人の手に加えられ人工の溝が掘削されている。遺跡の南半部は幅60m～70mの北西に流れる自然流路が存在していて、この流路の両側に水田が存在していた。またこの自然流路のすぐ南側には、幅3m、深さ約1mの水路が流路と平行に掘削されており、高さ約0.5mの堤も築かれていた。弥生時代中期では、遺跡の北半分で掘立柱建物、

竪穴住居址、井戸、溝、土壇等居住空間が形成されている。弥生時代後期になると、北半部は再び水田となり、南半部は自然流路となっている。この自然流路からは溝が北北東に向って掘削されており、途中には堰や遊水池も作られている。古墳時代前期は、弥生時代後期とほぼ同様の様相であり、北半部が水田、南半部が自然流路である。水田面には幅30cm～40cm、高さ20cmの南北にはしる大畦畔とそこから東西に延びる幅15cm～20cm、高さ5cm～10cmの小畦畔がある。1枚の水田の広さは35㎡～50㎡である。

山賀遺跡では、縄文晩期の土器、人と鹿の足跡が多数検出されている。弥生時代前期には、遺跡の北端と南端は水田となっており、中央部は掘立柱建物、倉庫等の居住空間となっている。居住空間と水田の間には溝(平均幅約2.5m～深さ1m)、土塁(平均底部幅約6m、高さ0.6m)があり、これによって居住空間の防御と水田への用排水をしたと考えられている。弥生時代中期になると、前期の水田、居住空間が埋もれ、もと居住空間であったところは方形周溝墓、木棺直葬墓等の墓域に、南北両端は前期と同様に水田となっていた。中期後半には中央部の居住空間に再び掘立柱建物群が建ち並び生活が再開されていたことがわかる。弥生時代後期では遺跡の北端部で大規模なシガラミ(堰)、杭列、溝、水田が、南端で溝、水田が検出されている。古墳時代前期のものは全く検出されていないが中期末後期初頭には古墳が築造されている。

このように周辺の遺跡においては、早い所では弥生時代前期からすでに水田が造営され、しかも用排水のための溝も掘削されている。弥生時代後期になると流水量の統御が積極的に行われるようになり、掘削した溝に堰を設けたり遊水池を設けたりしている。古墳時代には、土木技術の発達もあって水田面積が急激に増大している。

今回、検出したシガラミ状遺構も自然流路に設けられたものである。自然流路の幅は明確にはしえなかったが、シガラミとして使用されていた自然木の及んでいる範囲から約17mと推定できる。使用材が小さいため愛媛県松山市古照遺跡^⑤や大阪府豊中市利倉遺跡^⑥に見られるような流速、水量のあるような河川ではなく、水量、流速の少ない自然流路に設けられたものであろう。それは、遺跡の立地が河内平野中央部の低湿地で河床の傾斜がゆるいことから想像されよう。シガラミ状遺構は、自然流路を堰止めて貯水し灌概するためのものであるが、調査においてはシガラミ状遺構だけであり、周辺部に当然存在したであろうと思われる水田、導水施設としての溝、取水口などは検出することができなかった。しかしながら、周辺の瓜生堂遺跡、巨摩廃寺遺跡、若江北遺跡、山賀遺跡などで自然河川、溝、堰、杭列、遊水池、水田等が検出されているため、河内平野低湿地における広い範囲での水利灌漑状況、水田耕作形態等の水田経営の具体相が徐々にではあるが、明らかになってゆくものと思われる。

次に江戸時代の堰である。この堰は上面幅3.1m～2.07m、下面幅1.15m～0.88m、深さ1.22m～1.4mの溝に設けられたもので、上面幅109cm、下面幅87cm、深さ約60cmになるように設置されている。溝の中央には鳥居形の開閉装置があり、この開閉により暗渠水路に水を配水している。この溝がどこから掘られているのかは明確にしがたいが、南側から北へ向かっていることから楠根川から掘り引水したものと思われる。

もともと中河内一帯の農村は灌漑用水を大和川に求めていたが、村々の地理的条件によって
灌水状況は必ずしも一様ではなかった。村明細帳から村々の用水関係の概況をみてみると

享保7年(1722)8月 若江郡新庄村明細帳^⑦

一、村中之松伏樋三艘 長3間4尺、内法1尺5寸四方 板厚3寸5分 戸前鳥井立 新庄村

一、松伏樋長12間 内法2尺四方、板厚4寸、戸前鳥井立、新庄村

一、松伏樋長3間 内法1尺四方、板厚2寸5分、戸前なし、新庄村

一、松伏樋長11間半 内法2尺1寸四方、板厚5寸、戸前四ツ柱立、新庄村

一、用水掛樋 是八当村ニハ大和川違以後用水無御座候、然共冬春之内ニハ古川筋新田細井路へ水下り候ニ付、田地内へ引入置、則只今ニ至リ新庄村・箕輪村立合樋式ケ所御座候、則樋数前之所ニ書記申候事。

弘化2年(1845)2月 若江郡稲葉村明細帳^⑧

一、伏樋壺ケ所 但長5間、高サ8寸、横幅1尺5寸

右ハ古大和川筋ニ有之候得共、用水組ニ而者無御座ニ付、用水入用之節者一水モ入り不申候故、天水・井水等ニ而耕作仕、早損第一之場所ニ御座候

文久元年(1861)7月 若江郡稲葉村様子大概帳^⑨

一、右村水早兩難之場所ニ用水引方并ニ溜池等モ一切無御座、降留ニ而作立申ニ付、^{わざか}纒之早



第78図 河内名所図会卷之六 三十九

ニ而モ成丈ケ井水ヲ以相生ヒ候得共、後ニハ行届不申早魃ニオヨビ、既ニ当年モ格別之早損相立難渋弥増ニ御座候、用水之組合ハ一切無御座候、当御支配所最寄組合之儀者多分御検見請之村方ニ御座候故、組合引離候而者、御検見之節御休泊之差支ニ相成申候

一、用悪水ハ樋自普請所ニ無御座候

延享元年（1744）12月 若江郡箕輪村明細帳^⑩

一、天水場ニ而、用水之通路曾而無御座、当村領内ニ者堀井・溜池等之涌水ニ而茂用水ニ可成術一切無御座候ニ付、立毛早損仕候而、水早両様之悪場ニ而御座候御事

延享元年（1744） 若江郡小若江村明細帳^⑪

一、田方ニ木綿作、但し、田高ニ3割通り木綿仕付申候、犬御検地帳ニハ田方ニ候得共、大和川御違後用水不自由ニ付、次第ニ新畑ニ仕候、年々少々ハ多少御座候

一、当村日損場ニ而御座候、大用水樋者南隣近江堂村領頭ニ有之、当村領頭迄ハ道法380間、他領ヨリ用水取申ニ付、温水之節ハ水曾而下リ不申故、年々日損仕候

とあり、樋の数、規模、改修工事費の負担仕法、村により水・早両難の村方であることを述べている。宝永元年（1704）の大和川の付替え以前には、しばしば大和川の氾濫によって水害を受け以後も、排水不良のため少しでも雨が続くと冠水する低湿地であった。また悪水の流末にもあたることから、大雨が降れば排水が困難であり、ことに淀川増水のときは悪水路である楠根川を逆流して、田畑が冠水することもあった。一方、灌漑用水に不足勝ちの地域にもあたり大和川付替以後は付替地点に設けられた築留樋により、井路に大和川の水を流下させた。しかし、大和川は元来水量が少ない上に井路上流で用水を使用するため下流までは水が下がらず、しばしば早魃に見舞われた。

今回検出した堰、溝は規模が極めて小さいことから、明細帳に記載されてあるような大きな公儀普請のものではなく、百姓普請のものであろうと思われる。また、この若江周辺の地域は半田という土地利用形態が発達していたところである。この半田というのは天保4年（1833）に刊行された大蔵永常の『綿圃要務』に記載があり次の様に記されている。

河内国若江郡八尾平野辺は其国の中程にて、大坂をはなる事二三里程東に当れり。土地は砂真土にして所々にしめ土とて下には堅き土あり。平野〈大阪より二里東〉辺は是も砂真土にして所々左程の深田^{かいた}にあらざれども、泥がちの湿気の田ありて、半田^{はんた}と号して盤に香を盛りたるがごとく、菑畦は田、菑畦は畑にして、土をかき揚たる方に綿を作り、低き方に稲を作るを搔揚田^{かきあげた}といひて、其田の処に水溜れども畑はよく乾き、殊に田土を揚たるものなれば土肥て、外の肥し半分入て綿よく出来、水田の稲も一段見事に出来るなり、

現在では、宅地化などによりこの半田はほとんど消滅しているが、明治20年作成の地籍図（若江南）には非常にたくさん表現されている。また、昭和36年撮影の航空写真（図版1）にもその名ごりが所々にみられる。

半田は、早損・水損を二つながら蒙るような地域に多く分布しており、このような地理的条件に対応して生まれた土地利用形態である。用水が行き届かぬため、すべての耕地を田にして

稲作を行なうことが困難であり、一方排水不良のため、河内南部のように田で稲と綿を隔年に栽培することは不可能であった。たとえ排水できても、翌年の稲作に用水が不足するため、田は冬期も水を落さぬ一毛作田にしておかねばならなかった。¹²⁾

これらのことから、この溝、堰は半田に灌漑あるいは排水するために掘られ、又構築されたものではないかと思われる。ただ堰から北側が暗渠となっていて、この暗渠がどこまで延びているのか、暗渠の先はどのような構造になっているのか、揚水施設があったのか、なかったのか知ることはできなかったが今後の調査で明らかになると思われる。

註

- ① 田代克己他『瓜生堂遺跡』(中央南幹線内西岩田瓜生堂遺跡調査会 1971年)
中西靖人他『瓜生堂遺跡Ⅱ』(瓜生堂遺跡調査会 1973年)
堀江門也他『瓜生堂』(大阪府教育委員会 財団法人大阪文化財センター 1980年)
「瓜生堂」『河内平野を掘る』(財団法人大阪文化財センター 1981年)
- ② 「巨摩廃寺遺跡」『河内平野を掘る』(財団法人大阪文化財センター 1981年)
- ③ 「若江北遺跡」『河内平野を掘る』(財団法人大阪文化財センター 1981年)
- ④ 「山賀遺跡」『河内平野を掘る』(財団法人大阪文化財センター 1981年)
- ⑤ 黒崎直他『古照遺跡発掘調査報告書』(古照遺跡調査本部 松山市教育委員会 1974年)
森光晴他『古照遺跡』(松山市教育委員会 1976年)
- ⑥ 島田義明『利倉遺跡』(利倉遺跡発掘調査団 1976年)
- ⑦ 『河内国若江・河内郡村明細帳』(東大阪市史資料第6集(1) 東大阪市役所 1976年)
- ⑧ 前掲註7
- ⑨ 前掲註7
- ⑩ 前掲註7
- ⑪ 『河内国渋川・若江郡村明細帳』(東大阪市史資料第6集(4) 東大阪市役所 179年)
- ⑫ 浮田典良「江戸時代～明治前期の摂河泉綿作地帯における土地利用形態」『人文地理』(第13巻第2号 1961年)

V. 若江城について

1. 文献から見た若江城

(1). はじめに

中世の畿内の歴史の中で、若江城は有名な城の一つである。応仁の乱の一因となった河内における畠山氏の抗争はこの若江城の争奪戦でもあった。室町幕府最後の将軍足利義昭が、織田信長との戦に敗れ、槇島城よりののがれて来た城が三好義継の若江城であった。その後、この城は織田信長の石山本願寺攻撃の拠点として活用された。

しかし、現代の東大阪市若江には、かつての若江城の遺構はほとんど残っていなかった。その意味では「幻の城」であったが、一部には天守閣跡といわれる地や地籍名に城郭の名残を残している。昭和47年(1972)よりはじまった東大阪市教育委員会並に東大阪市遺跡保護調査会の20回に及ぶ発掘調査によって「幻の城」は少しずつ我々の眼前にその姿を現わしつつある。若江城関連の遺構と考えられているものには、濠(大溝)、建物、埴列、石積遺構、整地層などがあり、その他に瓦器、陶磁器等の若江城時代の遺物も発見されつつある。

本論は、これら一連の発掘結果を参考としながら、文献上の若江城について可能な限り、その史料の検討を行ない、若江城の歴史を解明しようとするものである。

(2). 若江城関連史料の検討

享徳四年(1455)畠山持国が亡くなると、その家督は実子義就と養子政長によって争われることになる。この両畠山の合戦は、応仁の乱の一因ともなる戦で、河内はもちろん、大和・紀伊・摂津・和泉・山城の国人・土豪もまき込んだ合戦となり、中央の幕府・将軍権力とも密接に関連した展開を見せる。この畠山義就方と畠山政長方の両畠山の合戦を扱った合戦記が『長祿寛正記』である。『長祿寛正記』は、文明十四年(1482)河内若江寺の右筆主祐なる者が書写をしたという奥書があるので、長祿・寛正年間(1457~1466)からそう遠くない応仁・文明年間(1467~1487)の間に書かれたものであることが推測できる。従ってその内容についてもある程度までは正確な記述が期待できるであろう。

若江城はまずこの『長祿寛正記』^①に集中的に出現する。

政長ハ同月(長祿四年九月)廿三日家督ノ出仕有リ。尾張守ニ被任。次ノ月閏九月九日和州へ入國有。(中略)同(閏九月)十六日菩提院ヲ立テ立田へ着陣シ玉ケリ。大和勢ヲ催シ若江城ヲ攻ラルベキ御下知ヲ蒙。近國ノ兵ヲ催サルハ。(中略)是ヲ聞テ同月(閏九月)十六日若江城ニテ義就方逆寄ニ立田へ發向シ。打散セトテ巳猛勢就用意シケレバ。十月九日ノ夜河内國ヨリ政長へ以使ヲ告申者アリ。(中略)神南山ノ味方不殘討死シケレバ。義就モ終ニ不叶西林寺へ引入。爰モ要害悪キトテ其夜ニ寛弘寺へ移玉フ。御トモノ人々申ケルハ。嶽山

ヲ城ニ取立可然トテ。近邊ノ兵糧ヲ取入。嶽山ニ上リ玉。(中略)始ヨリ若江ノ城ニ引籠リ玉バ。四方ハ皆深田ナリ。ロニッニ拵ヘ所々ヲ堀切テ搔楯ヲカキ。逆茂木ヲ引待カケ。(中略)其時城ヨリ切テ出ラレバ必定勝軍可成。無専大ハヤリニハヤリテ。逆打シテ加様ニ打負。コトニ不運ノ次第也。同月(十月)十一日政長ハ嶋ノ城ヘ陣替シ、吉日成トテ遊佐新左衛門長直ヲ河内守ニ任ジ、自大和河内ニ入ラル、。同(十月)十五日政長河内ノ若江城ニ入城有ル。奈良ヨリ成身院。嶋中務丞御供申。

長祿四年(1460)閏九月から十月の両畠山の合戦は若江城の争奪戦となった。若江城に楯籠る畠山義就に対し、畠山政長は大和龍田に陣を敷いてこれを迎え討ったが、義就方が敗れ、河内寛弘寺から南河内の嶽山城へ退いた。代って十月十五日、畠山政長が若江城に入城した。この『長祿寛正記』の中に「若江城は周囲は皆深田であり、口を二つに造り、所々に堀を切つてかいて搔楯をかき逆茂木さかもぎを引待ちかけていた様子」が記されている。若江城は旧大和川本流とその支流に囲まれた低湿地の中央にたたる台地にあり、囲りが深田であったことは現在の地形からも推定できる。周囲に堀がめぐらされていたことは、発掘調査の結果その一部と考えられる大溝がこれまでに各所で発見されていることから裏付けられる。注目すべきは、1980年度発掘調査遺構の大溝の一部に杭列が14本発見されていることである。『長祿寛正記』の「逆茂木ヲ引待カケ」という記述は「堀の水中に逆茂木を打ちそれに網を張って敵の堀への侵入を妨害する」ものであるが、大溝の中に打たれた14本の木杭はこの様な逆茂木の一部ではないかと推測される。又、城には二つの口があったと記されているが、これは若江の村を南北に通った街道に連なるものではなかったかと推測される。

前掲の『長祿寛正記』の記述は『大乘院寺社雑事記』に次の様にあることから裏付けられる。

閏九月十六日

一、畠山弥次郎(政長)下向龍田、成身院(光宣)同道、為河内発向取寄云々、百騎計相具云々、

十月十一日

一、當國大勢筒井・十市以下打越河内國之間、衛門佐(畠山義就)方不知行方、仍國中相尋云々、

これによれば長祿四年(1460)閏九月十六日に大和龍田に陣を張った畠山政長と若江城の畠山義就の合戦が行なわれたことは確実であり『大乘院寺社雑事記』に現われる興福寺六方衆の成身院光宣は畠山政長の重臣として『長祿寛正記』にもその名を見ることができる。

両畠山の合戦は、寛正四年(1463)四月に至っても続行している。『長祿寛正記』は次の様に記している。

去程ニ右衛門佐義就ハ生地ガ館ニ籠リ。甲斐庄。和田。鹽川以下ノ河内衆。數多河州ヘ引退

ベキヨシ議スルト聞シカバ。政長ヨリ管領へ此由ヲ注進有シカバ。則大和衆越智弾正大将トシテ。若江ノ城ノ後詰ニ發向ス。是モ猶無勢ナルベシトテ。重テ細川殿ヨリ大和勢ヲ催サル、

寛正四年（1463）四月十五日、畠山義就が楯籠った南河内の^②嶽山城が落城し、義就は紀伊に逃亡したが、管領細川政元の命によって大和の十市・筒井・越智氏などが動員され、越智弾正忠家榮は若江城の後詰として発向している。畠山政長方の拠点として若江城が重要視されていたことを物語る。

寛正四年（1463）十二月には、畠山政長は河内より上洛することとなった。『長祿寛正記』は次の様に記す。

尾張守政長ハ義就ヲ尋テ、追罰ニ及ベキト云ドモ、勝智院殿（足利義教室）ノ御中陰ヲゾ過サレケル、百余日ニナリシカバ、義就ヲ尋出シ可被誅之由、重テ被申上ケレバ、京都ニテ奉行頭人寄合評定シケルハ、（中略）サレバ今ノ右衛門佐義就モ何事ノコトカ仕出ベキ、唯紀伊國城々ニ兵ヲ籠、政長ハ上洛可然ト被仰下ケレバ、政長モ応上意、十月（十二月）二十四日先河内國若江ノ城ニ入玉フ云々。

すなわち、畠山義就が紀州に楯籠ったので、政長に河内からの上洛を命じた幕府奉行人の評定に従って、南河内に転戦していた政長はその本拠の若江城にもどったのであった。

しかし、文正元年（1466）に至ると、畠山義就は山名持豊の援助を得て上洛することになり、再び若江城をめぐる攻防戦が展開されることとなった。『大乘院寺社雑事記』によれば、文正元年八月五日条に「畠山右衛門佐（義就）爲退治、遊佐四郎左衛門夜前著若江」とあり、政長方の先鋒隊として遊佐四郎左衛門長直が京都より若江城に着したことが記されている。

この時の合戦について『応仁記』^③は次の様に記している。

畠山義就ハ武衛ノ騒動ニ折ヲ得ケルニヤ、文正元年九月上旬ニ、熊野北山ヲ立テ河州へ入國ス、政長ノ守護代遊佐河内守長直ニ防ベキ由下知セラル、長直若江ノ城ヲ密ク掟、大堀二重三重ニアゲサセ、兵糧塚ヲツキ、矢楯岡ヲナシ、軍勢四・五千計有ケルガ、一戦ニモ及バズ追落サレ、長直が舅奈良ノ筒井ノ法橋ガ方へ落行ケリ、依之義就手足ニサハル物ナク河内入國シ、我が家ノ子國助ガ子息ヲ元服サセ、遊佐河内守ト號セラル、

『応仁記』は著者は不明であるが、その成立は文明五年（1473）からさほど時間を経ない頃の作と考えられている。従ってこの内容もかなり信憑性の高い事が多い。この中に「遊佐長直が若江城に籠り、大堀を二重・三重に構え、兵糧塚を造り、矢楯を並べ、四・五千計の軍勢を配置した」記述があるが、これも若江城の関連史料として注目してもよいものであろう。

応仁の乱が勃発すると、若江城は、東軍畠山政長方が拠点としていたらしいが、若江城をめ

ぐる攻防戦が展開される。『大乘院寺社雑事記』文明二年（1470）八月五日条は、

一、自昨日於河内國合戦有之、東方畠山若江城西方武家^(貴)□之、東方譽田城西方武家并越智貴之、今度大乱以後者越智自身出陣之始也、

とあり、若江城や譽田城が西軍方によって攻撃されていたことがわかる。

文明九年（1477）に至ると、若江城は畠山義就方に奪還された。『大乘院寺社雑事記』を見ると次の記事がある。

九月二十三日、

畠山右衛門佐義就二十一日立京進発、三百五十騎并甲二千餘、東方陣見物之、東方御勢一人而不向出云々、希有事也、差河内國牧云々、大和、河内兩國勢共狩催之云々、河内國若江城ハ左衛門佐政長之方遊佐河内守持之敵城也、

九月二十七日、

於河内國、合戦有之、生馬^(騎)山之西并山田辺焼之歟、煙共暈、如何様若江辺歟云々、若江ハ東方遊佐（長直）之陣也、

十月二日、

去月二十一日畠山右衛門佐義就河内國入部、先陣遊佐中務、（中略）畠山左衛門督政長者在京都公方御陣、手物遊佐河内守長直在若江城、仍連々合戦、譽田城、往生院城、客坊城合四ヶ所之内客坊城ハ去月二十七日責落之暈、

十月九日、

嶽山没落、責手大和吐田勢云々、昨日事云々、往生院城責落之、
一、若江城没落遊佐河内守長直自天王寺令乗船没落了、

すなわち、九月二十一日畠山義就が京都を進発し、九月二十七日河内の若江城、譽田城^④、往生院城^⑤、客坊城^⑥等で合戦が展開されたが、十月九日に至ってこれらの城は落城し、若江城にあった畠山政長の守護代遊佐河内守長直は天王寺より没落した。『長興宿祢記』も文明九年十月九日条に、「河内若江城没落、遊佐河内守左金吾（畠山政長）執権以下群勢分散、天王寺御方城同被追落云々」と記している。

このように文明九年（1477）の畠山義就方と畠山政長方の若江城争奪戦は、義就方が勝利した訳であるが、これらの記録により、大堀を二重、三重に構えた若江城に、四・五千の軍勢が楯籠り両畠山の合戦が展開された様子がわかる。発掘された濠（大溝）は、これらの記録に現われた大堀と考えられ、若江城を二重、三重にとり巻いていたのではないかと考えられる。

福智院文書「明応二年御陣図」^⑦では、天王寺、河内十七箇所、平（枚）岡と並んで「若井」の陣の地名を見ることができる。この地図は、明応二年（1493）の足利義植の河内出陣に関する

るものと考えられ、「將軍義植河内ノ軍明応二年御陣ノ図・尋尊僧正筆^⑧」の別紙がついていた。尋尊筆とは断定できないが、明応二年の河内出陣頃に大和・河内方面の地理に明るいものが描いたとされる。この地図の「若井」は位置関係から見て若江と考えられ、キリスト教宣教師の書翰^⑨にも若江のことを「ワカイ」と記したものがあり、当時若江はワカイとも呼ばれていたらしい。

この地図で他に注目すべきことは高屋城^⑩が記されており、河内の畠山氏の本拠はこの頃は高屋城にあったことがわかる。

それ以降、若江について『細川両家記』永禄三年（1560）七月三日条に次の様にある。

諸勢河内へ入、爰に玉櫛と云所に畠山方衆楯籠込入、首卅計討捕、則若井と云所に四國衆陣取也、同七日に太田若林と云處に四國衆陣替候也、

このように三好等の四國衆が若井すなわち若江に陣を取った旨が記されており、同様の記事は『足利季世記』^⑪・『続応仁後記』^⑫にも見られる。

永禄十一年（1568）畿内平定を果たした織田信長は、河内は高屋城主畠山高政、若江城主三好義継をそれぞれ半国守護とした。

永禄十二年（1569）一月五日、信長帰国の間隙をぬって三好三人衆^⑬が京都六条本国寺の足利義昭を攻撃したが、三好義継は本国寺の援軍として参戦している。『足利季世記』は次の様に記している。

三好三人衆其勢一万餘人、永禄十二己巳正月二日堺ヲ打立、河内ノ出口中堀ト云フ處ニ陣取、三日ハ山城ノミヅト云處ニ陣取、四日ハ東福寺ニ陣取、五日ニ本国寺へ取カ、ル、（中略）三好左京大夫義次^{（継）}是ヲ聞テ、正月五日ニ若江ノ城ヨリ打立テ、本国寺ノ後詰ノ爲ニ出張ス、

本国寺の後詰のために出張した三好義継は若江城より発向しており、義継の本拠が若江城であったことを示している。この戦は、結局、三好三好三人衆方が撃退された。

元亀元年（1570）八月、三好三人衆方との戦が再び河内で行なわれている。『足利季世記』元亀元年八月十三日条によれば次の様にある。

池田・伊丹家ハ敵ノ首ドモ少々打取、池田同名衆ヲ追チラシテ引返シケリ、又河州右橋ノ城ニ畠山衆・三好左京大夫（義継）衆三百人楯籠ル、是ハ若江城・高屋城ヨリ人数ヲ分テコメ置タリ、四國勢野田福島ヨリ打テ出テ被責ル、終日ノ軍ニ、右橋城衆打負、二百餘人打死ナリ、

これによれば、三好三人衆方との戦に、高屋城の畠山高政軍と共に若江城の三好義継軍が動員され、河内右橋城^⑭に楯籠ったことがわかる。

この年の十月に至っても三好三人衆方との戦が続行する。『信長公記』^⑮によれば、

南方三好三人衆の事、野田・福島の普請を攻め、諸牢人河内・摂津国端々へ打廻を致すといへども、高屋に畠山殿、若江に三好左京大夫（義継）、片野に安見右近、伊丹・塩河・茨木・高槻何れも城々堅固に相抱へ、其上五畿内の衆塞々に陣取候の間、京口への行中々及なき儀に候、

とあり、三好義継が若江城を守備していることがわかる。『信長公記』元龜三年（1572）三月条にも「三好左京大夫（義継）殿は若江に楯籠り、松永弾正は大和の内信貴の城⑯に在城なり。息右衛門佐は奈良の多聞⑰に居城なり」とある。

天正元年（1573）七月十八日、足利義昭は織田信長との槇島城⑱の戦に敗れ、この若江城に逃げのびて来た。『信長公記』は次の様に記している。

七月十八日巳刻、両口一度に其手々々を争ひ、中嶋へ西へ向って曠と打渡され候、（中略）公方様（足利義昭）、城郭においては是に過ぎたる御構これなしと思食され、御動座候といへども、今は、詮なく御手前の御一戦に取結び候、今度させる御不足も御座なきの処、程なく御恩を忘れられ、御敵なされ候の間、爰にて御腹めさせ候はんずれ共、天命おそろしく御行衛思食儘にあるべからず。御命を助け流しまいらせられ候て、先々にて人の褒貶にのせ申さるべき由候て、若公様をば止め置かれ、怨をば恩を以て報ぜらるゝの由候て、河内國若江の城迄羽柴筑前守秀吉御警固にて送り届けらる

槇島城で敗れた足利義昭は、羽柴秀吉の警固で若江城まで落ちのび、この後堺を経て、紀州に渡った。

若江城の三好義継は、足利義昭方についたため信長の攻撃を受け、同天正元年十一月四日、若江城に自害した。同じく『信長公記』によれば、

三好左京大夫（義継）殿非儀を相構へらるるに依って、家老の衆多羅尾右近・池田丹後守・野間佐吉・両三人別心を企て、金山駿河万端一人の覚悟に任せ候の間、金山駿河を生害させ、佐久間右衛門を引入れ、天主の下迄攻む、逃候処叶ひ難く思食し、御女房衆・御息様皆さし殺し切て出、余多の者に手を負せ、其後左京大夫殿腹十文字に切、比類なき御働き、哀なる有様なり。御相伴人数那須久右衛門、岡飛（舞）弾守・江川・右三人追腹仕り、名誉の次第此節なり、若江の城両三人御忠節に付いてあづけ置かれ、十二月二日、信長公岐阜に至って御帰城なり。

三好義継は信長より河内半国を与えられて若江城に居城したが、元龜三年（1572）頃よりは足利義昭方に呼応していた。このため、義昭は三好義継を頼ったのであったが、天正元年（1573）

十一月に至り、家臣の多羅尾綱知や池田教正の反逆により、信長方に敗れた。彼等は義継の老臣金山駿河を殺して信長方の佐久間信盛軍を導き入れたため、若江城天主閣は包囲された。三好義継は免れ難きを察し、妻子等を殺して、自身は最後の戦をしたあと、切腹して自殺した。義継の後を追って家臣達も追腹を切り、ここに三好義継軍は敗れた。三好長慶以来、河内に在城して来た三好家は信長の前に滅亡させられるに至った。

三好義継敗死後の若江城は、織田信長より、三好義継の家臣であった池田丹後守教正・野間左吉兵衛尉康久・多羅尾常陸介綱知の三名に預け置かれた。彼等三人は「若江三人衆」と呼ばれた。『立入文書』¹⁹に次の史料がある。

一、禁裏御科所

河内國牧郷之内養父河原

令寄進之状

天正六年八月吉日 三好山城守康慶 判

禁裏様御倉立入左京進殿

武家之御書出 二通

一通者 津田主水佐重兼

一通者 若江三人衆 池田丹後守教正 判

野間左吉兵衛康久 判

多羅尾常陸介綱知 判

右二通証文糞食損候へ共御皆地山科ニ而相渡候、

これは、河内国牧郷内養父河原を禁裏御科所として三好山城守康慶が寄進をした記録であり、寄進の旨を伝えた書状の一通に「若江三人衆」三名の書判があったことを示すものである。そして『立入文書』の中に、この「若江三人衆連署寄進状」の写が存在する。

河内國牧郷之内養父河原 叡慮永代進上川嶋屋敷事

一、敷地傍示者堀土居共以東西三町四方事、

一、草之儀者隣郷八交可苜事、

一、公物以下令難洩者、雖為居可入催促事、

右之条々令致進上之状如件、

天正六年八月十日 池田丹後守教正 判

野間左吉兵衛尉康久 判

多羅尾常陸介綱知 判

このように、三好義継討死後は、若江城はこの「若江三人衆」の居城となり、河内国内の御

料所寄進にも関連していた。

天正三年（1575）四月に織田信長は若江城に陣を置いた。『信長公記』によると、

四月六日、信長京都より直に南方へ御馬を出だされ、其日八幡に御陣を懸けられ、次日若江に至って御陣取、大坂より若江へ差向ひ候、付城かいほり（八尾市萱振）へは御手遣もなく、直に奥へ御通りなされ。

とある。これは三好笑岩康長との戦のためと考えられ、四月十九日には河内高屋城が落城し、三好笑岩康長は降参した。

天正四年（1576）四月になると、本願寺顕如が義昭に通じて石山本願寺に拠り、本格的な石山合戦が始まった。この時、摂津天王寺城には、佐久間信盛が置かれ、河内の若江城や三箇城^②は佐久間信盛の指揮統利下に入れられた。五月五日、信盛はまず若江城に着陣した。『信長公記』は次の様に記す。

今日信長は自身被出於馬了、佐久間右衛門（信盛）先陣ニテ巳剋に河州若江へ着陣了、信長ハ午剋ニ八幡を通り了ト定而頓而可有退散歟

この後も若江城は石山本願寺攻撃の拠点となっており、『信長公記』によると、信長がたびたび入城している。

天正四年六月六日、御馬を納れられ、其日若江御泊、次日真木嶋へ御立寄り、

天正五年二月十五日、信長公八幡より若江迄御着陣、

天正五年三月二十三日、若江迄御帰陣、

この石山合戦の間も、若江城の城主は「若江三人衆」であり、その筆頭は池田丹後守教正であり、彼は又、熱心なキリシタンでもあった。キリスト教宣教師の記録には、しばしば彼の名と若江城が登場する。ルイス＝フロイスの『日本史』^②によると、

オルガンティーノ師は河内の国をしばしば訪れた。第一は岡山、（中略）第二は三箇、（中略）第三の（場所）は三箇から二里半ないし、三里距った若江と称せられるところである。そこには飯盛城で最初に（キリシタンに）なった人々のうち多くの貴人たちが住んでいた。彼らは（元来）河内の国主、三好殿の家臣であった。（しかるに）信長は、この三好（殿）を殺害せしめたので、池田丹後シメアン殿がこれらの家臣たちの頭になった。（彼）はその（若江）にも、立派な司祭館を付した教会を建設した。

とあり、飯盛城²²でキリシタンとなった池田丹後シメアン即ち池田教正が、「若江三人衆」の筆頭として在城し、彼は若江に、「立派な司祭館を付した教会」を建設したことがわかる。この教会については、1577年9月19日＝天正五年八月八日付白杵発パードレ＝ルイスフロイスの書翰²³に次の文がある。

第四はシメアン池田丹後殿と称し河内國の若江といふ大なる城の部将たる高貴なる武士なり。同所には昨年好き会堂を建築せり。同城には彼の外に異教の武士数人守備に當り、中一人は特にキリシタンの大敵なりしが故に、彼は其の欲する所を悉く実行することを得ず、

これによって、教会が建造されたのは天正四年（1567）ではないかと推定される。この教会跡は後に大白（ダイウス＝キリスト教の神ゼウス）という地名で呼ばれた若江の集落内の地ではないかと考えられる。

天正五年（1577）には、一時石山本願寺の一揆が三箇城を囲むという事件がおこっているが、1578年1月14日＝天正五年十二月七日の都発パードレ・ジョアン＝フランシスコの書翰²⁴は、この戦について次の如く記している。

シメアン丹後殿之を聞き、三箇のキリシタンを救はん為め、居城若江を出で、三百の兵を率いて同所に赴き敵の来るべき通路に二百人を置き彼は百人を率いて三箇に留りたり。

一向一揆の三箇城攻撃に対し、池田丹後守教正が、若江城より三百人の兵を率いて進発したことがわかる。

若江の教会には、キリスト教宣教師が訪れ、その会堂では洗礼が行なわれた。

1577年（天正五年）パードレ・オルガンチノが都より発せし書翰²⁵予は（八月）十五日、若江に赴きしが、到着するや彼少女は十歳の一僕の常に会堂に同行する者を連れ来りて、異教徒が彼女に仕ふることを欲せず、又其家に居ることをも欲せざるが故に予が直に之に洗礼を授けんことを求めたり。

1578年4月7日＝天正六年三月一日附、都発パードレ・ジョアン＝フランシスコの書翰²⁶若江城の守将なる池田丹後殿は信長より新に収入を与えられ、之を以て大に貧者を救恤せり。パードレ・オルガンチノは同所にて多数の家臣を有する武士約四十人に洗礼を授けたり。

天正五年（1577）八月や天正六年（1578）三月に宣教師オルガンチノによって少女や武士達が洗礼を受けたことがわかる。この他にも多数の武士や庶民が若江の教会堂に出入していたことが想像される。

天正六年（1578）九月二十八日、織田信長は九鬼嘉隆に命じて造らせた軍艦を見るため堺に向かった。『信長公記』によると、

九鬼右馬允大船御覧なさるべきため、京都より八幡迄御下り、翌日廿八日若江御泊、

とあり、信長がその途上に若江城に一泊したことがわかる。この軍艦は、この年十一月六日には木津川口において毛利氏の西国船六百余艘を破り、本願寺と毛利氏の海上連絡を絶つことに成功した。このように石山本願寺は次第に信長の包囲網に敗れ、ついに天正八年（1580）閏三月二日には信長と本願寺顕如との和議が整えられていった。『信長公記』には、先の天正六年（1578）九月二十八日より後には、若江城の名は登場しなくなってしまう。石山合戦終了と共に若江城はその役割を終了したのではないかと考えられるが、それについては、章を改めて検討することにする。

(3)、築城年代

若江城の築城について『中河内郡誌』²⁷は「當城は足利の初世本州の守護畠山義深、家臣遊佐某を守護代となし此地に築きて居らしめ、尋で畠山義就同政長の家督を争ふに及び、屢々戦乱の中心とはなれり。」と記しており、守護畠山義深の時代に築城されたと記している。

この『中河内郡誌』の典拠となったのは、享保二十年（1735）関祖衡によって編纂された『河内志』と考えられ、それには若江城について次の様に記している。

初畠山義深使家臣遊佐爲守護代據此、寛正以来政長義就更互居此、永禄末年至天正初左京大夫三好義繼據此、

すなわち畠山義深がその家臣遊佐氏を守護代としてここに置いたのが、若江城の始まりとするものである。これに関する史料は現在の所不詳である。

ところで畠山義深は、『後鑑』²⁸によれば次の様に記されている。

康暦元年正月十二日庚辰 畠山尾張守義深入道卒。

常樂記云 畠山尾張入道他界（四十九歳）

畠山系圖云 義深。尾張守家國次子。三郎。尾張守。能登。越中。加賀。紀伊等守護。康暦元年正月十二日逝去。號増福寺殿。

これには、畠山義深が若江城を築城したことは記されていないが、先の『河内志』の記述が真実であれば、若江城は畠山氏の守護代の居城として、義深の亡くなる康暦元年（1379）までには築城されていたことになる。

若江城の築城年代に関する史料は残念ながらこれ以上現時点では不詳である。文献の面から

の研究と共に、発掘調査結果、特に土器や瓦器の編年等からの究明が今後望まれる所である。

(4)、廃城年代

天正八年（1580）閏三月五日、織田信長と本願寺顕如との和議が成立した。ここに長かった石山本願寺をめぐる攻防戦はひとまず終止符を打った。若江城は、この頃まで、信長方の本願寺攻撃の拠点として利用されていた。数回にわたり信長が若江城に在陣した。『信長公記』によると、天正六年（1578）九月二十八日に信長が若江城に在陣したのを最後に、若江城の名を見ることができない。

その後の若江城については、『日本耶蘇会年報』1981年4月14日都発ルイス＝フロイス書翰に注目すべき記事がある。この年、折から上洛の途にあった巡察使ヴァリニアーニが、八尾を通り、更に若江を通して三箇、岡山に向った。一行に加わっていたフロイスは次の様に記している。

池田丹後守（教正）殿が今居る八尾の附近に着いて壮嚴なる歓迎宴が開かれた。彼は先ず部下のキリシタン多数を道に出し置き、枝と薔薇を手を持ちビジタドール（巡察使）のパードレが枝の日曜日（1581年3月19日＝天正九年二月十五日）に同所に着くや、之を地上に投じ、我等は其上を通った。少し進んで野に席を敷き屏風を廻らし、池田丹後夫人並びに其の子が岡山の貴婦人等と共に我等を歓迎し、沢山の食物を以て饗応した。これはシメアン（池田丹後守）のみでなく、他の多数のキリシタンが盛に準備したものであった。次に更に進んで、若江の中央を通ったが此所には今城も何もなく、唯多数の住民の居る町のみがあった。池田丹後殿とその部下は遠くまで見送ったが、河の処に着いた時、我等が大に努力して此上見送らぬようにした。

フロイスの一行が若江を通過したのは、時に天正九年（1581）二月十五日であった。この若江には今、城もなく、ただ多数の住民の居る若江の町のみがあったという。そして若江三人衆の一人であった池田丹後守教正は八尾に城館を構えていた。すなわち、天正六年（1578）から、天正九年（1581）の期間に若江城が廃城されて、池田教正が若江から八尾にその城館を移したと考えられる。

今井宗及の茶会記である『宗及自会記』²⁹によると、天正六年（1578）九月三十日、今井宗及のもとで織田信長が武將と共に茶会を催しているが、御供衆の中に「若江三人」の名を見ることが出来る。若江三人とは若江城に在城した、池田丹後守教正・多羅尾常陸介綱知・野間左吉兵衛尉康久の三人であって、若江三人と呼ばれていることから、若江城はまだ存在していたと考えられる。

また『宗及他會記』³⁰によると、天正八年（1580）五月二十一日、二十二日、若江にて茶会が催されている。

^(天正八年)
同五月廿一日晩 若江にて、多羅尾玄蕃會

佐久甚九 宗及 なや宗偶 後ニ宗二

一、定張、 五徳二、 手桶 カウライ茶碗

同五月廿二日朝 野間左吉會

甚九郎殿 宗及 宗偶 宗及 後ニ池田丹後被出候、

一、床 つはめの繪、始ヨリカケテ、

(中略)

同日巳之刻ニ池田丹後(教正)興行にて能有、

十二番能アリ、かかりまで、

五月二十一日、二十二日と両日にわたり若江で茶会が催され、多羅尾玄蕃(多羅尾綱知の一族)野間左吉兵衛尉康久、池田丹後守教正の若江三人衆が参加をしているので、おそらくこの茶会や演能は若江城中で行なわれたものと推定できる。

ところが、『宗及他会記』によると、天正八年(1580)十二月十六日と、翌天正九年十一月十日の茶会は次の様に記されている。

^(天正八年)
同十二月十六日晩 池田丹後(教正)會八尾にて、惣壽房 ^(三好)三孫九郎 宗及

^(天正九年)
同十一月十日朝 池田丹後(教正)會八尾ニ而、宗訥 宗叱 宗及

(中略)

同晝、丹州(池田丹後守)にて能アリ、十一番

(中略)

^(天正九年)
同十一月十一日朝 野間左吉會 宗訥 宗叱 宗及

すなわち、天正八年十二月十六日、天正九年十一月十日の池田教正のもとの茶会は何れも八尾でおこなわれており、しかも天正九年十一月十日の池田丹後会の翌日には野間左吉會が催されていることから、彼等が八尾に在城していたことが推定できる。

従って若江城で今井宗及の茶会がもたれた最終が天正八年(1580)五月二十二日であり、八尾城に移ってから池田丹後守教正等が今井宗及と茶会をもった最初の史料が天正八年(1580)十二月十六日である。よって若江城が廃城されたのは、天正八年(1580)の五月から十二月の間と推定できる。

天正八年(1580)閏三月五日には織田信長と本願寺顕如との講和が成立したが、本願寺教如がまだ不隠な動向を示しており、結局、教如も退却して石山戦争が完全に落ち着いたのは八月二日であった。石山本願寺との合戦にその拠点とされた若江城は、合戦の終了と共にその要害としての役割を終え、八尾城に統一されたのではないかと考察できる。八尾に移った池田丹後守教正等は、八尾城にて、天正九年(1581)二月十五日、巡察使ヴァリニャーニヤルイス=フロ

イスの一行を迎えたのであった。

以上の考察により、若江城は石山合戦の終了と共にその役割を終え、池田丹後守教正が八尾に移されたのを機に、天正八年（1580）八月二日以降、十二月十六日以前の間に廃城され、構築物のほとんどが八尾城に移建されたのではないかと推測できる。

(5)、河内国中世城郭史における若江城の意義

若江城の関連史料は、まず寛正元年（1460）～文明九年（1477）に多く見られたが、これは畠山持国の跡を畠山政長と畠山義就が抗争したいわゆる両畠山の抗争期とそれが一大原因となった応仁・文明の乱期である。この時期の河内の城館としては若江城・誉田城・嶽山城が注目される。畠山政長と義就は河内の守護職を争奪しあうのにまず若江城・誉田城を争奪しあっており、義就方の逃亡拠点として嶽山城があるが、この三城を獲得することが河内の支配権を意味している。京都から河内に入国する時はいずれも若江城がその拠点となっており、若江城は河内の守護所としての役割をも果していたのではないかと考えられる。

明応二年（1493）以降、高屋城が史料に多くあらわれるが、河内の国の両畠山はこれ以降、高屋城と誉田城に居城して、対立抗争をくりかえすことになる。畠山政長の没後は畠山尚順ついで植長がその跡を継ぎ、一方畠山義就の没後は畠山義豊、義英・義宣がその跡を順次継いでゆき、両畠山の抗争が続いていった。

両畠山の抗争は天文年間（1532～1555）まで続き、畠山高政の時代によりやく平定された。天文十年（1541）になると、畠山高政の高屋城に対して、飯盛城には畠山在氏が入り、高屋城と飯盛城による河内の半国守護体制が敷かれる。

天文十七年（1548）細川晴元に離反した三好長慶は、翌年入京し、以後飯盛城に居館をかまえた。三好長慶によって飯盛城を本拠とする畿内・近国の支配体制がとられた結果、高屋城や若江城はその支城としての役割を果たすことになった。

永禄七年（1565）三好長慶没後、三好義継は松永久秀に推されて信貴城に入ったが、永禄十一年（1568）以降若江城に入った。織田信長は、若江城に三好義継、高屋城に畠山高政を置いて河内の支配拠点とした。その結果、若江城は飯盛城にかわる河内半国支配体制の本拠となった。これ以降、若江城は石山本願寺攻撃の信長方の拠点となり、石山戦争中たびたび信長がその陣を構えている。天正八年（1580）の石山本願寺開城後は、若江城は石山攻撃の拠点としての役割を終え、城主池田教正等が八尾に本拠を移したため、廃城となり、歴史から姿を消すこととなった。

中世を通じて若江城は河内国支配の拠点であった。特に室町～戦国期においては、河内の北半分の拠点が若江城、飯盛城であり、南半分の拠点が高屋城・誉田城・嶽山城であった。若江城は平地の河川に囲まれた小台地に位置し、城郭の構造では平城に属するもので、古代より若江寺や若江郡衛の置かれた河内の重要拠点に築かれた城郭であった。

註

- ① 『群書類従』第二十輯合戦部所収。
- ② 富田林市嶽山。
- ③ 『群書類従』第二十輯合戦部所収。
- ④ 羽曳野市誉田。
- ⑤ 東大阪市六万寺町・上六万寺町往生院。
- ⑥ 東大阪市客坊町。
- ⑦ 『福智院文書』（花園大学刊）所収。
- ⑧ 興福寺別当大乘院尋尊、関白一条兼良息、1430—1508。
- ⑨ 『耶蘇会士日本通信』。
- ⑩ 羽曳野市古市安閑天皇皇后陵付近。
- ⑪ 国史大系本『後鑑』所載。
- ⑫ 国史大系本『後鑑』所載。
- ⑬ 三好長慶の部将、三好日向守長逸・岩成主税助友通・三好下野守政康の三人をいう。
- ⑭ 所在地不明。古橋城（門真市）とも考えられる。
- ⑮ 太田牛一著『信長公記』（角川書店刊）。
- ⑯ 信貴山城（奈良県生駒郡）。
- ⑰ 多聞山城（奈良市）。
- ⑱ 宇治市槇島町。
- ⑲ 『立入宗継文書』所収。
- ⑳ 大東市三箇。
- ㉑ 松田毅一・川崎桃太訳『フロイス日本史』（中央公論社刊）。
- ㉒ 四条畷市飯盛山。
- ㉓ 『耶蘇会士日本通信』所収。
- ㉔ 『耶蘇会士日本通信』所収。
- ㉕ 『耶蘇会士日本通信』所収。
- ㉖ 『耶蘇会士日本通信』所収。
- ㉗ 『中河内郡誌』（中河内郡役所編、大正12年1月刊）。
- ㉘ 国史大系『後鑑』。
- ㉙ 『茶道古典全集』所収。
- ㉚ 『茶道古典全集』所収。

表6 若江城関連年表

年 代	月 日	事 項
康暦1 (1379)	1月12日	河内守護畠山尾張守義深没。『河内志』によればこの年以前に畠山義深の河内守護代遊佐某によって若江城が築城される。
寛正1 (1460)	閏9月16日	若江城に在城した畠山義就と大和に入国した畠山政長の間合戦がはじまる。
寛正1 (1460)	10月15日	畠山義就方をやぶった畠山政長が若江城に入城する。
寛正4 (1463)	4月15日	越智家栄が若江城の後詰として大和より発向し、畠山義就の嶽山城が落城する。
寛正4 (1463)	12月24日	畠山政長が上洛のため若江城に入城する。
文正1 (1466)	8月5日	畠山義就攻撃のため、畠山政長の臣遊佐長直が若江城に入城する。
文正1 (1466)	9月17日	畠山義就が若江城の遊佐長直をやぶり入城する。
文明2 (1470)	8月5日	畠山政長方の若江城、誉田城が西軍越智氏等の攻撃を受ける。
文明9 (1477)	9月27日	畠山政長方の若江城、誉田城、往生院城、客坊城等が畠山義就方の攻撃を受ける。
文明9 (1477)	10月9日	畠山政長方の若江城が畠山義就の攻撃を受け、遊佐長直が没落する。
明応2 (1493)	2月	將軍足利義植が河内に出陣した時の福智院文書『明応二年御陣図』に「若井」の地名がみえる。
永禄3 (1560)	7月3日	三好等の四国衆が「若井」に陣をとる。
永禄11 (1568)	10月	織田信長が畿内を平定し、若江城主三好義継を河内半国守護とする。
永禄12 (1569)	1月5日	三好三人衆が京都六条本国寺の足利義昭を攻撃したため、若江城主三好義継が発向する。
元亀1 (1570)	8月3日	三好三人衆が河内を攻撃したため、若江城主三好義継が発向する。
元亀1 (1570)	10月	三好三人衆の河内攻撃に備え、若江城主三好義継らが城に楯籠る。
元亀3 (1572)	3月	三好義継が若江城に松永久秀が信貴山城に楯籠る。
天正1 (1573)	7月18日	榎島城の足利義昭が織田信長との合戦にやぶれ、三好義継の若江城にのがれる。
天正1 (1573)	11月4日	織田信長方の攻撃を受けた若江城は、池田教正等の反逆により落城し、三好義継は自害する。 若江城は池田教正・野間康久・多羅尾綱知の若江三人衆が居城する。
天正3 (1575)	4月6日	織田信長が三好康長攻撃のため若江城に陣をとる。

年 代	月 日	事 項
天正 4 (1576)	5 月 5 日	織田信長の臣佐久間信盛が石山本願寺攻撃のため、若江城に陣をとる。
天正 4 (1576)	6 月 6 日	織田信長が石山本願寺方攻撃のため若江城に陣をとる。
天正 4 (1576)		この年、若江城下にキリスト教教会堂が建設される。
天正 5 (1577)	2 月15日	織田信長が石山本願寺方攻撃のため若江城に陣をとる。
天正 5 (1577)	3 月23日	織田信長が石山本願寺方の攻撃のため若江城に陣をとる。
天正 5 (1577)	8 月15日	宣教師オルガンチノが若江の教会堂に乙少女の洗礼をする。
天正 5 (1577)		この年、一向一揆の三箇城攻撃に対し、若江城の池田教正が発行する。
天正 5 (1577)		この年、宣教師オルガンチノが若江にて武士40人余の洗礼をする。
天正 6 (1578)	9 月28日	織田信長が九鬼嘉隆に建造させた軍艦見物のため若江城に泊する。
天正 6 (1578)	9 月30日	今井宗及のもとで織田信長の茶会が催され、若江三人衆が出席する。
天正 8 (1580)	5 月21日	若江で今井宗及・若江三人衆が出席して茶会が催される。
天正 8 (1580)	12月16日	八尾で今井宗及・池田教正が出席して茶会が催される。 この月までに若江城が廃城され、若江三人衆が八尾城に移住したと推定できる。
天正 9 (1581)	2 月15日	宣教師ヴァニアーニ、ルイス・フロイス等が八尾城の池田教正を訪れ、帰路若江を通過するが「此所には今城も何もなく、唯多数の住民の居る町のみがあった」と記している。
天正 9 (1581)	11月10日	八尾で今井宗及・池田教正が出席して茶会が催される。
天正 9 (1581)	11月11日	八尾で今井宗及・野間康久が出席して茶会が催される。

2. 考古学から見た若江城

(1) はじめに

若江城は、室町時代から安土・桃山時代の文献資料に数多く登場し、応仁の乱あるいは、織田信長による石山本願寺攻めの拠点として使われていた有名な城郭である。1393年、畠山基国が河内の守護職に任ぜられ、河内支配の拠点として築城されて以来、1581年まで存続した城郭である。しかし、今日まで城郭の規模、構造などは不明なまま至っている。わずかに現在の字名、自然地形などで、城郭の位置が推定されているにすぎない。この若江城に考古学のメスを入れたのは昭和47年、若江小学校校舎増築工事に伴う発掘調査を実施した時である。以来、昭和54年に至るまでほぼ毎年発掘調査を実施し、除々にではあるが、若江城の実態を解明しつつある。そこで本稿では、従来の発掘調査および、今回の発掘調査の成果を踏まえて、遺構を中心として若江城の復元をこころみたい。

(2) 若江城関連遺構

若江城の存続期間は、文献の上では1390年代（明德年間）から1581年（天正9年）までの約190年間である。現在までに15世紀、16世紀に属する遺構は数多く検出しているが遺構の性格として、若江城を構成する遺構はごく少量である。ここでは確実に15世紀、16世紀代に属する遺構のみを取り上げ検討を加えたい。

礎石建物（第78図）

昭和49年の調査で検出した。1間×3間以上の礎石建物で、根石のみ検出している。時期は、16世紀後半で、若江城の建物を構成する一部であると考えられている^①。

埴列

昭和49年の調査で検出した。幅30cm、深さ35cmを測る溝状遺構の南壁に埴が4枚並べられていた。時期は明確ではないが、16世紀後半であると考えられる^②。

溝1

検出幅3.96m、深さ1.2mを測り、東西に走る大溝である。溝の章でも述べたように、位置、規模、土層の堆積状況からみて若江城の堀の一部であろうと考えられる。

溝23

幅10.34m、深さ70cmを測り、南北方向に走る大溝である。溝の廃絶は17世紀初頭があるが、開削年代は16世紀までさかのぼると思われる。土層の堆積状況を見ると、ほとんどが粘土質で、常に水が溜っていた状況がうかがえる。位置的には、城の中心部よりやや西側になるが、やはり若江城の防御施設の一部と考えられる。

溝42

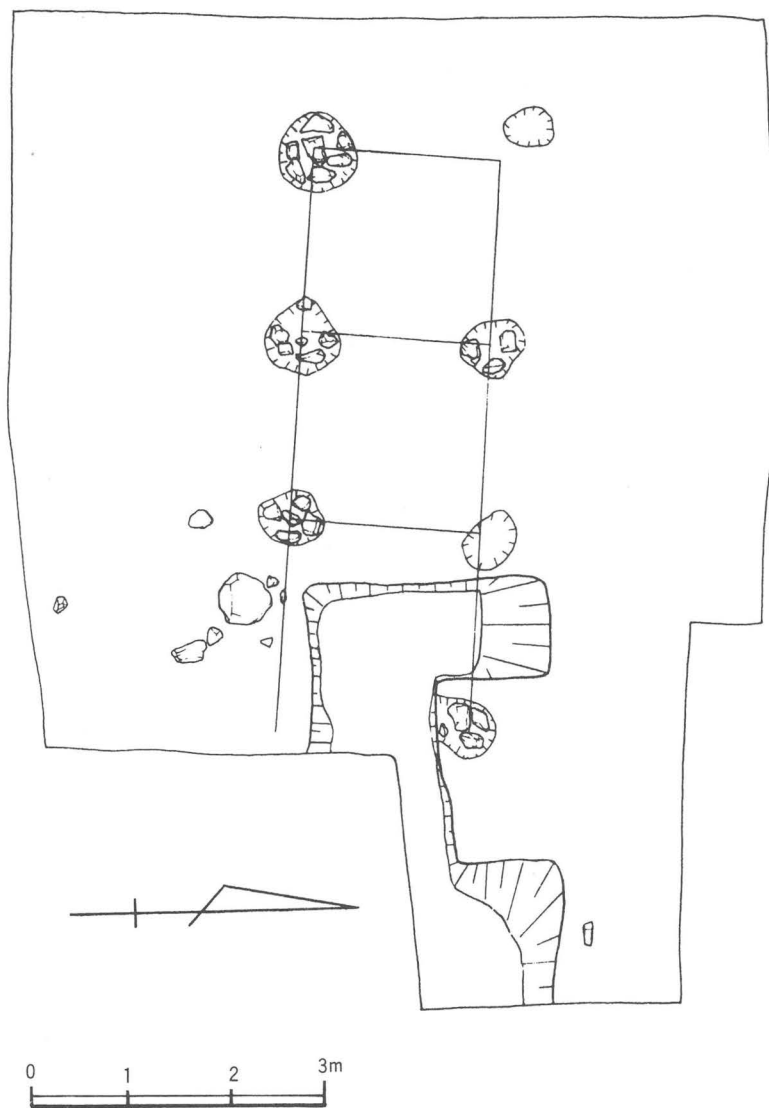
検出幅3.4m、深さ1.34mを測り、南北方向に走る大溝である。溝の廃絶は16世紀後半であり、位置的には溝23よりさらに西側にある。やはりこの溝も時期、規模、土層の堆積状況からみて若江城の防御施設の一部であろうと考えられる。

井戸群、溝群、土塋群

15世紀から16世紀代に属する井戸は14基、溝10条、土塋6基である。これらの遺構は、若江城の中心部より西側にすべて集中している。言うなれば、井戸、溝などは生活に密着した遺構である。城の中心部にこのような遺構が現在まで検出されていないことからみれば、城内生活に必要な不可欠な遺構が、この西側地区に集中していると解釈するべきであろう。

整地層

23A 22地区から24A 16地区で検出している。第5層の整地層は16世紀中葉から後半の時期で



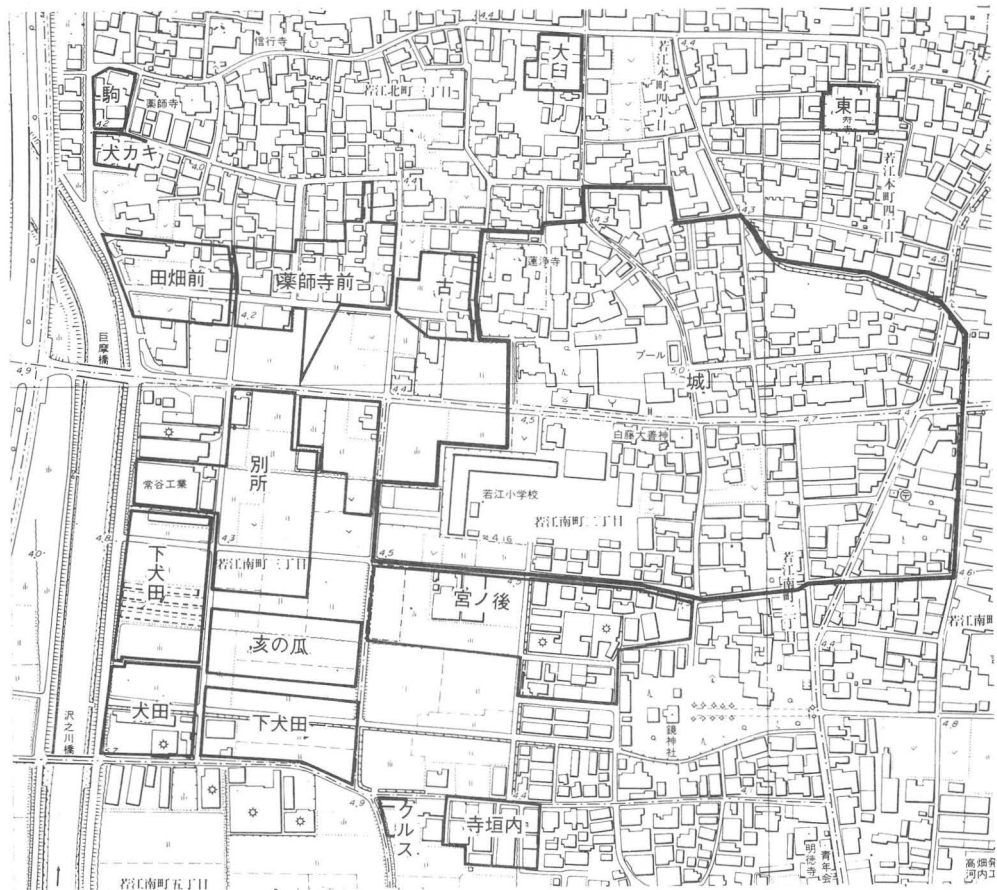
第78図 礎石建物実測図

あり、大規模な整地であるため、若江城に伴うものであろう。さらに整地層を検出している範囲が、若江遺跡内では周辺地域より1 m前後高台になっているところからも、城の中心部と考えられる。

(3) 若江城の築城および消滅時期

若江城の築城時期は、文献資料では1390年代という時期が推定されているが、現在までに検出した遺構、遺物の上ではどうであろうか。まず、整地層については、あまり広範囲に検出していないが、16世紀中葉から後半の時期のものが大部分で、14世紀代後半までさかのぼる整地層は、現在のところ検出していない。次に各遺構に関しても、12世紀から13世紀、15世紀後半から16世紀後半の時期の遺構が大半を占め、14世紀後半の遺構は、ごく少量である。これは、遺物に関しても言えることで、後述するように、土師器の編年観では、14世紀代の土師器は、あまり多くない。このように、整地層、遺構、遺物とも、14世紀後半に比定しうるものが少ない現状では、若江城の築城年代を考古学的に解明することには無理があると言えよう。

次に若江城の消滅時期に関しては、文献資料で1579年（天正6年）から1581年（天正9年）の期間に消滅していると推定している。考古学的には、整地層の時期、遺構、遺物の時期とも、16世紀中葉から後半代が比定でき、その検出量は、他の時代のものを圧している。この事実から、



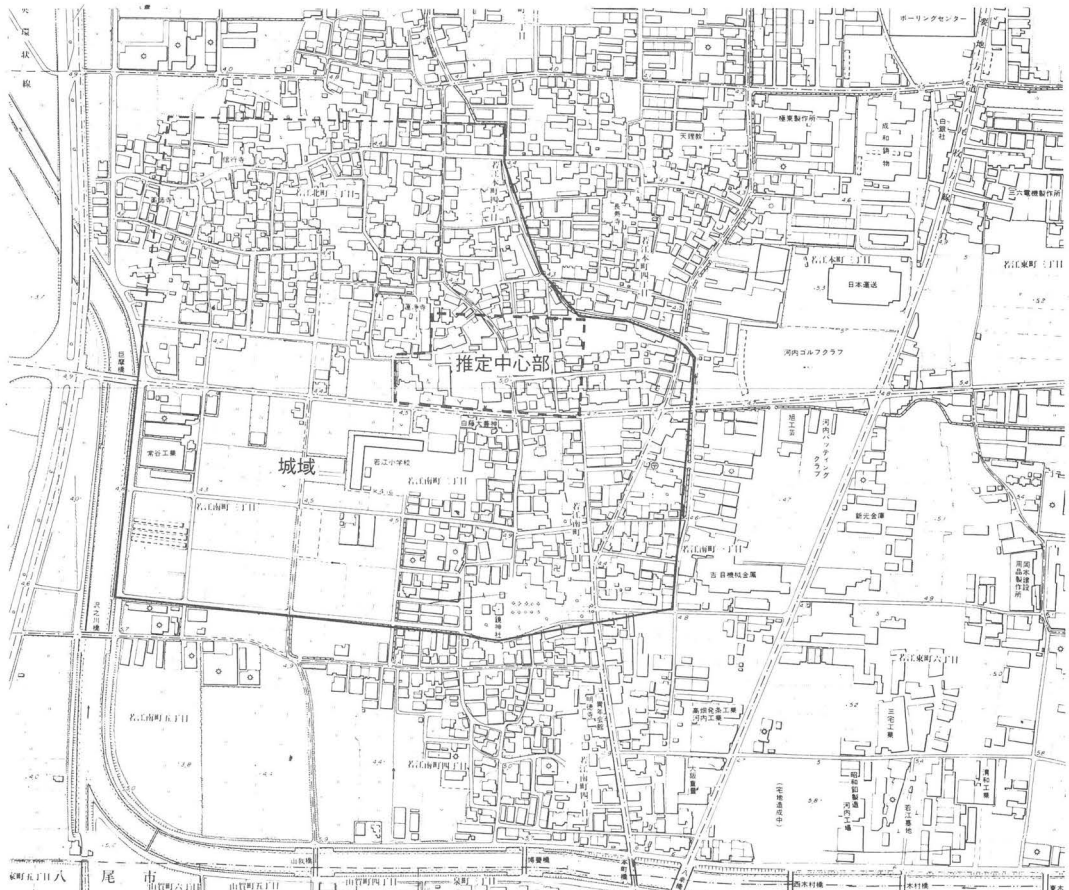
第80図 若江地区字切図(1/5,000)

細かい時期決定は今後の遺物整理の成果を待たねばならないが、現時点では文献資料の消滅年代と、遺構、遺物から推定した年代とはほぼ合致しているといえよう。

(4) 城郭の規模、構造

若江城は、言うまでもなく平地に立地する城郭である。室町時代の文献資料に「城の周囲は深田なり…」という記載がある。このことは、城の西側に旧楠根川、東側に美女堂川が流れており、この両河川の氾濫原であった可能性が高いと言える。遺構の分布からみれば、現在の第2寝屋川以西には、遺構および包含層は存在していない。東側は、昭和49年度の調査結果からすれば、現在の若江南公園および美女堂川付近には、明確な包含層、遺構は存在していない^③。従って、城郭の西端は、旧楠根川であり、東端は美女堂川であると考えられる。一方北端は、調査を全く実施しておらず、不明確である。わずかに字名で「大白」という地名が残っているにすぎない。南端も、不明確な要素が多いが、昭和55年の調査結果からすれば、現在の鏡神社近まで、その範囲に及ぶと考えられる^④。以上のようなことより、若江城の規模は、東西約500m、南北約400mの範囲であると考えられる。

若江城の構造に関しては、不明な点が多い。中心部は、以前にも記したように自然地形で周囲より高台になっている地域が、整地層を検出している地域とオーバーラップしていることより若江幼稚園とその東南側約50m前後の範囲であると考えられる。この中心部において、礎石



第81図 若江城域推定図(1/10,000)

建物、埴列基壇、堀を検出していることからしても、その位置は動かしがたいものである。

中心部より西側に、生活に密着した遺構、すなわち井戸、溝、土壙等を集中して検出したがこれらの遺構は、城郭内に位置し、その集中度からみても、若江城構成員の生活空間であると考えられる。

上記のように若江城の中心部とその周辺部との概念的な設定を行なったが、実際の建物群の構成および石垣などの存在については、現状ではそれに比定しうる遺構を検出していないので実態は明確にし得ない。しかしながら、建物群については、遺構内、包含層内より瓦が多量に出上する事実から、建物群は瓦葺の可能性が高いと言える。石垣については、16世紀代の同様の立地をする伊丹城^⑤、池田城^⑥などでは石垣を検出しており、城郭を築城する場合、石垣を使用するのが一般的な傾向になりつつある時期である^⑦。従って、当若江城にも16世紀代に入れば石垣を使用している可能性はあると言えよう。

(5) 若江城と中世集落との関係

若江城が、この地に築城される以前、すでに人々が生活を営んでいたことは、12世紀、13世紀代の遺構を検出していることから明らかである。集落の性格は明らかではないが、付近に若江寺、鏡神社などが存在することからみれば、あるいはその門前町を形成していたとも考えられる。1393年に河内国守護職に任ぜられた畠山基国が若江の地に城郭を築いた当初、従来よりこの地に在住していた人々が集落を形成していた訳であるが、築城と同時にこの集落は、城郭内に取り込まれた形で、そのまま存続したか、または、まったく城郭外へ集落を移動させられたかについては、上記したように、遺跡の西方に広がる15世紀、16世紀代の生活に密着した井戸、溝、土壙等の遺構の理解を、若江城構成員すなわち、城主直属の家臣団あるいは、下級武士団の生活空間であると解釈している。従って、若江城築城の際には従来より存在する集落は城郭外へ退去させられたと考えられる。しかしながら、若江遺跡周辺に、城郭存続期間と同時期の集落が確認されていないこと、若江寺、鏡神社が遺跡内の南端に位置しており、集落の中心部がこの付近に移っているという可能性も否定できないことなどにより、あるいは城郭内に町家として存続していたという可能性も考慮すべき事柄であろう。

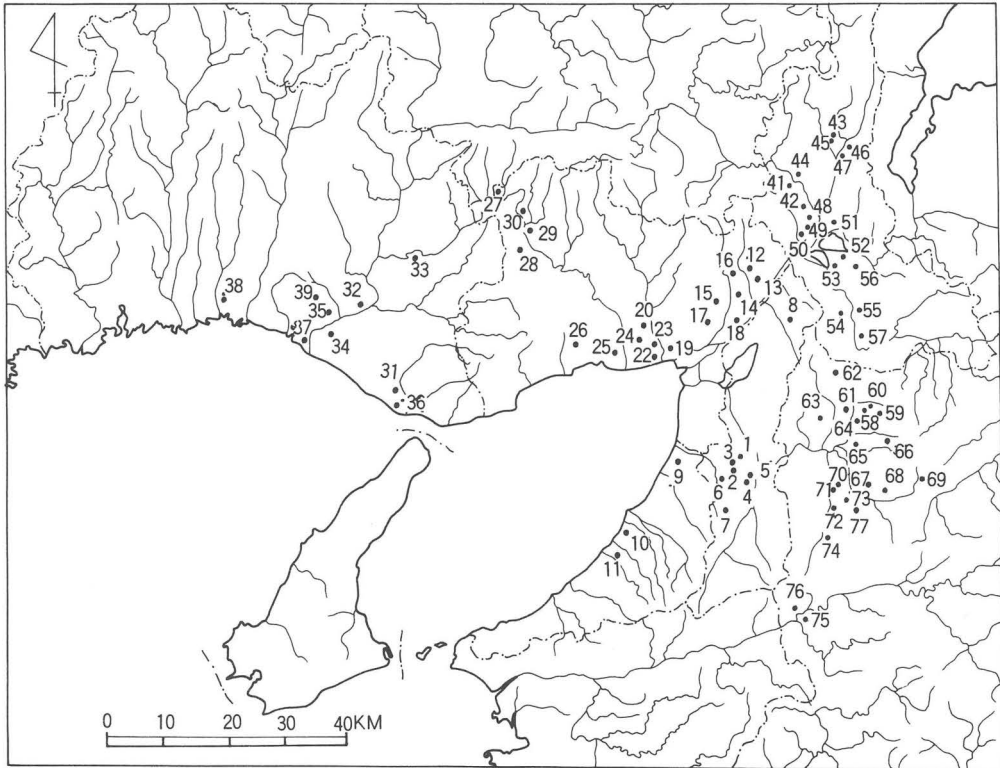
(6) おわりに

以上のように若江城の復元を遺構を中心として試みたが、調査範囲が限定されており、かつ遺跡の中心部の調査が充分に行なわれていない現状で、城郭の全体像を浮び上がらせるには根拠が希薄な部分が多い。特に建物群、石垣あるいは中世集落との関係については、不明な点が多く、これからの重要な課題の1つである。さらに、城郭関連の遺構の年代が、15世紀後半から16世紀後半の時期が大半で、14世紀後半から15世紀前半の遺構が極端に少ないという調査結果からすれば、文献資料でおさえている1390年代の築城という事例についても再度検討すべき材料であるといえよう。

表7 中世平城集成表

番号	旧国名	名称	所在地	築城年代	創建者	規模M	遺構
1	河内	八尾城	八尾市安中町・南本町	南北朝時代			堀の一部残在
2		一津屋城	松原市一津屋町			60×66	堀
3		別所城	松原市別所町			88×84	
4		河原城	羽曳野市河原城	元弘元年	河原弘成		
5		高屋城	羽曳野市古市5～7丁目	文明～明応	畠山義就	400×800	郭・土塁・水堀・空堀
6		岸寺城	南河内郡美原町大饗		和田氏	37×48	堀
7		半田城	南河内郡狭山町城				
8		交野城	交野市私部	文和元年		300×250	郭・堀・井戸
9	和泉	堺城	堺市宿院町	室町時代	大内義弘	1000×3000	堀
10		岸和田城	岸和田市岸城町	応永年間	信濃泰義	400×700	本丸・二の丸・内堀
11		積善寺城	貝塚市橋本	桃山時代	根来寺衆	東140 西170 南220 北240	
12	摂津	芥川城	高槻市芥川3丁目殿町紫町	鎌倉時代後期	芥川氏		
13		高槻城	高槻市城内町	10C末	近藤忠範	600×630	
14		善内寺城	高槻市富田町4丁目		説巖		
15		茨木城	茨木市上泉町・片桐町	15C初以前か	茨木氏か		
16		太田城	茨木市太田1丁目・城の前町	12C後半	太田頼甚		
17		三宅城	茨木市丑寅2丁目	14C前半以前か	三宅氏	580×540	
18		鳥飼砦	摂津市鳥飼下	16C中葉か			
19		棕橋城	豊中市庄本町1丁目	15C中葉か			
20		伊丹城	伊丹市伊丹・宮の前	鎌倉時代末頃		800×1700	土塁・溝・建物跡
21		棕橋城	尼崎市戸ノ内町1丁目・2丁目	応仁2年頃		200×300	
22	大物城	尼崎市大物町	戦国時代初				
23	塚口城	尼崎市塚口字辰己	天文年間		260×210	土塁・水堀・内跡	
24	富松城	尼崎市東富松町	長享元年以前	薬師寺氏か	80×100	土塁・水堀	
25	瓦林城	西宮市瓦林町	建部3年	貴心五郎・四郎義氏			
26	麁尾城	芦屋市山芦屋町	永正8年	瓦林政頼			
27	播磨	藍岡城	三田市藍本				空堀・土塁・井戸
28		稲田城	三田市下深田				
29		下井沢城	三田市下井沢				土塁・堀
30		鳥山城	三田市大本庄井草				堀跡
31		下津橋城	神戸市垂水区				土塁・堀
32		河合城	小野市新部町字構				
33		豊地城	小野市中谷町字城ノ土井			350×200	土塁・堀
34		加古川城	加古川市西本町	鎌倉時代か	糟谷有数		
35		神吉城	加古川市東神吉町神吉	南北朝時代か	神吉氏		土塁・空堀
36		船上城	明石市船上字古城	天正14年	高山右近	440×700	本丸跡・水堀・空堀
37	高砂城	高砂市高砂町東宮町	室町時代	杉岡藏人			
38	磨	英賀城	姫路市飾磨区英賀	永享年間	赤松裕尚		

番号	旧国名	名称	所在地	築城年代	創建者	規模M	遺構
39	播磨	御着城	姫路市御国野町御着	16C		500×450	堀・土塁・井戸
40		坂本城	姫路市書写西坂本字溝江	南北朝時代	赤松則村		
41	山城	革島城	京都市西京区川島玉頭町	鎌倉時代	革島氏		郭
42		小泉城	京都市右京区西院	天文年間	三好長慶		
43		聚楽第	京都市上京区一条堀川	天正14年	豊臣秀吉		
44		谷ノ城	京都市西京区松室	戦国時代	山名右馬助		
45		二条古城	京都市上京区烏丸出水	永禄12年	足利義昭	390×390	石垣・堀・犬走り
46		山科本願寺	京都市山科区西野山階町	文明10年		450×750	土塁
47		淀古城	京都市伏見区納所北城堀	室町時代	畠山政長		堀
48		物集女城	向日市物集女	室町時代	物集女氏	80×80	堀
49		開田城	長岡京市開田城ノ内	室町時代	中小路氏	80×80	土塁
50		勝竜寺城	長岡京市勝竜寺城ノ内	室町時代	畠山義就	100×600	土塁・空堀
51		檜嶋城	宇治市檜島下村	承久3年	長瀬左衛門	200×220	
52		中城	城陽市字中ノ郷	建武年間		100×100	堀
53		水主城	城陽市水主	応仁・文明	斉藤彦次郎		
54		草路城	綴喜郡田辺町草内	文明年間	遊佐兵庫		
55		多賀城	綴喜郡井手町多賀		多賀源左衛門		井戸
56		山口城	綴喜郡宇治田原町郷ノ口	天文年間	山口甚助秀康	100×60	
57		田山東ノ城・西ノ城	相楽郡南山城村田山		東城氏・西城氏		
58	大和	今市城	奈良市今市町字城ノ内	文明10年	越智家栄	250×100	水堀
59		窪之庄城	奈良市窪之庄町字里中	室町時代	窪城氏	130×82	空堀
60		宿院城	奈良市宿院町	永禄9年	松永久秀		
61		辰市城	奈良市西九条町	元亀2年	筒井順慶		
62		超昇寺城	奈良市佐紀西町字古所	室町時代	超昇寺氏	65×90	郭・空堀・土塁
63		龍田城	生駒郡斑鳩町龍田	室町時代	龍田氏	430×350	水堀
64		番条城	大和郡山市番条町字北ノ城	室町時代初	番条氏	200×710	
65		櫛本城	天理市櫛本町字奥ノ城		櫛本氏	100×100	
66		井戸城	天理市石上町古城	室町時代	井戸氏		
67		別所城	天理市別所町字里中	室町時代	菽別所氏	200×120	水堀
68		柳本城	天理市柳本町	室町時代	楊本氏		水堀
69		水涌城	山辺郡都祁村中白石字城地		窪氏	70×80	空堀・水堀・土塁
70		箸尾城	北葛城郡広陵町の場	室町時代初	箸尾為方		
71		高田城	大和高田市高田	室町時代初	高田氏	200×200	
72		万歳平城	大和高田市市場	室町時代	万歳氏	115×120	
73		十市城	橿原市十市町城垣内	室町時代	十市氏		
74		檜原平城	御所市檜原		檜原氏	100×120	水堀・郭
75	岡平城	五条市岡字城		大岡氏	93×90	郭・水堀・空堀	
76	坂合部平城	五条市表野町字城ノ越		坂合部氏		堀	
77	安房城	桜井市粟殿		戎重西阿			



第82図 中世平城分布図

註

- ① 下村晴文『東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報15 若江寺跡、若江城跡』（東大阪市教育委員会 1975年）
- ② 前掲註①
- ③ 上野利明、新田洋『若江城跡、北鳥池遺跡調査報告』（東大阪市遺跡保護調査会 1975年）
- ④ 勝田邦夫、上野利明、阿部嗣治「若江遺跡・山賀遺跡発掘調査概報」『東大阪市遺跡保護調査会発掘調査概報集1980年度』（東大阪市遺跡保護調査会 1981年）
- ⑤ 『伊丹城発掘調査報告書Ⅲ』（伊丹市教育委員会）1978年）
- ⑥ 田代克巳他『日本城郭大系第十二巻大阪・兵庫』（新人物往来社 1981年）
- ⑦ 例えば、高槻城、伊丹城、池田城、安土城などの平城あるいは平山城において石垣を使用し始めている。
- ⑧ 前掲註①

VI. 土師器皿編年試案

1. 編年上の基準

今回の調査で検出した遺物は膨大な量に達し、その種類も豊富である。土師器、須恵器、瓦器、土師器羽釜 瓦器羽釜、陶器、磁器、瓦、土製品、石製品、金属製品、古銭、動植物遺体がある。これらの遺物の中で、土師器と瓦が圧倒的多数を占める。時期的には、鎌倉時代から安土・桃山時代に属する遺物が最も多い。しかしながら、各遺構から出土する遺物は、時期幅が大きく、一括性にとぼしい。これは、若江遺跡が、弥生時代後期から安土・桃山時代まで連綿と人々が居住し、かつ、室町時代中葉に若江城築城という大規模工事を経験しており、近世以後にも、大規模な削平を受けているため、各遺構内に、他の時期の遺物が混入しやすい状況下にあったことによるものと思われる。以上のような状況下で、各遺物の編年作業をおこなうのは非常に困難であるが、今回は特に日常雑器であり、比較的变化の度合いが早いと考えられる土師器皿に限って編年を試みた。編年を組むにあたって、遺物包含層および遺構の埋土内出土のものは極力除外するようにした。各遺構内の遺物は一括性にとぼしいながらも、比較的同一時期の遺物が集中して埋没していると考えられる遺構内堆積土の出土品を基準資料として使用した。なお、編年上の基軸として、型式変化、製作手法の観察をおこない、他の伴出遺物も考慮に入れて推定した。

今回の編年案は、現在、遺物の整理途上下の作業であり、暫定的な編年案とし、詳細な形式分類等の分析、検討は、次年度報告予定である遺物編におこないたい。

2. 編年試案





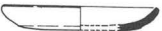






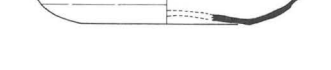
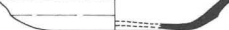

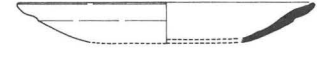
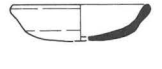
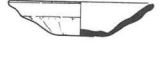
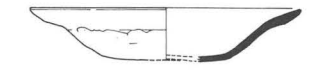






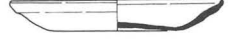
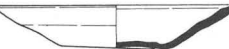



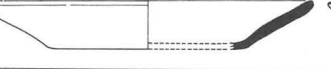
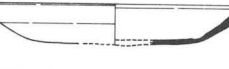
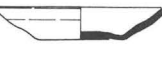
今回の編年試案は暫定的であり、型式分類の提示は、同一型式において大・中・小3つに細分したにとどめた。大皿は13cm～16cm、中皿は10cm～12cm、小皿は5cm～7cmである。

12世紀代

当遺跡においては、12世紀代の遺構は少なく、遺物もあまり豊富ではない。よって、土師器皿も、同一遺構内において、大皿・中皿・小皿のセットでは出土していない。わずかに小皿の出土例が多い。基準遺構は、溝30出土土師器で、底部から体部にかけての稜が明瞭である。体部は2回のヨコナデによって、下方は外反し、上方は内弯しながら立ち上がり、口縁端部をつまみ上げて丸くおさめている。時期の推定は、溝30より12世紀後半の瓦器碗^①が出土していること、大阪市長原遺跡S D210出土資料に類例が認められることによる。

13世紀代

この時期は、比較的遺構が多く、遺物も豊富で良好な資料が多い。基準遺構は、井戸7・井戸9・井戸25・土壇11である。全体的に口径・器高にばらつきがある。体部は、やや外上方に

時代	西曆	基準遺構	大 皿	中 皿	小 皿
平安	1100	溝30			
					
鎌倉	1200	井戸7			
		井戸9			
		井戸25			
		土城11			
南北朝	1300	溝14			
		井戸35			
室町	1400	土城16			
					
		井戸33			
町	1500	土城19			
		溝1			
安土桃山					

第83図 土師器皿編年図 (1 : 4)

開き気味に立ち上がり、口縁端部付近で直立し、端部を丸くおさめるタイプから、徐々に、体部が大きく開き、口縁端部を尖り気味にする変化が認められる。調整は、体部のヨコナデを2回おこなうのを大きな特徴としてとらえることができる。ただ小皿に関しては、後半の時期に、ヨコナデを1回にとどめているようである。これらの特徴は、大阪市長原遺跡S E 57、S E 73などの資料^②、平安京左京5条3坊15町遺跡^③などに類例を求めることができる。なお、この時期の土師器は、褐色系（Ⅱ群）のみであり、白色系（Ⅰ群）の土師器皿は、まだ出土例はない。

14世紀代

この時期は、12世紀代同様、遺構、遺物の出土例が少なく、土師器皿の実態は明確ではない。基準遺構は、溝14出土のもので、口径、器高とも、ばらつきがあり、大皿は、体部が大きく外反して立ち上がり、口縁部は、若干つまみ上げ気味にして、丸くおさめている。小皿は、器高が高くなり、体部の立ち上がりは、13世紀代のものと大差はない。調整は、大皿に2回ナデが残るが、小皿に関しては、1回ナデのみである。類例は、京都市同志社大学キャンパス内S K 210、S K 224出土資料^④、平安京内膳町遺跡S E 372出土資料^⑤に見られる。この時期より、大皿に関しては白色系が主流を占めるようになる。

15世紀代

当遺跡では、この時期より、遺構、遺物の出土量が増大する。これは、若江城がこの時期に築城されたことに起因するものである。土師器皿の出土例も多く、セットとしてとらえることができる資料が多い。基準遺構は、井戸35・土壇16などである。器高、口径とも統一化される傾向にある。体部は、大きく2段に外反し、口縁部付近で器高が厚くなり、端部は尖り気味におさめる。調整は、内面1回ナデ調整が出現し、外面のヨコナデは、口縁部付近のみで、下半は、あらくナデるか、指押えのみである。さらにこの時期より底部の上げ底が目立つようになり、皿全体を、白色系が主流を占める。このような特徴は、平安京内膳町遺跡^⑥S K 386、S K 142出土資料^⑦、京都市同志社大学キャンパス内遺跡S K 2355出土資料にも同様に認められ、山城と河内との地域差は、あまり認められない。

16世紀代

当遺跡で検出している遺構、遺物の中で、この時期に属するものが最も多い。15世紀代同様土師器皿をセットとしてとらえることができ、細分をおこなうのに可能な資料が多い。基準遺構は、井戸33・溝1・土壇19などである。体部は、この時期でも前半は、大きく2段に外反するが、後半に入れると直線的に外反するようになる。口縁部の肥厚はなくなり、端部をつまみ上げる形態から、尖り気味につまみ上げる形態に移り、さらに、丸くおさめるようになる。なお、この時期の皿は、大部分白色系である。類例は、この時期は、さらに地域差がなくなる時期である。京都市山科寺内町遺跡第2号石室出土資料^⑧S D 41B、S D 170出土資料^⑨、伊丹市伊丹城などに求められる。

3. 今後の課題

以上のように、ごく大まかに、土師器皿の編年をおこなったが、今回は、整理作業中でもあり、年代推定の根拠を具体的にのべることはできなかった。そこで、編年をめぐる今後の研究課題をのべておきたい。

当遺跡においては、遺構より出土する遺物は、時期幅が大きく、一括にとぼしい。このことは、編年作業を実施するにあたり致命的な欠点であるといえる。従って、編年を組む場合、型式編年にとどまらざるを得ない現状にある。しかし、伴出遺物の検討、他の遺跡の類例を求めることにより若干の補いは可能である。伴出遺物は、各遺構とも比較的豊富であり、その種類も多い。13世紀代では、瓦器椀、土師器羽釜、播磨系鉢、白磁、青磁などより、その時期決定は可能であろう。14世紀代では、遺構、遺物とも少量で、もうひとつ判然としないが、13世紀代からの型式変化、あるいは15世紀代以前の型式変化を検討することにより、時期決定せざるを得ない。15世紀代は、地域差があまり見られないことから、平安京などの資料を検討し、類例を求めることができる。さらに、白磁などからの時期決定が可能であり、皿自体の型式あるいは調整上の特徴で、ある程度限定されると思われる。16世紀代は、遺構、遺物とも豊富であり、細分可能な時期である。この時期は、さらに地域差がなくなる。特に、内面見込みのナデによる稜の存在は、畿内全域の同時期の土師器皿に認められる特徴である^⑩。この他に、備前焼、常滑焼、白磁、青磁、染付などからの時期決定も有効な手段であると言える。

註

- ① 尾谷雅彦「井戸」(『長原近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』財団法人 大阪文化センター 1978年)
- ② 尾計雅彦「平安末期～鎌倉期初めの溝」(『長原近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』財団法人 大阪文化センター 1978年)
- ③ 横田洋二「出土土師皿編年試案」(『平安京跡研究調査報告、第5輯、平安京左京五条三坊十五町』財団法人古代学協会 1981年)
- ④ 鈴木重治・松倉和人『同志社キャンパス内出土の遺構と遺物・同志社校地内埋蔵文化財調査報告書資料編Ⅱ』(同志社大学校地学術調査委員会 1977年)
- ⑤ 平良泰久・伊野近富他「平安京跡(左京内膳町)昭和54年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概要』第3分冊・京都府教育委員会 1978年)
- ⑥ 前掲⑤
- ⑦ 前掲④
- ⑧ 宇野隆夫「京大病院遺跡出土の土器—古代末から中世—」(『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和52年度』京都大学埋蔵文化センター 1977年)
- ⑨ 前掲⑤
- ⑩ 『伊丹城発掘調査報告書Ⅲ』(伊丹市教育委員会 1978年)
- ⑪ この手法は、16世紀後半代に多く見られ、平安京、二条城、朝倉一乗谷、御着城、高屋城など畿内および、その周辺部に顕著に見られるものである。

調査及び遺物整理の実施にあたっては、左記の方々の参加があった。

青野正彦 朝倉厚 朝沼一彦 有山淳司 李礼子 池内昌剛 池田和則 伊藤康彦 稲垣義一
上野聖二 内尾恭子 内海進 東川剛 漆畑順道 枝文勝 大川衛 大村一人 金沢悟 上岡
弘 川添礼子 河村哲二 神田明志 北川明雄 崎文道德 木村豊 国忠進 国本隆 河野隆
小梅聖 小佐々明 小早川幸満 小松武久 佐々木広司 澤田英彦 塩川良男 下垣内東 杉
田得郎 高石俊哉 高野清隆 竹崎雅雄 田中良奎 谷川光郎 谷田紀子 寺脇成法 永正信
中田裕久 中村和浩 中山澄子 灘中彰平 仁枝功 西川健治 西川英俊 西村歩 野村泰嗣
橋本隆善 畑勝美 畑本政美 華山雲英 浜松栄作 林彰 半田正恵 堀内栄二郎 堀口淳一
真方広文 松本敏孝 宮崎恵三 宮田正夫 宮前明夫 村上昭二 室田克則 室谷勝美 森竹
彰世 山口弘 山口裕郎 山口靖弘 山本啓統 八幡敏男 百合寛明 吉田理 脇坂喜代志

若江遺跡発掘調査報告書Ⅰ

本文編

1982年3月31日

発行 東大阪市遺跡保護調査会

印刷 株式会社 中島弘文堂印刷所